

れども結婚當時の悦藏は人並すぐれて肥満してゐた。それは彼が偏食せず何でも食べたからであると、彼自身は信じてゐた。だから彼はいつも、きよのの作る家庭料理に舌鼓を打つて、家庭の食卓に就くことを非常な楽しみにしてゐた。多くの人は外國へ醫學・科學・哲學・宗敎學などの勉強に行く。けれども人間の身體に直接必要な食物の研究に行く人は少い。そこで悦藏は八箇月の豫定で、きよのを米國に行かしたものであつた。四歳を頭に三人の幼い子供を家に残して行く。きよのである。非常な決心と勇氣とを要したことであらう。外國へ女の身一つで行くのだから、始から西洋の船に乗つて西洋人ばかりの中で大膽にやつて行け。智識を取りに行くのだ。遠慮はいらない。引込思案は禁物だ。と、いふので汽船もサイベリヤ丸を選んで、二月十日にそれへ乗り込むことにしたのであつた。

悦藏に別れたきよのは、たつたひとり外國へ渡つて行き、サンフランシスコとバサデナで一箇月間研究してニュウヨウクに行き、そこで食物の研究をして、九月中旬にチャイナ丸で横濱の埠頭に着き、八箇月目で悦藏に迎へられたのであつた。

きよのが留守中の悦藏は随分多忙であつた。四月には八幡敎會史の概略を書いて湖はんのこゑ五月號の誌上に掲載した。これは後に悦藏と田中勝三・高橋卯三郎の三人で編纂した近江八幡基督教會略史の梗概であつた。六月號には、金は一體どこから來るのか。と、いふ質問に答ふる會計語と題する一文を書いて、大正十年十二月から十一年五月までの半年間に傳道團が遣つた金五萬七千八百八十

六圓の出所を明にし、建築設計と建築材料販賣などの収入で經營して行く近江基督教傳道團は、一切投機に手を出さず堅實と信仰とによつて進み、額に汗し腦漿をしぼり人世の荒浪を乗り切り溜りぬけつつ個人としては無産階級に屬し團體としては善き意味に於いて富みつつあるが、資本主義の觀念は毫末もなく、時來り神の命によりて財産の返還を命ぜられる時は喜んで我が事終れりと叫んで赤裸裸となるも毫末の遺憾はないのであると眞剣な叫びをなしたのである。

六月二十五日の夜内村鑑三を招いて敎會堂にて其の講話を聞いた。

十月號の湖はんのこゑ誌上に湖畔の人第二十四回を書いて一先づ擱筆した。此の一篇は大正九年の二月號から掲載しはじめて三年目である。この一篇は筆致が輕快で思ふ所を十分に書き得た會心の作であつた。文章家としての悦藏は此の一篇で世に認められたのであつた。

此の年ヴォーリズ建築事務所は毎月大多忙を極めた。北海道から九州・朝鮮に互つて二十有餘の建築設計を引受けた。中にも北海道の北星女學校・東京の瀧の川聖學院・同じく本郷の文化アパトメントハウス・京都大丸呉服店・加島銀行本店・ランパス女學院・神戸基督教青年會館・關西學院講堂及文科商科敎室・廣島女學校・福岡西南學院などは其の著しい部分であつた。

メンソレータムの賣上高も遂に二萬圓を突破した。それは販賣主任佐藤安太郎の努力で全國の基督教青年會・基督教婦人會・婦人矯風會・基督教主義の男女各學校への宣傳が其の效を奏したのであ



る。かうなると今までとは逆に賣藥業者から取次販賣を依頼に來はじめた。そこで佐藤安太郎はやがて一箇年十二萬圓は賣つて見せると豫言したのであつた。

## 十八、關東大震災

大正十二年

大正十二年に悦藏は三十四歳の春を迎へた。その四月に彼が湖はんのこゑ誌上に二十四回にわたつて書いた湖畔の人を、近江の兄弟ヴォーリス等。と、題して東京の警醒社から發行した。四六版二百ペエジで、賀川豊彦の跋文十二ペエジは名文である。

明治四十三年十二月に悦藏が現金九百圓を供出してメルル等と共に設立した小さい合名會社は今はもう百人に餘る同勞者を得て、和氣靄靄のうちに各自の持場で活動してゐる。悦藏はこれらの團員を慰勞せんが爲に、五月五日の夜七時から八幡教會堂に管絃樂の演奏會を催して、基督信者としての立場から清き娛樂の尊重すべき所以を説き、斯る音樂會の意義深きものなることを開會の辭に代へて演説した。

獨習でオルガンを弾きピアノを弾き笛を吹き歌を唄ふ悦藏が、當日招いた樂團は大阪花屋敷の素人管絃樂團に、音樂教師の犬井英夫のソロ獨奏を加へたもので二百餘の聽衆を満足せしむるに十分であつた。

つた。

前月四月十一日に米原紫苑會館幼稚園開園式を挙げ、きよのを初代園長とした。

五月二十一日から二十六日まで大阪市の誇とする大阪市立大運動場は觀衆を以つて埋められた。それは極東選手權競技大會が開かれたからである。此の時悦藏は大阪市長池上四郎から、推薦されて大會委員の一人となり、會長岸清一博士と委員長伊藤忠兵衛の依頼によつて、長くも總裁秩父宮殿下の御傍に侍つて、殿下とフィリッピン選手代表オシアス博士・名士ゴメス博士との御會話を通譯の榮譽を得たのであつた。此の時悦藏は、總裁の宮殿下が雨中をもお構ひなく會場を御巡視あらせられたり、優勝選手に一一握手を賜はつたり、新日本の青年達を鼓舞し給ふ御有様を眼の當り拜し奉つて非常な感激に浸つたのであつた。

六月初、彼は朝鮮から支那への旅行を企て、先づ神戸に行つて葺合の賀川豊彦を訪問した。死線を越えての一著で天下に名を知られた賀川豊彦は恐ろしい貧民窟生活をしてゐた。彼は賀川豊彦の生活を涙を以つて觀た。しかし新しい社會が貧富を押しなべて今の神戸の貧民窟のやうにするのは悪である。今の日本人の生活を何倍か何十倍か引き上げた生活にすることを夢みなければ社會救濟事業は嘘である。と、すれば、名士賀川豊彦を斯る不衛生な不潔な所に住はせる必要はあるまい。しかし、もしも賀川豊彦を立派な家に住はせたならば、貧民救濟を口にしながら自分は立派な家に居ると



いふ非難をするであらう。などと思ひながら神戸を去り、門司の基督教會で日曜禮拜を守つた。此の教會は長尾半平等の主唱で基督教各派を合同したのである。日本に於ける基督教は二十二派である。その各派が各自の小さい城廓を守つて互に小さい教理の争を續けてゐることの不可を彼は夙に感じてゐたのである。だから近江基督教傳道團は宗派を作らなかつたのである。

翌日彼は昌慶丸に乗つて朝鮮に渡つたが、商業學校にゐた頃修學旅行に來て見たところの朝鮮とは全く別個の感じであつた。京城の東大門の電車庫で、車掌運轉手が禁酒の決議をしたといふので講演を依頼され、信仰と人生の旅。と、題して禁酒獎勵の演説をしたのは彼が此の旅行中の不意の收穫であつた。

六月二十一日到北京の日本公使館から、白の國より淺葱の國へ。と、題する長文を湖はんのこゑ誌に送つて置いて歸路に就き、七月八日・十五日の兩夜八幡教會で其の漫遊談をして會衆を喜ばせた。

八月になると悦藏は例年の如く信州輕井澤の建築事務所に行つてゐた。

九月一日の正午前彼は町の書籍店に入つて洋書と書をあさつてゐると、不思議な物音で家がびしりびしりと動いた。驚いて街路にとび出してみると、電柱が帆柱のやうに動き電線が糸のやうに纏れ合つてゐるのを見た。歩かうとすると足がよろめく。山の家にある三人の子供の身の上を案じながら近

江園の方へ走つて行つてみると、子供たちは森の中に避難して無事であつた。

活火山淺間山の麓であるから誰しも淺間山爆發の前徴ではなからうかと、頻りに淺間山の頂上を凝視したが、淺間山は泰然自若として碧空の中に白煙一條を見せないでゐる。夕方になると人心も稍落着いたと見え、隣家の富豪の別荘では舞踏會が始まり夜をこめてのジャズバンドの音楽に合せて踊る男女の黒い影が窓硝子に映つてゐた。

その頃碓氷峠に登ると東南の間に火の光が見えるといつて多くの人人がそれを見に出かけたが、秩父・三峯の噴火だらうなどといふ噂で誰ひとり地震を豫想する者もなかつた。と、同時に淺間山爆發の前徴でないといふこともわかつたが、それでも多くの人人は、淺間山を眺めてゐた。

二日目の夕方になつて恐ろしい噂が傳はつて來た。東京全滅・横濱全焼・鎌倉陥没・大島沈没・富士山大噴火・革命騒動。等等。人間といふものは異常時に異常な虚言を吐きたがるものである。三日目から哀れな避難者によつて稍正確な報道が齎されたが、それでも暴動とか井戸へ毒藥を入れられたとか、諸種の信すべからざる流言が飛ぶ。はては暴徒が碓氷のトンネルを破壊に來るので高崎聯隊の兵隊が護衛に出たとか、途方もない蜚語が人の心を驚かした。

此の状態を見聞した悦藏は、斯る時、この恐ろしい世の中に神も佛もあるものか。と、思ふ人たちの無神説が相當な力で宣傳せられる事を恐れて、直に大震災と我等の行方。と、題する一篇を書いて



湖はんのこゑの讀者に警告を與へた。

東京附近に出張してゐた近江基督教團の團員も幸に無事であつた。妻きよのの弟渡邊均は神戸海上火災保險會社員として横濱支店詰となつてゐたが、どすん。と、一揺れしたと思ふと事務所は倒壊してしまひ、倒屋の下敷となつたが、幸にも窓際の間隙から脱出して横濱公園に逃げたが、そこも猛火に包まれ、二十時間の永い間そこで煙にむせんでゐたが、やつと生命を拾つて無事八幡町に歸つて來ることを得たが、激震のあつた日兄渡邊豊秋は神奈川縣廳にゐて幸に無事なるを得たが、海上火災保險會社支店が倒壊したと聞き駆けつけてみれば、もはや跡かたもなく焼けてしまつて、事務員は悉く焼死したと聞き、其の場で靜に祈り、再び出かけて其の焼跡から白骨の一部を拾ひ、それを小箱に收め、八幡町に持ち歸つて父渡邊光太に、せめてもの慰めにと其の小箱を渡さうとしたが、こはそも如何に、白骨と化した筈の渡邊均はちやうど其の時、八幡基督教會で自分の遭難談をしてゐる所であつた。

此の大震災のために建築事務所東京出張所は全滅し、セールズ會社の賣掛金の回収は不可能となり、京濱間に於ける設計すみの圖面は全部不用に歸し、財政的困難が一日にして不意に襲來したので、彼は八幡に歸つて團員一同と共に祈りのうちに一大決心を以つてますます結束を固くする誓約をした。百八名の團員一同は大正十二年九月一日を一劃期として宣傳よりも實行に入る第一歩を確實に

踏み出したのであつた。

斯くして十月五日に傳道部會を開き、今までの旅行的傳道から定住傳道主義に移り、米原に山田寅之助、今津と野田に鎌田漢三、多賀に武田猪平、湖聲社に高橋卯三郎、通信傳道部に増泉辰次、堅田に西村關一、武佐に柿元榮藏、八幡青年會に中村穰、清友園に加藤ふじ、大林に大原義雄を各主任として定住せしむる事となつた。謂ふ所の外國ミツションボウドから一錢の補助も受けざる完全獨立の傳道團が成立したのである。

年末に行はれたクリスマス祝會は、大林・長命寺・八幡青年會・武佐・野田・今津・清友園・日野・多賀・大原・水口・三雲・菩提寺・深清水・八幡教會・米原・堅田の十七箇所で行はれ參會者總計二千四百六十人を算する盛況であつた。

## 十九、堅田傳道

〓大正十三年〓

悦藏三十五歳の大正十三年三月一日の調査によると近江基督教慈善教化財團は、土地一萬七千九百五十一坪、建物七百七十一坪、船一艘を有し、近江一國の教化目ざして大活躍をしつつあるのであつた。



三月三十日に堅田傳道所で最初の受洗者七名を得た。近江基督教傳道團が此の地に定住傳道者を置くや、大正十二年八月十八日から一週間、堅田の佛教信者は耶蘇教撲滅大演說會を三箇所で開會して物凄く挑戦して來た。天理教退治・耶蘇教退治などは、先住宗教徒のよくやつたものであるが、宗教に關する限り、いつの世も迫害は無効である。つまり堅田に於ける七名の受洗者も佛教徒の一週間にわたる攻撃演說が生み出したやうなものである。

當時の堅田傳道は大坂なる自由メソヂスト神學校學生西村關一が受持つてゐたのである。

西村關一は膳所中學生であつた頃、馬場鐵道青年會館で毎週金曜日にウオーターハウスの聖書講義があるときいて、或日のこと二三の友人に誘はれて出席してみると、中學校の英語教師南石福次郎の通譯で聖書講義があり、讚美歌を歌ふ時悦藏がコルネットを吹くの聞いた。その時から彼はメレルを知り悦藏を知つたのであるが、いつの間にか聖書講義が面白くなり熱心に通つてゐるうちに、人生問題の解決は此の外になしと悟り、大正六年四月八日に大津組合教會で、馬場鐵道機關庫在勤の吉田政治郎と一緒に牧師三谷公一から洗禮を受けたのである。時に彼は膳所中學校の五年生であつた。

その頃の馬場鐵道青年會の幹事は元鐵道員の山田寅之助で、以前から武徳殿の柔道部で知り合つてゐたので、中村穰といつしよに青年會員となつて其の仕事を助けてゐたが、大正七年三月に中學校卒業後十九歳で古川拓殖會社に入社して比律賓に行くことになり、マニラで一箇月を過した後、六月四

日にミンダナオ島のダバオに勤めてゐたが、大正九年一月三十一日に退社して歸國し、山口縣秋吉に破落漢相川勝治を教化した本間俊平の居ることを聞き、そこに行つて一箇月の修養を経て、大正五年十二月一日に大津歩兵第九聯隊に一年志願兵として入營し、大正十一年三月三十一日に見習士官として除隊になつたのである。そして翌四月に小田原に行き土木請負業田中捨吉に身を寄せ熱海線の鐵道工事にしるしばんてんを着て立働いてゐるうちに、勞働過激のために發病して六月下旬に大津の父の家に歸つたのである。

西村關一の父は大津で有名な俠客常世川で、田中捨吉はその乾兒だつたのである。常世川は清水次郎長の乾兒で殆ど神の如くに次郎長を尊敬して、毎年一月一日には子供達の書初に山本長五郎様の六字を書かせた程であつた。さうした血を受けた西村關一である。彼は病氣療養中近江基督教傳道團に入團して青年會館の幹事をしてゐたが、大正十二年四月から大阪の自由メソヂスト神學校に入學する事になり、勉學中毎週土・日・月の三日間堅田に出張して、そこで一箇月三十五圓の報酬を得て、それを學資と旅費に當て、熱心に傳道した結果、滿一箇年の後に七人の受洗者を得たのである。しかし、それは西村關一ひとりの功名手柄でなく、悦藏・村田幸一郎・ウオーターハウス・武田猪平・高橋卯三郎・メレル等が長い間の苦心の結果であることを忘れてはならない。

翌四月に西村關一は陸軍歩兵少尉に任官されたのである。



九月五日付で悦藏は彦根高等商業學校の講師を囑託された。悦藏は謂ふ所の尋常商業學校四箇年修學以上の學歴はない。けれども彼はメレルと同居してゐる時晝夜を別たす英語を勉強した。足かけ三年間外國に行つて來た。だから彼の英語は完全に近かつた。彼が英語に堪能な事をよく知つてゐたのは友人藤野三一であつた。藤野三一は伊藤忠兵衛と従弟である。で、極東オリンピック大會の際藤野三一は委員長である伊藤忠兵衛に悦藏を推薦したのである。伊藤忠兵衛は大阪市長池上四郎と共に悦藏を大會委員の一人として、秩父宮殿下とオシアス博士の御會話を通譯申し上げた事が縁となり、滋賀縣知事から彼を彦根高商の講師に推薦されたのである。

講師にはなつたが、さてどんな事を教へてよいかわからないので、取敢へず外語雜誌を學生と共に讀んだ。英語ばかりで話した。商業道德と宗教の關係を語つた。それが學生達を非常に喜ばせた。

高商講師の辭命を受けた少し前の事であつた。彼は輕井澤の建築事務所で希夫からの端書を受取つた。今年八歳になつて尋常小學一年生として四箇月の學校生活を経験して、片假字を全部覺えた愛兒希夫からの通信である。

ババシアサテカラガコーガヤスミデス。

ハヨコーベニツレテカヤ

アシタカヘリヤ

ババドコニイルカ

カリザハニイテルカ

トーキョーニイテルカ ドチヤ

サイナラ

彼は此の端書を讀んだ時どんなに嬉しかつたであらう。大正六年十月四日午前二時四十分には呱呱の聲をあげた重量七百四十匁であつた赤ん坊が、はやくもこんな端書を書くやうになつたのである。それにつけても想ひ出されるのは彼自身此の年頃のことであつたらう。毎日のやうに酒臭い息を吐きながら母をいぢめ通すので、遂に堪りかねて幼い彼を家に残し置いて生家に歸つた母へ、さみしいから早く歸つて来て下さいといふ、希夫と同じく片假字で書いた端書を母に送つた彼である。その頃の自分の身に引較べて、彼は吾が子の幸福をどんなに感謝したことであらう。絶間のない夫婦喧嘩の中に育つた彼である。然るに宗教を信じたおかげで、一滴も酒を飲まない父と、その父を上なく信頼してゐる母とに育てられる吾が子の爲に、彼は感謝の祈りを捧げずにはゐられなかつたのであらう。

吾が子の書いた最初の端書。彼はこの端書を死に至るまで大事に大事に保存したのである。幸福な愛兒のこの端書を。……



十二月十八日に彼は彦根高等商業學校長中村健一郎から一通の書留郵便を受取つた。開封してみると、職務勉勵に付金三十圓を賞與すといふのであつた。

## 二十、二十年の後を見よ Ⅱ 大正十四年 Ⅱ

大正十四年になつた。悦藏は三十六歳である。彼は前年十二月號の湖はんのこゑに掲載しはじめた湖畔雑話の第二回を二月號に掲げて外套の話といふ小見出しをつけた。その内容は彼が新に出来た青年會館で數名の學生達と一緒に暮してゐた頃、警察署から出頭を命ぜられて行つてみると、署長から君は近頃悪い所へ遊びに行くだらう。と、訊ねられたが、意味がわからないので聞き返してみると、署長は彼に一冊の帳面の或ベエジを見せた。そこには、彼が某樓に登つて娼妓梅龍を招き親子井とすし二鉢を取り酒三本とビール一本とを飲んだ事が明記されてあつた。調べてみるとそれは二回や三回ではなかつた。彼は怪みながら會館に歸つたが翌晩十時すぎに何氣なく廊下に出て見ると長押に掛けてあつた帽子と外套とが消えてゐた。ところが翌朝の五時頃には外套も帽子も元の所にちやんと掛つてゐた。此の時彼は自分の帽子と外套とが夜間竊に青年會館を脱け出でて娼妓梅龍に戯れたのであるといふ事を知つたといふ十三年前の追憶談であつた。

二月の或日近江療養院の炊事室が失火の爲に焼失した。事務員の河瀬忠一は責任者として詳細なる始末書を作つて悦藏の所に持つて行つた。彼は悦藏から叱責せられる事を覺悟してゐたが、悦藏はその始末書を一通り読んで、おう、立派な始末書が出来たなあ。と、言つただけであつた。河瀬忠一は悦藏の寛大な性質であることを以前から知つてゐた。彼は大正十一年十二月一日に始めて建築事務所働くことになつて、入團したのであつたが、丁度その時事務所では大阪の大同生命ビルディングの大工事を引受けてゐたので、村田幸一郎の下で働くことになり、悦藏の所へ挨拶に行くと悦藏は彼に對つて言つた。建築の仕事は面倒なものだ。小心者は氣が狂ひさうなほど苦しい事がある。けれども其の問題は大抵金で片付く。金錢よりも魂は大事だから、どんな事があつても信仰の道を踏み外すな。金の方はわしが引受けるから。と、言つてくれた時から、彼は深く悦藏を信じてゐたのであつたが、此の時更に悦藏の寛大さを見直したのであつた。彼は近江療養院に歸つて友人に語つた。吉田さんに炊事場を焼いたことを賞められに行つたやうなものであつた。けれども此の賞められやうは叱られた以上に膽に銘じた。

今年の二月二日はメレルが日本へ來てから滿二十年である。二月二日に近江基督教傳道團ではその記念會を開いた。その席上でメレルは語つた。自分の標語は二十年の後を見よといふのである。しかしそれは一定の時から二十年後を指したのではない。いつでも二十年の後を見よといふのである。自



分は八幡へ来て今日で滿二十年になる。しかし二十年以前に自分の懐いてゐた理想の目を以つて今日を見ると、寧ろ信仰も努力も當初に比して甚だ衰頹してゐることを感ずる。……

メレルはさう言つて涙を流した。悦藏は湖畔のこゑ誌上で其時の有様を記述して、吾等の團體は世界各國に模範を示すべき新社會の最初の試験場であると道破たし。

三月七日午後六時近江基督教傳道團牧師武田猪平は永眠した。三月九日に八幡教會で執行した葬儀中、悦藏の朗讀した一文に因ると、彼は越後村上町の生れで父大和田清晴は醫者であつたが、酒癖の病があつた。然るに押川方義の説教を聞いて感ずる所あり、斷然禁酒して洗禮を受け後には醫業をも廢して直接傳道に従事し、一子猪平を京都の同志社に送つて牧師にしたのである。武田猪平は同志社神學校を卒業後直に新島裏の出生地上州安中教會に赴任した俊才であつた。後に兵庫教會に移つた頃悦藏は彼の説教を時時聞き、母りうも時時彼の訪問を受けたのであつた。そんな縁故で悦藏が同志社總寮長及宗教主任である彼を近江基督教傳道團の牧師として招聘したのは明治四十三年四月であつたが、當時は彦根教會を兼收してゐた。そして大正四年十二月から八幡町に移住しガリヤ丸に乗つて毎月琵琶湖岸七十里の津津浦浦に巡回傳道を試み、その他近江一國を隈なく巡り熱さも寒さも恐れず熱心に傳道せられたのであつた。

六月六日の傳道團例會で村田幸一郎は大同生命ビルディング竣工の報告をした。大同生命ビルディ

ングは大正十一年十月に起工して足掛四年滿二年七箇月の期間と四百萬圓の工費で出來上つた十階建五千坪の大建築であつた。この建築が四階までの骨組を終つた時、關東大震災の餘震を受けたので徹底的補強工事を加へて完全なる耐震建築としたのであつた。この建築工事に始終關係した村田幸一郎の苦心談的報告を原仙太郎が代讀したのを聞いたメレルは、これこそ大きな説教であるといつて感激した。新築披露は五日から十五日まで続けられたが、その最後の日メレルと満喜子はプレジデント、ウキルソン號で横濱を出帆した。二人は二十四日にホノルルに着いて、やがて開かるべき汎太平洋問題協議會に日本の女子を代表して出席する満喜子、宗派と教理の紛争に疲れてゐる米國の基督教會と拜金主義と、利己主義に傾きつつある米國の社會情態を見るに忍びずとして一掬の靈的清泉を彼らに注がが爲に此の旅行を企てたメレル。二人は頗る元氣でホノルルのあちらこちらで講演をしつづけた。

メレルが長途の旅行をするので、悦藏は彦根高商の講師を辭したのは七月の初めであつたが、辭令は九月十五日付で送つて來た。

七月一日に栗本清次が近江療養院の醫師として赴任して來た。悦藏はこれを近江療養院の火の中に飛び込んで來たのだと言つた。當時の療養院長は博士諏訪整一であつたが、これは大阪から一週一回の出張であつた。定住して日夜診療に従事する醫者が必要である。けれども適任者が無い。富永孟、



江龍一彦の去つた後金澤醫學士の松本永周と慈惠醫學士の田中敏夫が主として治療に従事してゐた。その頃近江基督教傳道團に働いてゐた野島進は東京芝白金の明治學院卒業生であつた。彼は郷里金澤市にゐる頃日曜學校で松本永周から聖書の話を受へられたのであつた。そんな關係で松本永周は野島進の手引きで近江療養院に來たのである。

或日悦藏は松本永周に、信仰の篤い善い醫者を備ひたい話をした。すると松本永周は自分の友人に栗本清次（當時大沼清次）といふ同窓生がゐることを話した。栗本清次はその頃福島縣の大原病院にゐた。日本中に醫者は多くあるが熱心な信仰をもつた醫者は少い。で、悦藏は傳道團の人人と相談の上、すぐ福島市まで出かけて行つて栗本清次に會つてみると、栗本清次は金澤醫專を卒業した後、東京の聖路加病院で婦人科を研究して來た婦人科の専門醫であつた。そこで悦藏は栗本清次に婦人科専門を呼吸器病科に轉ずることを勧めた。無論醫者であるから何科でも一通りは心得てゐるが、専門になると更に研究をしなければならぬ。研究をするについては醫員を辭職しなければならぬ。自分は醫學校を卒業する爲に兄から四千圓の學費を借りてゐて其の返済義務がある……栗本清次の答は斯うであつた。そこで悦藏は、四千圓のうち先づ一千圓だけはこちらで出さう、殘金はそのうちに何とかするから、至急轉科して呼吸器病科を研究してくれ。そして近江に來てくれ。と、頼んだ。栗本清次は一面、團の精神に共鳴し、他面、悦藏の熱心にほだされ、友人松本永周と一緒に勤めることにな

つて、遂に近江療養院に來たのである。當時の近江療養院には吉田きよのの父渡邊光太が事務長をしてゐたが、更に古參の事務員西川與三郎がゐた。西川與三郎は元救世軍の兵士であつたが、胸を病んで近江療養院の前身時代に治療を受けて全快したので、大正七年五月の近江療養院開院以前大正五年十月一日に近江基督教傳道團に入團して診療所の事務を執つてゐたのである。

栗本清次が來任した後悦藏は妻きよのと共に大阪醫科大學第三内科部長今村荒男を訪問して、近江療養院の後援を請うた結果、阪大から福富徳太郎が一週一回出張することになつた。そこで湖はんのころ八月號には、本館外分館九棟の堂堂たる寫眞入りの廣告を載せ、院長醫學博士諏訪登一・金澤醫學士松本永周・同栗本清次・長崎醫學士山本常夫・醫學士福富徳太郎・藥劑師辻好之・事務長渡邊光太・事務員西川與三郎の名を列記したのであつた。

八月になると悦藏は富士山麓御殿場の基督教青年會夏期學校講師として招かれ東山莊で近江基督教傳道團の過去現在を語つて聽衆に多大の感激を與へたのであつた。十八日十九日の兩日は滋賀縣内の教役者全體を堅田魚清樓に招待して柳原貞次郎・河邊滿麿の講演を聴いた。

八月に發行された近江ミツション・ハンド・ブックは悦藏の著で、これに因ると此の年までに、悦藏・メレル・村田幸一郎の三人が組合員として經營する建築事務所が設計した工事は住宅百六十四、學校・圖書館・寄宿舎が百十八、會堂・音樂堂・講堂等が百十四、銀行・會社・デパートメントスト



ア等が二十四、病院が六といふ統計になり、合計四百二十六軒の設計をしてゐる。近江療養院は大正七年六月に開設して以來八十二箇月間に二千七百三名を診察治療してゐる。悦藏が理事長である近江基督教慈善教化財團の資産は合計二十六萬四千九百五十一圓七十二錢に上つてゐる。そして此時彼は近江セールズ株式會社の取締役であり、近江基督教慈善教化財團の代表理事であつた。

斯る多忙なる事務を處理しながら此の年の十月に彼は妻きよのを伴れて滿鮮ところどころの旅を續けて來たのであつた。

北の庄の納骨堂恒春園も此の年八月に礎石を据ゑたのである。

## 二十一、二人の教友

大正十五年

大正十五年悦藏が三十七歳の春を迎へた一月八日に北の庄近江療養院の敷地買入に多大の盡力をした林喜平治が亡くなつたと聞いた彼は、直に駆けつけて靜に永眠した姿に合掌した。曾て遠藤觀隆が小さい養生小屋の中で病死したのを、此の林喜平治と二人で、北の庄の墓地に葬つたのはもう十年の昔になつてゐる。翌日の埋葬式に彼は林喜平治の棺に土を蔽うたあとで、遠藤觀隆のありし日の僧形を追想しつつ其の冷い墓石に向つて心からの祈りを捧げたのであつた。

二月から八日市飛行聯隊から將校團に英語教授の交渉を受け、青年會館の英語部がそれを引受けることになり、第一回講師として悦藏が出席した。

明治四十五年七月三日に、悦藏・メレル・村田幸一郎・武田猪平らの説教を聽いて決心した安土の岡田金一郎は七月七日に永眠した。岡田金一郎は清教徒的性格の持主であつたが、基督教を聴くまでは、人生問題の解決を哲學に求め宗教に求めて遂に得る所がなく、自殺を企てた程であつたが、始めて悦藏らの説く基督教を聽いて人生の行手を發見したのである。彼が基督教を知つた時長濱教會で受洗した田中龜太郎が安土に歸つて來たので、二人は兄弟の如くに交際して大正元年に受洗したのであるが、性急な彼は直に安土山麓の自宅を開放して講義所とした。安土研究に深い興味を有した悦藏は此の岡田金一郎の改心に異常な感激をもつて、熱心に毎月彼の講義所へ傳道に行つたものである。悦藏の行けない時には清水安三が行き武田猪平が行き高橋卯三郎が行つた。そのうちに岡田金一郎の傳道心は自宅だけで満足出來ず、能登川・愛知川はじめ十二箇町村に傳道所を設けて自ら出張傳道をした。紡績會社・蚊帳會社・工業試験所など人の集團する所へは遠慮會釋なく押しかけて行つて道を説いた。彼は曾て宣言書を發表して言つた。イエスは我れ律法と豫言者を捨つる爲に來れりと思ふなかれ、われ來りてこれを捨つるにあらず成就せんが爲なりと曰うた。自分は此の聖書を讀んで多年求めて得なかつたものを得た。爾來此の自分の得た安心と幸福とを他に頒たんが爲斷然自給傳道を終生の



事業と決定した。それは此の安土の地に神の國を建設せんが爲である。此の理想を實現する爲には總ての物を犠牲に供して奮闘努力するの覺悟がある。と。かくて彼は東奔西走して福音を宣傳しながら毎月一回安土の潮と題する雑誌を發行して多少の反響を呼んでゐた。彼は常に泣いて祈つた。そして説教毎に十字架の旗を捲くなど激勵したのであつた。大正十五年七月に彼は八幡町に来て近江基督教傳道團を訪問しての歸途、一人の納豆賣に出逢つた。見れば最近まで安土に勤務してゐた警官であつた。彼は其の著しき職業の變化に同情して其の賣残りの静岡納豆を買つた。そして其の納豆に中毒して亡くなつたのである。悦藏は此の熱血漢の死を悼んで祈つた。一月一日の朝降りしきる雪の中を彼の宅に訪うて共に祈り共に語つた時の事やら、醉漢に愚問を續發せられた時の事が、それからそれへと思ひ續けられたことであつたらう。

七月十八日に東京日本橋區數寄屋町なる春秋社から湖畔聖話を發行した。四六版二百八十二ページで定價は一圓六十錢であつたが、發行後十日にして第四版を印刷した。巻頭には賀川豊彦の吉田悦藏紹介文が序文として載つてゐる。

九月一日に悦藏と共に滋賀縣立商業學校に學んだ古長清丸が近江基督教傳道團に入團した。彼は村田幸一郎・山本治三郎らと同級で悦藏よりも一級上であつた。彼は在校中目立つて美しい風采の生徒二名を見た。自分達が小倉服を着てゐるのに其の二名は羅紗服を着てゐる。しかも色白の好男子であ

る。その一人は豊岡から來てゐる原林三で、他の一人は兵庫から來てゐる悦藏であつた。彼等はこの二人を若さんと綽名で呼んでゐた。随つて彼はこの二人と親密にしないのみか幾分か敬遠してゐた。そのうちに彼はメレルが魚屋町に開いた聖書研究會に出席して親しく悦藏と交るに至つてから、曾て自分が敬遠してゐた悦藏は毫も自分を嫌つてゐなかつた事を知つて、爾來非常に懇意になり、時時魚屋町のメレルが家にゐる悦藏を訪問してゐたが、彼はそれ以前八幡教會の傳道師濱田乙鷹に導かれるたので、明治三十八年四月二十三日に受洗したのであつた。その後學校内に基督教排斥の氣運が漲つて來た頃、彼は或日の夕方散歩よりの歸途神社前の橋上から川の中に投げ込まれた事もある。彼は明治三十九年に商業學校を卒業したが、在校中簿記學に得意だつたので、卒業後出雲の松江、朝鮮の釜山で商業學校の教師となつて簿記・會計を教へてゐたが、後に大阪へ轉任してゐるうちに、大阪驛でばつたり出會つたのが曾て同級生であつた村田幸一郎であつた。それは實に卒業後二十二年目の大正十五年六月の或日であつた。けれども御互に顔は見忘れてゐなかつた。やあ。やあ。で、二人は暫く立話をしたが、其時村田幸一郎が、歸つたらどやいな。と、言つた一言が元となつて、其の夏休みに彼は當時大阪に在任中の村田幸一郎を訪ねて、入團についての相談をした。で、村田幸一郎は輕井澤の建築事務所にあるメレルと八幡に居た悦藏に其の由を手紙で言ひやると、二人は此の昔の小鳥がその古巢へ歸りたいといふ希望を非常に喜んだと見え、直ちに電報を打つて來た。電文に曰く、ダイサ



ンセイ。

斯くて悦藏は信仰の教友岡田金一郎を天國に送つたかほりに先輩古長清丸を自分達の團體に迎へ入れたことを喜んだのであつた。

十二月十五日には彼が六年前に書いた近江の兄弟等が増補出版された。

## 二十二、母　こ　ろ　　|| 昭和二年 ||

昭和二年悦藏は三十八歳となつた。雑誌女性の新年號に下村海南の近江兄弟物語が掲載され近江基督教傳道團の事を好意を以つて紹介されたのを讀んだ悦藏は、あまりに賞められすぎて汗顔の至りである。汝すでに報いを得たりであるが、斯る時麻を着灰をかむるべきである。と、言つてゐる。

一月四日から四日間膳所同胞教會で矢部喜好の開催した農村文化講習會で悦藏は近江傳道に對する理想を講演した。それから豫て建築中であつた兵主村の野田の基督教青年會館が落成したので九日から三日間記念傳道をすることになり、第一日の建堂式には悦藏・賀川豊彦外九名が二臺の自動車に分乗して雪路を突破した。そして直ちに講演會を開いたが、その夜は賀川豊彦の一人演説を聴く爲に三百人の會衆が群り來つた。會の終つた後賀川豊彦は會館二階の襖五枚にカルバリ山の三つの十字架を

描いた。雄渾と云ふべきか悲壯と言ふべきか。恐らく豊彦畢世の大作であらう。十日・十一日の兩日は大橋五男の講演があつた。

湖畔の聲三月號第百六十九號は新装されて出た。その卷頭言に、湖畔の聲は大正元年の誕生である。年を重ねてもう十六歳である。肩あげを取つてそろそろ青年の仲間に入らねばならぬ。いよいよ御覽の通り新装して肉も骨も丈夫になつた。吾等は本眞劍の祈の中に此の新装した湖畔の聲を諸賢に捧げる。と、宣言して花花しく打つて出た。内容は悦藏の文章三篇、高橋卯三郎の使徒行傳解釋、御曹子高橋虔のベストロッツチを憶ふ、金子白夢の詩と哲學と宗教などがあつた。けれどもまだ肩あげの取れたばかりの此の雑誌の題號は、湖畔の聲・湖はんのかゝ・湖畔の聲・湖畔之聲・湖畔ノ聲・湖畔之聲などと名前の書方が一定してゐなかつた。これが湖畔の聲と決定したのは六年の後昭和九年一月であつた。

三月の末西村關一はいよいよ神學校を卒業して堅田に定住して傳道することになり、四月二十五日には錦織雪枝と結婚の式を挙げた。錦織雪枝の父錦織雅太郎は近江源氏佐佐木家の臣下錦織源五郎の子孫である。錦織源五郎は堅田鮎を年年將軍家に献じたので源五郎鮎の名と共に錦織家の名を世に知らしめたものである。

此の月西村關一と同じく自由メソヂスト神學校を卒業した内炭政三は水口教會で傳道することにな



つた。

湖畔の聲五月號に悦藏は母ごころと題して浦谷貞吉の母の事を書いた。家も田も悉く賣り拂つて遊蕩に耽つた浦谷貞吉は、八幡基督教青年會館の料理人をやめて上京した後間もなく白骨となつて歸つて來たのは明治四十四年であつた。放蕩無頼ではあつたが、後には悔改めて基督教を信じた浦谷貞吉は、野田に基督教を導き入れた一人であつた。彼の母は此の放蕩息子の一息子に先立たれたが、わしは貞吉の骨を壺に入れて置いたのや、丁度今年は十七回忌ぢや、わしは此の子が可愛うてならん、此の子はわしを苦しめに生れて來たのやが、わしは貞吉がいとしい、貞吉の骨をわしに抱かせて埋めて下さいよ十七回忌やからな。と、言ひ通て三月の初めに亡くなつたのである。悦藏は此の地獄へでも極樂へでも放蕩息子の白骨をたいて行く母心を書いて、涙と合掌と祈りによつて此の母の心を察したのであつた。放蕩な父、慈愛深き母、その二人に早く別れた彼にして始めて此の浦谷貞吉の母の心根がよくわかるのである。

湖畔の聲七月號第七十三號から彼はナザレのイエス一代記を掲載しはじめた。彼が始めて聖書を手にしたのは十六歳の時であつた。それから約二十三年間彼は聖書を毎日のやうに讀んだ。聖書研究に關するいろいろの書物を可なり數多く讀んだ。のみならず二十三年間の信仰生活はイエスの心理を

も稍諒解することが出來たやうに思はれた。しかし今まで讀んだ多くの基督傳に彼は尠からぬ不満をもつてゐた。それは悉く外國人の書いた基督傳だつたからである。そこで彼はサザレのイエスの一生を大和心にはつきりと映してみたいといふ信念から此の傳記を書きはじめたのであつた。

八月三十一日に高橋虔は外遊勉學のために横濱から加賀丸に乗船したので悦藏は手紙を書いて激勵した。

十二月三日に悦藏は別府に着いて三日間大分高等商業學校其他で講演後肥後から長崎に入り、十日十一日の兩日浦上の天主堂に在り日本羅馬法王廳使節ギアルデイニに面會して基督教聯盟を更に一進せしめて基督教徒聯盟たらしむべき話をした。基督教各派が一つになるといふよりも、先づ基督教徒が一致團結する必要があるといふのであらう。

### 二十三、團扇二十萬本

昭和三年の新春を迎へた。悦藏は四十に手の届かんとする三十九歳である。けれども彼は正確に言つて三十七歳九箇月であるといふ。その三十七年九箇月中の二十四年間、彼は聖書を讀み通し祈り通して來たのである。十七年前に三人で合名會社を設立した時の事を想ふと感慨に堪へないものがあつた。何となれば此の時の近江基督教傳道團員及び其の家族は百九十二人の多數に上つてゐるからであ



る。更に溯つて魚屋町組時代から此の年まで始終連絡を保つてゐた五人が初週祈禱會で顔を合せた。それは宮本文次郎・村田幸一郎・古長清丸・佐藤久勝の四名と彼とであつた。

一月十六日に彼は母校滋賀縣立八幡商業學校講師を囑託せられた。嘗て蒼白い顔の弱弱しい生徒であつた彼が、今は五尺七寸二十四貫の體軀をもつて以前自分が教へられた教場へ教師として臨むのである。しかも彼は此の八幡商業學校四箇年の勉學以外どこの學校へも入らないで、必死になつて獨學して得た學力を提げて壇上に立つのである。生徒達は彼の獨特な實際的の教授法を非常に喜んだ。彼が教壇に立つて切に感じたことは、二十三年前に基督教信者であるが故に生徒から教師から毎日のやうに嫌がらせを言はれた事である。然るに今日はもう生徒中に多くの基督教信者があるばかりか、彼の講義中に自分の信仰を自由に語り得ることであつた。

二月の二日から四日までの三日間、悅藏・高橋卯三郎・矢部喜好の三人が講師となつて野田村で基督教青年會冬期修養會を開いた。野洲郡仁保川尻の兵主村野田の基督教會員は全部真正正銘の百姓であることを誇とする此の修養會費は玄米二升と金二十錢であつた。

本年の復活祭は偶然にも釋迦の誕生日である四月八日に當つた。此の日メレルが始めて八幡町に来て聖書研究會を開いた時聴講したに拘らず今まで信仰を攫むことの出来なかつた今の三興株式會社重役の藤野三二が蘆屋教會で受洗することになつたと聞いたメレルは、二十三年前のありし日を追憶し

て喜ぶこと限りなく其の顔は天日の如くに輝いた。祝意を表する爲に蘆屋に駆けつけた悅藏は其の夜同教會で宗教生活の實際化と題して語つた。

四月二十八日から三日間、全國新聞通信傳道同盟協議會を八幡町で開くことになつて、近江基督教傳道團が萬事の斡旋をした。メレルは近江八幡を世界の中心だといふが、日本の基督教の中心が近江八幡であるやうな形勢が見えて來た。

七月二十日から一週間御殿場の東山莊で催された基督教青年會夏期學校で、メレルと悅藏は其の講師となつた。その二十五日にメレルが悅藏の通譯で近江基督教傳道團の過去と將來の使命について語つた話は百餘名の會員をして潜然として泣かした。會の終つた後笹尾条太郎の發起で此の感激に充ちた話をきいた此の日を記念して毎月二十五日を近江基督教傳道團の爲に祈る祈禱團員の募集をして多くの加盟者を得たのであつた。此の光景を目にした悅藏は泣いて言つた。嗚呼近江基督教傳道團よ、汝は多くの證人に雲の如く圍まれてゐる。されど未だ血を流すまで罪と戦つた事はない。今後眞に十字架を負ひ得るや否や。と。

此の月かねて註文してあつた平井樸仙ゑがく團扇二十萬本が出来て來た。それはメンソレータム販賣の宣傳用である。メンソレータムの七字の文字の入つた團扇が二十萬本も全國に配られるやうにな



つたといふ一事で、メンソレータムが家庭常備薬として如何に普及してゐるかといふ事が想像される。

メレルと悦藏とが外國土産としてメンソレータムを持ち歸つてから、もう十五年目である。佐藤安太郎が専心此の販賣に努力しはじめてから早や九年の歳月を経てゐる。彼が年額十二萬圓を目標としてから七年目である。その七年間に今はもう宣傳用の團扇を二十萬本も作るやうになつたのである。

此の頃メンソレータムの宣傳部に諸川稔(庄三)がゐた。彼は丹後宮津奥の京都府中郡峯山町の産で京都第二商業學校の出身である。父爲藏が熱心な基督信者で武田猪平をよく知つてゐたので、彼は、大正十二年六月三日に武田猪平の紹介で入團したのである。最初彼は煖房部に働いてゐたが間もなく佐藤安太郎の主任をしてゐるメンソレータム販賣部に移つて發送部の仕事をしてゐた。

これまで同團の傳道と建築部とに主力を注いでゐた悦藏は、佐藤安太郎の努力の成果を見て此の頃から其の商才をメンソレータムの販賣に向け初め、佐藤安太郎を激勵すると共に諸川稔を宣傳部員として渡邊清春らと共に大活動を開始した結果、前年末昭和二年には年額三十萬圓以上の賣上高を見たので、佐藤安太郎は販賣目標額を一躍十倍して百二十萬圓としたのであつた。やがて百二十萬圓を賣れば彼の目標は更に一千二百萬圓に飛躍するであらうと悦藏は言つてゐる。

兎に角メンソレータムの能く賣れるやうになつた事は此の年の三月から専門の包装係として數十名の婦人勤務者を備へ入れた事でも明かである。

これまでメンソレータムの廣告圖案は種種雑多であつたが、大正十一年三月號の湖はんのこゑに掲げた三オンス入硝子容器の繪が一番成效してゐた。後日此の容器を日本で製造することになつた時、京都帝國大學教授工學博士澤井郁太郎から多大の助言と指導とを受けたのであつた。

八月廿日から廿二日まで第四回滋賀縣下教役者修養懇親會を近江基督教傳道團の招待で日吉神社大鳥居前の坂本美容園で開かれた。

六月二十二日に横濱を出帆した團員鎌田漢三は八月十二日に米國の世界日曜學校大會から歸つて來た。同行の佐藤久勝は大會終了後米歐視察の途に上つたのであつた。

湖畔の聲九月號に悦藏は岡崎益太郎君を憶ふ。と、いふ一文を載せた。岡崎益太郎は鳥取縣西伯郡彦名村の産で十歳の時母に死別して以來不遇な境遇に生ひ立ち後に大阪で洗濯屋を開いて成功したが、いつしか酒の味を覺え酒癖の爲に店を畳み放浪生活に入らなければならなくなつたが、近江療養院が基督教主義で設立せられてゐると聞き、そこに入つて働けば禁酒の實を擧げる事も出來ようと尋



ねて来たのが八年前であつた。その爲彼は近江療養院の洗濯係になつてゐたが、どうしても禁酒が出来ないで苦しんだ。それを全く禁酒させたのは醫員松本永周の力であつた。彼は禁酒後洗濯屋の太公さんと呼ばれ、禁酒宣傳數へ歌を作つて歌つたり、禁酒宣傳の浪花節を語つたり、路傍演説をしたりして近江の禁酒事業の陣營には無くてならない一員となつてゐたが、八月七日の夜八幡町から北の庄へ歸る途中、同じ療養院使用人某に毆打されて不慮の死を遂げたのであつた。悦藏は彼を禁酒運動の殉教者として悲しんだ。

九月二十八日から十月二十五日まで、悦藏はメレルと二人で滿鮮の旅行をして来た。此の旅行前の九月二十三日は傳道團の例会を開いてゐる所へ蒲生郡日野在内地の熱心なる基督信者の醫師河村五十鈴が駆けつけて来て、彼が獨力で大字豊田の爲に建設しつつある豊田基督教會館が村民の反對で取毀されさうだと訴へて来た。それは淨土眞宗の一村一寺主義すなはち一村一宗主義實行の結果であつた。基督の調査によると近江の人口は七十一萬餘、それに佛教の本山が五箇寺、寺院住職が二千七百十六人で、管長職員を合すれば三千人に達する。ところが近江の基督教會は總數十六、傳道者十六人で、熱心に日曜禮拜を守る者は約四百人である。七十萬人中の大人千人に對して一人といふ計算になる。そこで悦藏は近況録でこんな事を言つた。千人に一人のキリスト信者は一人當千です。一騎當千と言ひたいが馬を所有して居る信者は一人もありさうでないから一人當千と言つて置く。と。一人

千では河村五十鈴の獨力が一村の大衆に敵しないのは當然であらう。

悦藏とメレルが滿鮮旅行を終へて歸つた二日後の十月二十七日に再新造ガリラヤ丸は午後一時からメレル・悦藏・村田幸一郎等十八名を乗せて處女傳道航海の途に上り、堅田・雄琴・和邇の各地で路傍説教をしたり合唱會をしたり操り人形を見せたり小冊子の配付をしたりして二十八日の夜無事に歸幡したが七回の集會に聴衆六百人を得たことを喜んだ。

ガリラヤ丸が新造せられたのは大正三年であつたが、六年前に大改造を加へて福音宣傳の御用を勤めて十四年の長い年月を過したので今度四千圓を投じて新しく造つたのである。その進水式は九月十三日に大津桑野造船所で舉行して、メレル・悦藏の歸りを待つてゐたのである。

十一月一日に悦藏夫婦の媒介人で鎌田漢三と中村糸子の結婚式を八幡教會で擧げた。司會者は村田幸一郎でメレルがピアノを弾いた。講壇の前に美しい緑のアーチを造つて莊嚴な儀式を終つた。

鎌田漢三は近江基督教傳道團から内地留學生として東京青山學院に送られ大正十二年に卒業歸國した後大正十五年から今津傳道に従事したが、當時は一人の信者もなく、非常に傳道困難であつたがガリラヤ丸の來援は此上もなき力であつた。何となれば今津から大溝までの沿岸はウオーターハウス・武田猪平・悦藏の三羽鳥が長い間傳道した所であるから基督教の集會と言へば相當の人が集つた。ガリラヤ丸が浦の入江に着くと直ぐ鎌田漢三は自轉車に乗つて出迎へに行く。悦藏らの一行がここにこ



しながら上陸して来る。それから自轉車に乗つて直に傳道に行く。或時は有名な高島の淺見綱齋文庫へ行つて當主淺見高行の厚意でそこを開放してもらつて説教をした。或時は住吉神社の境内で子供を集めて繪話をした。或時は棧橋の下で、或時は汽船の待合室で説教したり、深清水では寺院の本堂で讚美歌を高らかに歌つて説教したりした。或時はガリラヤ丸を沖の島に乗りつけて傳道を開始すると出初式に集つてゐた消防夫の一團に亂暴狼藉されたり、三里隔てた海津へ行つてひどく反對されたりしたが、悦藏はいつもここにこして柳に風と受流して熱心に傳道したので、鎌田漢三はいつも勵まされ通してあつた。或時悦藏はきよのを伴れて來た。鎌田漢三は二人を鹽津に案内して旅館に人を集めて説教した。説教がすんだあとで床に就かうとしたが蒲團が微だらけでどうにも其の中に寝ることが出来ない。そこで悦藏は宣傳びらを何枚も敷いて、それで柏餅になつて寝た。きよのも鎌田漢三もその眞似をして寝たが、彼は床の中でつくづく悦藏の傳道熱心に感心したものである。そのうちに深清水の水尾新二郎が自宅を開放して説教場に當ててくれたので、大つびらに集會することが出來た。水尾新二郎は天理教の布教師をしたり氏神の社掌をしたり、私塾を開いて漢學を教へたりする地方の有力者であつたが、遂に彼の説教に感じて洗禮を受けた。彼は勇氣百倍して傳道してゐるうちに六人の受洗者が出て今津傳道の曙光を認め得た時、中村糸子との縁談が悦藏の手によつて纏められたのである。中村糸子は武田猪平の感化で基督信者となり同志社女學校の英語専門部を卒業して新潟の

聖友女學校の教諭をしてゐた才媛である。かうして鎌田漢三は昭和十五年まで滿十五年間今津傳道に従事したのである。

十一月二十日に春秋社からナザレのイエスを發行した。四六版二百四ページの美本で定價は一圓三十錢である。彼は日本人として、ナザレのイエスの一生を大和心にはつきりと寫し出したいとの念願から十八箇月かかつて此の一書を書いたのである。竹越與三郎も基督傳を書いた。上田敏も基督傳を書いた。聖書學者の柏井園も基督傳を書いた。みな文章は立派であり考證も深かつた。しかし忌憚なく言へば其の根柢は西洋思想に映じた基督傳であつてニコルの基督傳以上に何歩も踏み出してはゐなかつた。ところが此の書は彼が日本人としてイエス在世當時より一千九百年の時間を距て、空間には遙か西方天竺の彼方地中海の滯ガリラヤの湖畔に心を寄せつつ書いたもので、内容には得易からざる特色がある。賀川豊彦はこれに序して、吉田悦藏の書いた日本の福音書もまた新しい使命を持つと云はねばならぬ、種は湖畔に落ちた、中江藤樹先生の隱栖せられた近江に、ナザレのイエスの種が落ちたのだ、それは安土の近くでアウガスチン石田三成の城跡とも遠く離れてゐない八幡町に根を持ち琵琶湖岸の四方にひろがるのだ。と言つてゐる。

十二月中に堅田で小學校前に田圃二百坪を買ひ入れた。嘗て西村關一と二人で比叡山の中腹に登つて堅田の地に基督教傳道の會館の與へられん事を祈つた其の祈りの半分が成就したのである。



十一月の末にメンソレータムの賣上額が、七十三萬三千三百六十圓三十二錢に達したことがわかつた。佐藤安太郎が理想額百二十萬圓に手が届きさうになつたのである。

今年のクリスマス祝會は二十四箇所で行はれた。中にも十二月二十三日には八日市の公會堂で市民クリスマスを舉行して八百五十人の參會者を得たことは非常を喜びであつた。しかし勝つて胃の緒を締めるべき時期が到來しつつある事を悦藏等は百も合點であつたらう。

## 二十四、働き盛り 昭和四年

昭和四年、悦藏は四十歳になつた。一月號の湖畔之聲に彼は筆硯を洗つて、勅題田家朝について慎み深い一文を草し、理想の近江基督教傳道團は昭和四年の勅題的生活に全生活を投げ入れるもので、吾等の本心は近江七十萬人の文化向上の爲と其の永遠の生命の爲に總てを捧ぐるものでありたく、そればかりを目的に活きもし活動もしまた祈るものであると高調した。

同誌二月號からばいぶる解説講座の欄を設け、馬可傳の講義を書きはじめた。そして、南無とアーメンとは同語であることから説き起し南無キリストの力を受けて眞に日本人の腹の底に浸み込むほどの、しつくりした聖書解釋を書きたいと宣言した。

一月二十一日から三日間、群馬縣澁川の栗原陽太郎牧師、農民組合の杉山元治郎、紀伊南部教會の

升崎外彦牧師の三人を招いて農村傳道について講習會を開いた。

二月二日にメレルが八幡町に來た二十四年目の記念會を開いて百餘人集つた。その席上で悦藏は、來年はメレルと近江の國との結婚二十五年の銀婚式に當ると言つたので、満喜子は起ち上つて、私は婚約當時からメレルが近江と結婚してゐる事を知つてゐた。私はメレルの所へ後妻に來たのであると言つて一同を感嘆せしめた。

二月十六日には、悦藏が年少氣鋭の頃全力を注いで開拓傳道した兵主村野田の青年會館中心人物浦谷彌三浦谷靜枝の結婚式があつた。農村の結婚式には昔からの古い慣習がある。ところが此の結婚式は酒無しの基督教式であるのが評判となつて會場には來客が溢るるばかりであつた。

三月二十九日に富永孟が彦根で永眠した。富永孟は近江療養院開院前から北の庄で診療所を開いてゐ、其の父富永亨は殘骸と號して湖はんのこゑに執筆してゐた。その後富永孟は近江療養院を去つて彦根で單獨開業をしてゐたのである。彼は日本に於けるサナトリウム研究の先驅者であつた。

三月二十六日から四月十八日まで二十四日間堅田で西村關一の校長で湖畔國民高等學校を開き、古代文化史を内炭政三、近世思想史を鎌田漢三、外國思想の傳來を同志社大學講師清水安三、心理學を高橋卯三郎、社會學を同志社大學教授竹中勝男、農村經濟を杉山元治郎、農村教育を矢部喜好、昆蟲學を京都帝國大學教授湯淺八郎、蔬菜の話京都帝國大學農場主事橋本章司、園藝を滋賀農園主田中



信彦、住宅問題をメレル、家政學を満喜子、山上の垂訓を西村關一、そして經濟生活と宗教を悦藏が講じた。會員四十一名、教師も生徒もみな満足して散會した實に言ひ分のなき國民高等學校の範を示したものであつた。

四月四日に悦藏の實弟徳藏が兵庫の自宅で永眠した。三十四歳でこれからといふ所を惜いことをしたものである。母のりうが亡くなつた時、悦藏と二人で三階の一室に閉ぢ籠つて半日を泣き暮した當時の事を憶うて悦藏は悲嘆の涙に暮れながら兵庫教會で葬式を営んだのであつた。

五月四日に北の庄陣屋あとに建てた納骨堂に遠藤觀隆・吉田りう・ジョンヴォーリス・武田猪平・高橋烈子・武田淑子・岡崎益太郎・中間一・萩原光代・山本義雄・山本マリエ・村田万里以・大原幸・大原昌・原和・小川三郎・山田室・西澤あや・佐生俊一・増井宏・高橋美智雄等二十一人の遺骨を納めた。そのうちで近江基督教傳道團員として働いた者は九人であとは幼少年である。納骨堂のある地を恒春園と名けた。完全な石階五十七段を登ると鐵筋コンクリート作りのクリイム色テラコッタの簡素な納骨堂がある。入つてみると確に近江基督教傳道團のカタコンベであると思はれる。此の納骨堂を近江療養院死亡患者の墓地と誤解して設立不許可を其筋に申請した者があつた爲に行政訴訟を起したのであつたが、總ては山下彬磨辯護士の盡力で無事解決を見たのであつた。

八月十九日に第五回滋賀縣基督教教師修養會を坂本の芙蓉園で開會し悦藏夫妻も出席した。集る者二

十六人、二十一日まで三日間楽しく有益な集會を保つた。

此の八月は近江基督教傳道團員大活躍の月であつた。佐藤安太郎は臺灣から樺太までを縦貫して旅行し、渡邊清春・諸川稔は滿鮮の熱暑と闘ひ、日曜學校では八日市・堅田・野田・能登川・八幡の五箇所で林間學校を開いた。

九月十三日悦藏は滿鮮の旅に上つた。諸川稔・渡邊清春らの旅行した後を受けての運動である。同月十七日に奉天へ行つてみると、奉天紙幣白圓が日本金の十二圓五十錢の價值になつてゐるのを知つて驚いた。

十月に湖畔の聲第二百號を發行した。明治四十五年七月十五日に第一號を發行して以來二百回の此の雜誌にほとんど毎號彼は執筆して來たのである。發行部數は四千五百部である。

此の年の夏は何十年來目の暑さであつた。しかし悦藏の健康は其の苦熱に打勝ち得て餘りがあつた。彼は此の炎熱下に輕井澤へ二回、箱根へ一回、東京へ二回、門司へ一回、讃岐の琴平へ一回、京阪神へ數回の旅行をした上、湖畔の夏期學校や修養會に出て講演をした。のみならず九月には對馬水道を西に渡つて、京城に開會中の日本施政二十年記念博覽會を見た。そこにはメンソレータムの廣告塔が高く聳えてゐる、その下には即賣店が繁昌してゐた。數年前から京城でメンソレータムの販賣に努力した竹内録之助と應援に來てゐた諸川稔とに會つて共に喜んだ。それから滿洲に入り奉天・ハルビ



ン・大連・天津・北京の諸所を巡回して来たのである。これで滿洲へ八回、北京へ三回の旅行をしたことになる。

十一月十三日に満喜子と浪川かつ子が外國から歸つて来た。浪川かつ子は近江基督教傳道團の古參浪川岩次郎の妹で、ボストン市フキロツク學院で三年間育児保育教育を研究して来たのである。

十一月二十二日には大阪天満教會で商人と基督教と題する悦藏の大講演があつて會衆四百五十名中、彼の講演に感じて信仰決心を表白した者二十一名の多きに上つた。その翌日二十三日には午前十時から滋賀縣基督教聯盟に出席し、午後一時半から八幡教會で開會した滋賀縣基督教信徒大會に出席し、十一月二十七日から三日間は八幡教會で開いた全國新聞通信傳道同盟第三回懇談會に出席した。

十二月に入つて三日には八幡教會で滋賀縣保育大會を開催して縣内の幼稚園關係者三十五名を招待して満喜子・浪川かつ子の新智識を分與せしめた。年末に押詰つて最後の五分間といふ意氣で、海老江・長濱・木ノ本・高宮・北の庄・八幡で合計千五百名以上に賀川豊彦の講演を聞かしたりした。本年のクリスマス祝會は二十六箇所で開いたので、出来るだけそれらの會合へも顔を見せなければならなかつた。よくも斯く根氣が續くものだと言員を感じしめたものであつた。

## 二十五、利鎌は待てり 〓昭和五年〓

昭和五年、悦藏は四十一歳になつた。昨年の大活動を續けて本年も一月早早から活動が續く。難關二十五年の近江基督教傳道團も、彼の言葉を假りて言へばいよいよ暗礁地帯や暴風圈内や國賊受難時代やキリシタンパレン排斥時代や借金で首の廻らなかつた時代を漸く乗り切らんとしつつある。のみならず亂雲頻りに空に飛ぶ隙間から太陽のここに顔が見られるやうになつて来た。湖畔の聲一月號で彼は言つてゐる。

二月二日はメレルが來日二十五周年に當るのでその記念會を開いた。古長清丸の司會で順序は進められた。嘗てメレルを免職した商業學校から臨席した校長北川勝次郎の祝辭にはメレルは建築の天才であると共に人間建築の天才でもあるといふ絶讃があつた。開業醫であつて八幡町長である山本小太郎はメレルが來幡當初縣立商業學校の校醫であつたが、當時の想ひ出をしみじみ語つた。これに對してメレルは、自分は病弱であるから若しもあの頃山本校醫がなかつたら自分は死んでゐたかも知れない。自分が死んでゐたなら今日の近江基督教傳道團もないであらう。さうすれば近江基督教傳道團のあるのは山本小太郎のお蔭だと語つて一同を笑はせた。村田幸一郎は建築部初まつて以來、教會八十九・講堂十・學校百一・病院十七・基督教青年會館四十六・事務所三十二・住宅二百七十四を設計建築したことを報告し、悦藏は十六歳の時メレルと一緒に富士登山をした時以來の共苦共樂を語つて一同を感激せしめた。



間もなく二月十九日には悦藏・メレル・満喜子三人づれで神戸發長崎丸で上海に向ひ、南京・青島・大連・奉天・京城・釜山と各所を巡廻して三週間の後に八幡へ歸ると直ぐ、堅田で開會する第二回湖畔國民高等學校に臨んで農村生活と經濟觀念に就いて語つた。他の講師は湯淺八郎・清水安三・杉山元治郎・升崎外彦らであつた。此の學校が終ると直ぐ海外行の準備として湖畔の聲數箇月分の原稿を書き溜め、三月二十七日横濱出帆のエンプレス・オブ・カナダ號で加奈陀・亞米利加へ向け出發した。同行者はメレルである。

二等船客百餘人のうち東洋人は悦藏一人なので四人分の船室を一人で占領してゐる。全く排斥か優遇か見當がつかぬと呟きながら午後三時解纜、四月五日ヴァンクウヴァーに着き七日から汽車に乗つてロッキイ山の西端を越えて九日の朝カナダの中央都市クニベクを一通り見て十日にはモントリオール市に行つて、そこで大學や神學校を視たりしてアメリカに入り、四月十七日にはニューヘブンで高橋虔に出會ひ、十八日には高橋虔・メレルと共にエール大學に行つた。そこでメレルは日本近江基督敎傳道團について一場の講演をした。それから二人はナイヤガラの瀑布を見たり、ミゾリイ河畔のメレルの家に行つたり、シカゴの世界一と言ふモリソンホテル二十九階に泊つたり、東奔西驅當時流行のジグスとマギイの漫畫にうんざりしながら、一千二百萬人の黒人の間を縫つて廻り、オクラホマ州のオクラホマの油田と、そこから數千哩の遠隔の地までパイプを埋めて、どの市の製油所にも換子一

つひねれば油を流し得る仕掛を見たり、黒人を私刑にする悪習慣に舌を鳴らして憤慨したり、兎に角面白くて忙しい旅を續けて六月の始にメレルの生れたミゾリイ河畔のレヴンウオースやセント・ジョセフやカンサスシティに行つた。そこにはメレルの祖先がフランスを出て和蘭・英國を經巡つて遂に落着き場所として永住し、ミゾリイ州の大審院判事をしてゐる頃求めた屋敷がある。現にメレルの伯父が地方裁判所の判事をしながら住んでゐる。悦藏とメレルはその家の二階に泊つたのである。そこでメレルは面白い話をした。それは大正七年の事であつた。メレルは久しぶりで日本から此の伯父の家に来て泊つたが、子供の頃兩親につれられて行つたグラッド・アヴェニューのメソヂスト教會を訪問して牧師に面會を求めた。その理由は音楽好きのメレルが幼少の時日曜毎に此の教會のバイオルガンを聞いたが、階上の高い所であの美しい大きな音を立てるバイオルガンを弾いてゐる女の姿を非常な憧憬をもつて見上げたものである。その時自分も一生に一度はあんなバイオルガンを弾くやうになつてみたいと思つた。そのバイオルガンをちよつとでよいから弾かしてほしいと願ふ爲であつた。牧師は喜んでそれを許してくれた。で、大喜びで幼い時に聞いた讚美歌の曲を弾いてゐると、そこへ一人のお婆あさんがやつて来て、ぢつとメレルの弾く手を眺めてゐた。メレルは思ふ存分バイオルガンを弾いて満足しながら椅子を離れたが、お婆あさんの顔に見覚えがある。話してみると、そのお婆あさんこそ若い時此のバイオルガンを弾いてゐた女であつた。彼女はその後西海岸の方へ



行つて何十年間此の町へ来たことがなかつた。ところが今日久しぶりで此の町を通過するので、昔なつかしいパイプオルガンに會ひに来たのだと言つた。そこで二人は堅く手を握つて奇縁を語り合つたといふ話である。

六月六日から十一日まで悦藏はメレルと共にコロラド大學に行つた。この日メレルは明治三十七年の同大學卒業生、建築士・教師・宣教師・そして神の國の人として、石と煉瓦とを以つてする建築のみならず、人の手にて建造するを得ざる人格の殿堂建築士として母校の名譽發揚者として名譽法學博士の稱號を授與せられる事になり、黒絹のガウンに金モウルの總のついた角帽を被り、總長ミロル博士から學位記を渡されたのである。六日間毎日音楽會・ギリシヤ劇・晚餐會・朝餐會・優等章演說會・卒業生に對する演說會・總長招待會・卒業式・學位授與式など引きりなしの集會であつたが、悦藏はあらゆる集會へ卒業生同様の待遇で招待されたのである。その中で卒業生に對する演說者はメレルで演題は年若きを以つて輕んぜらるるなかれ。と、いふのであつた。デンゾアー・ポスト紙には、どこから探し出して來たものか、メレル・満喜子の新婚當時の寫眞を二段抜にして掲げ、コロラド大學卒業式の名譽演說者ヴォーリス博士は、その昔わがデンヴァー・ポスト紙の配達をしながら大學に通つた苦學生であつたと書いてあつた。卒業式のすんだあとで二人は高原から平地に降り、アメリカ特有の灌木セエジブラッシュと石ころばかりの荒野を汽車で二日間も走り續けてグラランド・キャニオ

ンを驢馬で見物したのは十六日であつた。もう此の頃から悦藏は日本が戀しくなつて來た。今度の旅行でメレルは名譽法學博士の榮譽を得たが、それでもアメリカにはもう親しい友人が少なくなつてゐる。友人はあつても理想がちがふ。二十五年も日本にゐた彼は、もうアメリカ式の精神から日本式の精神に移動してしまひ、世界の中心がいよいよ近江八幡であることを確信するやうになつてゐた。悦藏はメンソレータム創製者のハイドにも會ひ、始めて合名會社を造つた時の建築技師チエーピンにも、早稻田大學からガリラヤ丸に轉任して來たウォータアハウスにも會ひ、近江療養院創始の頃非常に同情を寄せてくれたツツカア女史にも會ひ、米國の實業團體をも訪問し、あちらこちらの教會を見てゐるうちに、アメリカが餘りにも機械化してゐることを痛感した。殊に米國の基督教については深い失望を感じた。こんなに贅澤の頂上を通過しつつあるアメリカ人が天國に入らうとするのは駱駝が針の穴を潜らうとするよりも困難だといふ事を知つた。七月十二日秩父丸でメレル・山室軍平等と共に横濱に上陸した彼は直ぐ東京に行つて遮二無二東京市内を駈け廻つてみたのである。それは嫌といふ程見て來た物質文明機械文明のアメリカと日本とを氣の抜けないうちに比較してみる爲であつた。そして彼は、ああ有りがたし、ありがたし日本の帝都はまだ機械化してゐない。日本はまだまだ鐵とセメントと硝子とガソリンの毒瓦斯とで合成した近代都市を作つてゐないことを感謝したのであつた。彼は東京を見物した後メレルと共に一路近江八幡に歸つたが、伊吹山麓を過ぐる時、叡山の紫峯



が見えはじめた時、此の美しい湖國近江をもつともつと美しい理想の國とするやう心から祈りつづけたのであつた。

歸つて間もなく七月二十八日に彼は高橋卯三郎・大原義雄・宮家磐夫等二十九名と共にガリラヤ丸で今津に行つた。それは今津傳道が始まつた當初自宅を快く開放して傳道の便宜を與へてくれた元天理教の教師であつた深清水の水尾新次郎の葬儀を行ふ爲であつた。會衆二百餘名此の地方開闢以來始めての基督教式葬儀が行はれたので村民間に大きな衝動を與へたのであつた。哀悼の辭を述べた悦藏の話をきいた村民の一人は、基督教は生きてゐる人に引導を渡すといつたさうである。

八月十九日から三日間坂本芙蓉園で教役者修養會を開き東京神學社の高倉徳太郎を招いて基督教會と文化と題する講演を聴き、悦藏はアメリカの宗教事情を詳細に語つた。その後滋賀縣の各地で彼はアメリカの將來に就いて講演したが何れも聴衆満員の有様であつた。此の頃から彼は外國臭味の脱した基督教が日本に起らなければならぬ事の主張に努めてゐたのである。

悦藏が海外旅行に立つ前から着工してゐた水口基督教會館は十一月三日に献堂式を舉行することになつた。主任傳道者は吉田政治郎である。吉田政治郎は滋賀縣野洲郡速野村生れで十七歳の頃まで基督教に觸れたことはなかつたが、その頃一人の友人に誘はれて馬場に出來た鐵道青年會で武田猪平の説教を聞いたのが、基督教に接した最初であつた。或日のこと八幡町から來た若い紳士が讚美歌を教

へてくれた。漕げや漕げ救ひの舟を。であつた。その讚美歌を教へてくれたのが悦藏だつたのである。彼はその時十九歳であつたが爾來武田猪平と悦藏とによつて基督教を教へられ求道者となつて聖書と天路歷程とを熱心に讀んだ。けれども確信が得られないで苦んだ。で或時は斷食して祈つた。人の來ない山の中に入つて獨りで祈つた。祈つてゐるうちに確信を得たので大津の組合教會へ洗禮志願をして、大正六年四月八日に三谷公一牧師から、西村關一と一緒に洗禮を受けたのであつた。翌大正七年は二十一歳で徴兵検査を受ける年であつたが年齢の都合で翌年廻しになつた。で、その一箇年間は熱心に教會へ出席して神の恩寵を深く感謝しつつだんだん信仰の深みに入り翌年に甲種合格で工兵となつて滿洲守備隊に送られシベリア戦争にも参加して勳八等旭日章を賜つて歸郷したのは大正十年であつた。その時山田寅之助が米原の紫苑會館に主事として働いてゐた。山田寅之助は馬場の青年會館にゐる頃彼に柔道を指南したので柔道に於いて師弟の關係があるので、除隊歸郷後の或日米原に行つて訪問すると、ここへ來て自分の仕事を手傳はないか生活だけは引受ける。と、言つてくれたので、彼は考へた。他の職業を求めようか神のために此の身を捧げようか。岐路に立つて考へぬいた結果、シベリアでバルチザンに殺されたと思つて素裸になつて神の爲に奉仕する決心をした。そして會館の仕事を手傳ひながら聖書や宗教書をあさり讀んだ。相變らず柔道の稽古をした。賀川豊彦の死線を越えてを讀み西田天香の懺悔の生活や宗教書をむさぼり讀んだ。さうしてゐるうちに柔道はめきめ



き上達して後には武徳會から五段の免許をもらつた。讀書の修養もつんで説教もするやうになり、八幡町の基督教青年會主事に榮轉して以來神學校入學の準備を怠らなかつたが、大正十五年四月大阪自由メソヂスト神學校に入學を許され其の三年生の時から水口教會の日曜集會を引受けてゐたのであるが、昭和四年四月に神學校卒業と共に水口教會の傳道主任となり五月一日に、ランパス女學校卒業の梶山みさと結婚して、石部・土山を初め甲賀郡二十六町村に福音の種を蒔きながら、警察署員に青年團員に柔道の指南をしたのである。

だんだんと教勢が盛になり、甲賀の魂を神に捧げ得る自信がつくに随つて今少しく廣い會堂がほしくなつたが、そんな金錢の出所は見つかからない。教會の傍に草蓬蓬と生ひ茂つた四百二十六坪の空地がある。化物屋敷だと言つて町内の誰も手を出さず者がない。彼は此の化物屋敷に會堂を建てたいと思つて、絶えず祈つてゐる所へ、或日悦藏が應援に來たので其の話をすると、其の化物屋敷はなんぼで買へるか。と、悦藏は訊いた。坪十圓なら今日でも買へる。と、彼が答へると悦藏は手を拍つて、買へ、すぐ買へ。ちやうど金四千圓を傳道の爲に寄附してくれた人がある。その金の使途を考へてゐたところだ。不足の二百六十圓はわしが出す。と、言つた。あまりに話がうますぎるので彼は容易に信じられなかつたが、悦藏が出たらめを言ふ筈はない。男子の一言金鐵の如し、間違ひはない。買へ、買つて會堂を建てよう。會堂に六千圓、牧師館に三千圓、合計一萬三千二百六十圓だ。それだけの金は

必ず神様から與へられる。甲賀の魂を救ふために祈り來つた君の祈は必ず神様が聞いて下さる。この事は委員會で決定さるべき事だが誰も反對をいふ人は無いと思ふ。悦藏はさう言ふと同時に頭を垂れて祈つた。彼も祈つた。其の祈がきかれて目出たい明治節の今日水口教會は其の献堂式が行はれるのである。工兵仕込みの彼は鍬をふるつて庭木を植ゑた。庭石を据ゑた。堂堂とした會堂と牧師館とは伊勢街道の側に聳えて人の目を驚かした。

今日は献堂式だといふので招待された二十六箇町村の有志者は續續水口町に集つた。悦藏も八幡町からかけつけた。しかし少し空腹を感じたので近くのうどん屋に行つて、うどんのかけを一つ注文した。店には十數人の客がうどんを吸つてゐたが、悦藏は一杯かき込んだあとで、をばさん、このうどんはおいしいね。ほんとにおいしい。も一杯下さい。と、言つた言葉は實になれなれしくやさしかつた。こんな田舎ですから、ろくなだしも出來ませんので、と言ひながら主婦はおかはりをもつて來た。おいしい。本當においしい。もう一杯下さい。言ひながら彼はそこで腹を充たした。何杯食べたら其の記録はないが、三杯以上であつたに違ひない。彼は元來健啖家と知られてゐた。日本料理・朝鮮料理・支那料理・西洋料理の有名な料理屋は大抵知つてゐた。随つて味覺が非常に發達して時時掘出し物をするのである。水口のうどんも其の掘出物の一つであつたのである。彼は曾て神戸の弘養館へ大村甚三郎と一緒に食事に行つた。丁度生きのよい海老があると云つて料理人がそれを見せた。



重量三百五十匁であつた。彼は直にその料理を頼んだ。出して来た海老は十八インチの大皿の両方にはみ出てゐたが、彼はそれを平氣で食べてしまつた上、更にピフテキを事もなげに食べて、これも健啖を以つて自任する大村甚三郎を呆れさせた事がある。今日も彼は愉快にうどんを腹一杯食べたが五尺七寸の堂堂たる體軀にモウニングコウトを纏つた紳士と、此の見すばらしいうどん屋とは、到底調和を見出すことが出来なかつた。ここに一人の青年が同じくうどんを食べてゐたが、最初そこへ入つて来た悦藏の風采を見て反感を懐いた。青年は謂ふ所の左傾思想をいだいた男で、彼をプチブルとして輕蔑したのである。ところが彼と主婦との應對ぶりを見てゐるうちに、其の平民的な態度にすつかり感心して、たつた今までの反感は好感に變じて彼の出て行くのを見送つたのであつた。

いよいよ献堂式は始まつた。その青年も被招待者の一人として會堂に入つてみると、壇上に居るのはたつた今うどん屋で見た紳士であるのに驚いた。儀式は順序を追つて進み、彼の講演に移つた。彼は極めて謙遜なる口調で此の會館が神より與へられた由來を詳述した。その間に毫も自己の功を誇る所がなかつたので青年はすつかり感激して、始めて基督教徒の持つてゐる精神の置きどころを知り、その日から心を傾けて基督教を研究するやうになつたのであつた。此の青年こそ後に水口教會の中心人物となつて多くの青年達を指導した吉川昇二である。

水口に新しい會堂を興へられて歡喜に充たされた悦藏は賀川豊彦を擁して十一月廿三日から廿九日

まで大津を中心として滋賀縣神の國運動の掉尾の大活動をしたのであつた。

廿三日の午前十時から大津教會で聯合禮拜があつて二百五十名が祈りを共にし、午後二時から縣公會堂で全縣下信徒大會を開いて四百五十人が集り、午後七時前から提灯行列をなし、七時から八百名の聴衆を前に賀川豊彦の現代文明と宗教生活に就いての獅子吼があつた。廿四日には大津の女子師範、堅田の蕃山文庫の集會後縣公會堂で第二夜の集會をしたが尙六百名の會衆であつた。廿五日は彼の母校八幡商業學校で、廿六日は午後一時から紫香樂の紫香樂座で賀川豊彦の講演があり七百の聴衆を得たが其の中に一人の暴漢が現れ、會の果てた後自動車の前に大の字になつて寝るといふ騒ぎ、遂に水口まで来て其の夜の集會妨害を企て牧師館へ土足で上り込み短刀を疊に突き立てて吉田政治郎を脅かしたが、相手が柔道四段の猛者牧師と知つて逃げ出してしまつた。此の夜も四百名の聴衆を得た。廿七日は彦根の高等商業學校で中學校・女學校・商業學校生徒一千名を集め、夜は彦根公會堂で八百名に、廿八日は教會堂で二百三十人の婦人に、夜は公會堂第二夜の集會で六百五十人に、二十九日は長濱の農學校で四百五十名、朝日村海老江の農民福音學校卒業生を中心に百二十名、午後七時から長濱共濟文庫で五百名に、合計八千七百名に福音が宣へ傳へられた。長い間苦心した近江傳道がいよいよ收穫時に近づきあるを知つた悦藏は今こそ利鎌を用意すべき時だと切實に考へたのである。



## 二十六、南 船 北 馬 昭 和 六 年 Ⅱ

二三四

昭和六年、悦藏は四十二歳になり長男希夫は早くも十四歳、のぶ・たかは満十二歳の春を迎へた。一月七日夕七時から信樂の青年會館で百名の會衆にアメリカの惱みと題する講演をした。昨年末賀川豊彦が講演に來た時暴漢の現れた所であるが、今度はみんな神妙に聴いた。しかし寒くて寒くて話が氷る程であつたと彼は言つた。

同月十七日には大溝町で二百人の聽衆に同じ題で話した。彼の説くアメリカの惱みとは、アメリカは實業家團體の商業會議所が政治宗教の權利を握つてゐて何事にも資本主義が横行濶歩してゐる。警察官は市長の下にあり、市長は商業會議所の下にある。宗教家も教育家もみな商業會議所の意見によつて活動してゐる。アメリカには古い歴史がない。随つて家具も料理もみんな一様で國民は同じ夜具を着て寢同じ料理を食べる。日本や支那のやうな複雑な器具も料理もない。その單純さをもつと複雑な古い歴史の國にしたいとあせつてゐる。アメリカの機械文明は遂にアメリカ人に毎年百億萬圓の自動車を買はせる。そして毎年三萬三千人の即死者と十萬人の負傷者を出す。けれども中央政府や州議會の中心人物がみな自動車會社に關係を有する人達なので自動車の賣れるやうな法律を作つてしまつて、その交通取締りなど顧みない。アメリカには映畫が盛である。一箇月五億人の男女が映畫館に

流れ込む。そして國民の心をエロ・グロ・テロに混亂させる。心ある者がこれを非難すると有力な宗教家を抱き込んで顧問にする。そこで其の宗教家をして自分が映畫界に關係する以上決して國家の風教を紊亂するやうなことはさせないと啖呵を切らせる。しかも此の映畫が外國へどしどし賣り出される。随つてアメリカはエロ・グロ・テロの國だと言はれて、それをどうする事も出来ないでゐる。アメリカからジャズ音楽が発生した。白人に壓迫され通しの黒人の或者が捨鉢的に考案した音楽である。これがすつかり國民の音楽嗜好となつてしまつて優雅な古典音楽は滅びさうである。世界各國に此の野蠻的なジャズが流れて行つてアメリカを野蠻人のやうな音楽をもつ國だと言はれながら、それをやめる事が出来ないでゐる。先住民族のアメリカ・インディアンには選舉權を與へないで、此の黒人には市民權も選舉權も與へてゐる。大統領にでもなればなれる權利を與へて置きながら、黒人を人間扱ひにしない。ホテル・食堂・電車・汽車に彼等の道を塞いでゐる。もしもアメリカが外國と戰爭をするやうになれば黒人は必ず外國に味方をするであらう。だからアメリカ人は正義人道を唱へながら、私刑を盛にやる。黒人が悪い事をすれば寄つてたかつて私刑を科する。警察がその犯人を引致して民衆に渡さない時はガソリンを水道のハウスから注ぎ出して刑務所や拘留所を焼き拂ふ。市民權を與へた黒人が市民となつてゐるのを今更後悔してゐるのである。アメリカはあまりに騒騒しい。落着かない。そこで成るべく莊嚴な教會を建築して靜寂な音楽をきかせて心の落ち着く説教をする。と



ところが其の教會建築が多額の費用を要する。ニュウヨウクのフォスディク博士のゐる教會などは六百五十尺の高塔がハドソン川の濤に聳えてゐる。その建築費は六百萬ドルで一年の經費百五十萬ドルである。かうなれば資本主義の勢力が教會を支配することは明白である。アメリカは禁酒國となつた。しかし其の禁酒を勵行する法律が完全に行はれない。密賣が盛である。禁酒法は善いのであるが、その法網をくぐる者を制裁し得ないでゐる。と、いふのである。

彼は相變らず多忙の中に、八日市・今津・大溝・眞野浦・香取浦・萩の濱・小田川濱・紅葉が濱・能登川などに傳道に出かけた。そして二月十七日に東京へ行つて基督教青年會館に泊り込み。メンソレータムの廣告について正路喜社へ行つたり、主婦の友社に社長石川武美を訪問したり、米歐巡覽の途に上るべく準備中の沖野岩三郎を訪ねていろいろの注意を與へたりした。

三月九日は彼の誕生日で滿四十一年の地上生活を祝するために、赤飯を炊いて家内一同が楽しい晚餐を取つた。そして其の翌日午後一時一分發の汽車で支那旅行に出立、神戸で親戚を訪問した後翌朝八時五十六分神戸發の汽車で清水安三と共に門司に向つた。滋賀縣高島郡の片田舎で生れた清水安三は十五歳の時軍人志望で膳所中學に入つたが、入學早々メレルの聖書講義を聞いたのが縁となつて、中學卒業後同志社の神學部に入り、後に陸軍歩兵少尉にはなつたが遂に宗教生活に身を投じた彼は支那に行き、また同志社に戻り、再び悦藏と共に支那へ行くのである。

乗船昌慶丸が馬關を出帆する前、悦藏は門司の税關員に頼まれて一場の講演をなし、翌十二日の朝釜山に着いたが、早速カマニ癩病院に行つて六百の患者に一場の説教をしたあとで、日本の歌やハワイの民謡を歌つて聞かせた。

十三日には京城組合教會で基督者生活戰術と題して講演し、十四日には組合教會の婦人會で話した。十五日は日曜だつたので日曜學校の生徒に話し、清水安三の禮拜説教の際、彼は讚美歌主よ終まで仕へまつらんを獨唱したのであつた。十六日には奉天に着き、そこで四日間滞在してメンソレータム販賣の商店を片つばしから訪問したり、米支問題講演會に臨んだり、明治三十八年の修學旅行の際、馬賊七人の首斬りを見た同じ死刑場を見たりして、十九日の夕方長春に着いた。それから翌日はハルピンに入りスングアイの大鐵橋に沖禎介・横川省三らの活動のあとを偲び、その記念碑に敬意を表したりした。

それから大連に直行して組合教會での講演を終つて北平に着いたのは二十八日の正午であつた。米國の機械文明に飽飽し、日本の精神文明を見直した彼は、今世界最古の國であり、三千年の昔既に文明國として偉大な發達を遂げたまま文明發展の中止状態にゐながら、殆ど外國の影響を受けてゐない支那を見てゐるのである。彼は此所でもまた日本と支那との關係を深く考へさせられたのである。そして、清朝三百年の古都北平の目貫の場所に北京施利公司の看板を掲げ家庭藥面速力達母を賣



るやうにしたのである。面速力達母とは、つけると直ぐ力が出て癒るといふ意味である。家を出てから三十四日目の四月十三日に八幡町の家に戻つた彼は十五日の午後西川甚五郎の別邸月の舎に招かれて美しい櫻の満開を見たのであつた。

四月二十九日に東京で第二回廣告祭が舉行された。發起者は廣告専門の株式会社正路喜社で後援は商工省・東京市・都下十六新聞社であつた。此の廣告祭は意外の大成功で観覧者二百萬と號し、行列の進む所電車も自動車も悉く立往生じ、警視廳は非番巡查全部を召集して警戒に當つたが、まだ十分な警戒が出来ないので、これ限り廣告祭の舉行を差控へてほしいと申込まれた程の成功であつた。これはドイツのライブチヒメツセやフランスのカアニバルに比すべき假裝行列であつて、第一回廣告祭が昭和五年三月二十六日に催された時、近江セールズ株式會社では三頭の白馬を出したが今度はアラビヤ人の擔つた花環で飾つた巨大なラツバを先頭に七疋の駱駝がアラビヤ人に牽かれて行くといふのであつた。これについて正路喜社の重役黒崎雅雄は、吉田さんと廣告祭。と、題してこんな事を言つてゐる。

立派な作品―主催者の心配して居ることは主催者の此の氣持を參加廣告主が十分理會してくれるかどうかといふ事であります。俗悪低調な企畫では却つて帝都の美觀を損ね大衆を愚弄する事になります。だから參加廣告主の理會と協力とが何よりも望ましいのであります。

さすがに吉田さんは眼界の廣い世界の事情に明るい方ですから主催者の説明がすぐ理會され、話をした途端に賛成されて立派な作品を出して下さつたのは主催者側の感謝でありました。

第一回はメンソレータムの商品を應用した馬の行列でした。馬は白色で他の多くの參加物が色彩の多いものであるのに對照してこれは實に清楚な小馬でしたから非常に目立つたばかりか能く童心に突へる親しい感じを與へました。第二回はアラビヤ風俗を現はしたものでラクダの行列でした。突如として帝都の眞中に降つて湧いた此の異國情調には群集をして思はず歡呼の聲を擧げしめる力がありました。すつかり吉田さんの思ふ壺にはまつたと言へませう。前後二回を通じて異國情緒を求めらるなら此のラクダだけではありません。磨きのかかつた本格的の演出です。實に見事な堂堂たる作品でありました。民衆にはどんな形で訴求すべきかといふことを、こんなにまで吉田さんが心得て居られようとは驚くべき事でした。全く吉田さんは廣告宣傳についても一つの達識をもつて居られました。

廣告商品は優良なり―の意味は如何に良品でも廣告なくしては普及しないが、普及する商品は必ず一般人に審判されます。そして眞の良品のみが普及するのです。

廣告戰の華かなりし頃は随分あくどいものもありましたが、その中でメンソレータムだけは終始一貫一種の品格をもつてゐて、時流に溺れず毅然として正しい廣告表現を續けて居られたことは、今



日の廣告の中にも活かされて居ります。私は吉田さんの廣告に對する達識を偲び新なる敬意を表するものであります。

黒崎雅雄の此の言はよく當つてゐる。悦藏はメンソレータムの廣告を時流に溺れさせなかつた如くメンソレータム其の物をも低下せしめなかつた。彼はその爲に普通賣業者のなす一年一回の特賣を避けた。特賣の爲に商品の低下を來すことのないやうにと彼は考へた。そのかはり彼は定價を割引せず、團扇を配つたり鉛筆を添へたり輕便な日記帳を添へたりした。

彼は廣告術に達識をもつてゐた如く、商術にも達識をもつてゐた。だから見通しをつけると三十錢四十錢の材料を五十錢六十錢で平氣で買ひ入れた。それが爲に數萬圓十數萬圓の支出を毫も意としなかつた。その先見の明があつた爲に近江兄弟社の財源を裕ならしめ得たのである。のみならず彼には事業に對する持久隱忍の精神があつた。近江療養院の如きも長い間の赤字續きで何所かの大きな病院の分院として身賣りをしようか。と、いふ所まで行つたが、彼はとうとう苦心の經營を續けて今日の如き好成績を擧げ得たのである。

彼にはこれだけの商才があり經營の才能はあつたが、根が純粹の商人でないだけに、こんなことをしたあとで、メンソレータムを賣らんが爲には、吾吾の團體もいろんな事をしなければならぬ。と、

考案者の彼も少少氣がさしたらしかつた。けれども儲けた金が決して資本主義に墮せず飽くまで傳道本位で進むのであると、湖畔の聲六月號で彼は特筆してゐる。

七月五日、午後二時から安土教會で説教をした。岡田金一郎の昇天五周年に當るのである。明治四十五年七月三日に、メレル・村田幸一郎・武田猪平らと共に此の地で始めて基督教の説教會を開いた時、近江基督教傳道團員の一人であつた深尾清之助に引つ張つて來られた彼が、その後實に眞劍になつて獨立傳道した事について彼は非常に感謝してゐたのであつた。死ぬまで説教を續けて、十字架の旗を捲くなど遺言した其の教訓を守つて未亡人は五人の子供を育てながら今も傳道を助けてゐるのである。財産の半以上を傳道用に捧げて、絶対に妥協を避けた彼の生涯は實に貴いものであつた。と、彼は感じてゐるのであつた。

岡田金一郎の記念會をすまして三日目の七日に上京して御殿場の東山莊に行つた。そこでは九日から十一日まで日本農村傳道協議會が開かれるので、團員中の内炭政三・西村關一の兩人も參加した。杉山元治郎・升崎外彦も參加した。

八月七日朝八時發の列車で紀州に向つた。南部町に傳道してゐる農村傳道者の升崎外彦訪問の爲である。升崎外彦の父は升崎茂次といふ金澤藩の劍道指南番で、水野一傳流の達人であつた。明治維新後金澤市に眞武館といふ道場を開いて劍道を教へてゐるうちに、うんとたたき込まれた升崎外彦は、



いろいろの経緯があつて遂に基督教の傳道者となり、肺病人の世話をしたり廢物利用の講習會を開いたり、出獄人の保護をしたり養鶏を試みたりしながら特殊な傳道をしてゐるのである。悦藏はそこへ行つて毎日海水浴をして十二日まで身體を鍛へ十四日の夜九時頃家に歸つた。二十六日二十七日の兩日は京都市外清瀧の柳屋で縣内教役者修養會を開いて濱田青陵博士から天正時代の話をきいた。

今年は團扇七十五萬本を作つた。メンソレータムの得意先に配るのである。メンソレータムと團扇と何の關係あらんや。と、いふ議論もあつたが遂にこれを配ることにしたのである。最初は其の製造を甲賀郡土山町の製造業者に頼んだが、此の年から四國丸龜市の製造業者に依頼したのである。平井樑仙の繪は相變らず飄逸で評判がよかつた。十年前の大正十一年に二萬圓以上を賣つたといつて奇異の感をいだいたメンソレータムが、今は七十五萬本の團扇を愛川者に配るやうになつたとは、これが奇蹟でなくて何であらう。

九月十五日の朝彼は玄關に投げ込まれた新聞號外を見て驚いた。日支衝突事件が起り日本軍は奉天を占領したのである。

去年七月に着工八萬圓の巨額を投じて建築中であつた近江基督教傳道團の教育會館が竣工したので十月十五日にその開館式を挙げ牧野虎次・山室軍平等が講演に来て十八日まで活動した。

十一月十五日には彦根の公會堂で縣下の信徒大會を開き、十二月二十六日から二十九日まで賀川豊

彦を招いて各所に大活動を續けた。その活動場所は海老江・木ノ本・八日市・能登川・愛知川・市邊・土山・西ヶ原・八幡で會衆は合計二千三百に上つた。二十九日の夜悦藏の宅に賀川豊彦・清水安三・竹中勝男・大原義雄・高橋虔・佐藤安太郎・坂井良次・宮家磐夫の八人を招き日本聖書編纂の相談會を開いた。それは小學校卒業程度の學力で讀まれる日本語譯の聖書抄本と、誰でも歌はれるやさしい讚美歌の合本で一冊十五錢ぐらゐなものを出版しようといふ相談をする爲であつた。

此の年には喜ぶべき事件が二三あつた。その一つは近江療養院の水問題の解決である。近江療養院は日當りもよく風景も佳い。しかし唯一つの缺點は飲用水の缺乏であつた。ところが療養院から二町ほど離れた所に小さい竹籤があつて、その持主がその籤を三百圓に買つてくれないかと事務長の渡邊光太に申込んで來た。渡邊光太はそれを悦藏に諮つた。あんな竹籤を買つて何にするつもりか。と、きくと井戸を掘つてみるのだ。と、答へた。水に困つてゐる療養院だ。水の出さうな所なら何所でもよいかから買つて掘つてみる。と、いふので路傍の曲り角の小籤を買ひ取つて掘つてみると、こはそも如何に水晶のやうな清水が滾滾として湧き出して來た。正にルルドウの神水である。六月に水道工事が終つて療養院に水の心配は無くなつたのであつた。

他の一つは後の工場課長藥劑師佐藤久治を東京荏原町戸越から招いて六月十九日にメンソレータム工場に來てもらつたことである。メンソレータム工場は昨年十月新築に着工し九月一日に落成して移



轉したのであるが、まだ製藥までに行かず、機械を据ゑつけて試運轉をしたのは十二月二十八日であつた。試運轉の結果は頗る良好であつた。此の順ならば今に全世界の需用者へ近江八幡からメンソレータムを送り出し得るといふ意氣で、佐藤久治を主任として製藥に邁進し始めたのである。

更に喜ぶべきことは、悦藏・諸川稔らの發案に成るメンソレータムの日記帳が十月の初旬に十萬冊を賣り盡したことであつた。團扇七十五萬本も驚くべき數量であるが、しかし、これは安價な實用品である。けれども日記帳は十人が十人用ひない賣品である。その賣品が十月上旬に既に現金で九萬冊以上賣れたのである。此の勢で進むならば近江基督教慈善教化財團の財原はメンソレータムにあるらしく思はれて來たが、團員一同の精神は近江一國の淨化運動を決して忘れはしなかつた。

悲しむべき一事はメレルを悲嘆に沈ませた事である。メレルには頗る氣に入りの一人の秘書役があつた。名を高木五郎といつて音楽家で事務家で信仰家であつた。彼は嘗て近衛秀麿の率ゐる交響樂團員であり、松竹オーケストラの第一樂手であつたが、近江基督教傳道團に入り、メレルの秘書となつて以來團員の深き感化を受け、再び音楽で飯は食はないと決心し、絶えず教會音楽の爲に力を致してゐたのであつた。然るに突如盲腸炎のために大津赤十字病院内で八日に永眠したので、十月九日に八幡教會で其の葬式を行つたのであつた。メレルは若くて此の世を去つた彼の爲に深き同情の涙を滌いたのであつた。

## 二十七、三度目の外遊

|| 昭和七年 ||

昭和七年、悦藏は四十三歳で希夫は十六歳、のぶ・たかは十四歳になつた。

今年メレルと兩人で米歐を旅して宗教と建築の兩面を視て來ようと計畫してゐる際、突然佐藤久勝が亡くなつた。それは一月六日のことである。佐藤久勝は悦藏よりも一つ年上の四十四歳であつた。明治三十五年に滋賀縣立商業學校に入學して三箇年在學して中途退學したのである。退學後鐵道の電信課に勤めて月給十一圓を得てゐたが、明治四十四年十月一日に伯母の夫藤居俊藏の紹介で悦藏に面會してメレル及村田などと相談の上ヴォーリス合名會社へ傭はれることになつた。ところが當時の合名會社は悦藏の提供した現金九百圓と、メレル・チェーピン兩人の勞務出資二千六百圓といふ貧弱な會社だつたので、兎に角月給八圓で入社しないかと言ふ悦藏の話に何の躊躇もなく入社した。それは村田幸一郎は三年間机を並べて勉強した同級生であり、悦藏とも二年間一緒に學んだ間柄であるのと、彼が十一歳の時藤居俊藏に嫁いで來た伯母の膝元にゐたい爲であつた。彼は少年時代から畫と音楽とが好きで、藝術家肌であつたので、商業學校の課目に耐へ切れないで學校を飛び出したのであつたが、入社後建築設計の製圖係となるや俄然其の天才を發揮して後には建築部の美術的方面を背負つて立つの觀を呈してゐた。その裝飾意匠を考案する時、いつも萬華鏡を見て其所から暗示を得た。



彼の意匠中に六角を交叉した十二角のデザインのあるのは多く其の影響であつた。彼は入團以來日曜學校の教師となり大正八年に八幡教會の日曜學校校長となつて二十一年間、死の直前まで日曜學校の爲に心を砕いてゐた。昭和五年には日本日曜學校協會から滿二十箇年勤績者として表彰せられた。昭和三年六月にロサンゼルスで世界日曜學校大會の開かれた時、日本代表者の一人として出席したが、そのついでに滿一箇年間英・獨・佛・瑞・伊・埃の諸國を遍歴して建築を研究し、パレストインに基督の跡を偲んで歸つて以來、新しい建築界に活動し始めて僅に三年で急逝したのである。大阪大同生命ビルディング・主婦之友社・京都大丸呉服店・大阪大丸呉服店・關西學院・神戸女學院などの設計製圖は彼の腕を揮つたものであつた。彼が其の特技をもつてゐる事を知つて受けてゐる月給の四倍で招聘してくれた會社もあつたが彼はそれを一蹴して近江基督教傳道團に踏み止つた。それは村田幸一郎や悦藏らと事を共にする事が楽しかつたからである。彼は昭和六年に八幡町の近郊土田に四百坪の地所を求めて、そこへ思ふ通りの家を建てた。荒削りの扉に大きな鐵のノツカアをつけたのは多分セエキスピアが洗禮を受けた寺院の扉から暗示されたものであらう。けれども彼は其の新築の家に住むこと僅に一週間で此世を去つたのであつた。六年十二月二十八日に彼は村田幸一郎と共に大阪へ出かけた。その時彼は汽車の中で頭が痛いと言つたので、村田幸一郎は京都驛で茶を買つて持合せの風邪薬をのませた。大阪へ着いて大丸の重役里見純吉等と食事を共にして可なりの元氣で歸つたが三十日

から發熱して翌三十一日には急性肺炎と斷定された。村田幸一郎が自動車で近江の療養院につれて行つた時、病院の石段を登るのが苦しうであつたから、負うてやらうと言つても辭退して強いて歩いた。四日に村田幸一郎が訪問しての歸るさ、彼は村田幸一郎を引きとめて、ちよつと顔を見せてくれ。と、言つて、そして、しげしげ其の顔を覗いてゐたが、やがて、もうよいから歸つてくれ。と、言つた。彼の心には死が直面してゐたのであらう。六日の朝四時すぎ近江療養院から悦藏の所へ電話があつて彼の病勢急變を告げて來たので、村田幸一郎・メレルと共に駆けつけて見ると、もう醫師の力も及ばない程度に悪化してゐた。そして午前十一時四十五分に神の召命を受けたのであつた。その夜八幡町は深い霧に蔽はれてゐた。眠られないまま悦藏は窓を明けて外を見た。彼の在りし日の事どもを想ひ出して眠られなかつたのである。八日の午後二時から八幡教會で彼の葬儀が行はれ、悦藏はその履歴を読み、村田幸一郎は告別の辭を述べて滿場を泣かした。悦藏はその光景を手帖に記して、花美しく人多く涙聲堂に滿つ。と、書きつけた。九日の朝悦藏ら一同西山の火葬場から友となつた理事・監査役の佐藤久勝を土田の新築の家に迎へた。メレルは彼の死を弔つて一篇の詩を作つた。その大意は、

死が人の生命の最後であり

古くして用をなさざる器械の終止であるならば



そして人の世の激しき戦を終りて  
 感覚なき世界に過ぎ行くのみならば  
 死の望む犠牲は天職を成就し月桂冠を戴いた  
 みのり多き年老いたる者のみでなければならぬ。  
 その時地上に残されたる愛の友は  
 暮れ行く日の平和さに直面して  
 涙なくして彼を見送るであらう。

天の召命は若人の花の盛りに

天才の蕾に

尊き智識の持主の上に下る。

業の終末にあらず希望の背後にあらず

あらゆる業のうち最も偉大なる業をなしつつあるものの上に下る。

天は運命の盡きたる者の休み場ではない

天は絶大なる未来の研究所である。

と、いふのであつた。悦藏を日本流の数へ年で數へ彼を西洋流の満何歳で數ふるならば、彼と悦藏とは同年である。その満四十二年十箇月を不犯童貞で過した彼は、まだ若人の花盛りであり天才の蕾であり希望に直面した働き盛りだつたのに實に惜しい事をしたものである。湖畔の聲二百七十九號は彼の追悼號として其の遺稿を掲載した。

一月六日から十日まで東淺井郡海老江でイエスの友の會主催の農民福音學校の開講があり、一月十二日から十七日までは、西村關一・大原義雄の主催する農民福音學校が兵主村野田で開校され、一月十五日から十九日まで蒲生郡市邊村で滋賀國民高等學校が開かれ、十九日から一箇月間湖畔國民高等學校が堅田で催されたが、渡歐準備と上京とで多忙であつた彼は、八幡教會での三回の講演と、十七日午前の滋賀國民高等學校での佛教思想より見たる基督教と題する二時間に亙る講演をしただけであつた。上京中一月二十日には村尾昇一と共に沖野岩三郎を訪問して米・歐・パレスティンを見て來た新しい感想を聞いて得る所があつたと喜んだ。

二月二日はいよいよ世界一周の旅に上る日である。最近に撮つた家内中の寫眞は内ポケットに入れられた。彼は何所へ行つても何時でも新しい家内中の寫眞を懐から離した事がない。此の日も朝食後



家内中で寫眞をとつた。そして、きよの・希夫と共に十時半の汽車に乗つた。佐藤安太郎・佐藤久治・宮家磐夫・諸川稔も一緒に乗つた。京都驛で、きよのに別れ神戸に着くと直ぐ郵船龍田丸に乗り込み百六十三室に入つた。叔父吉田金之介・妻タキその他大勢が見送りに來た。佐藤安太郎・佐藤久治・諸川稔・吉田希夫の四人は同船で横濱まで見送つた。翌三日午前十一時半に船は横濱の岸壁に着いた。上陸するとすぐ博雅へ行つて支那料理を食べそれから返子へ行つて英文學者村井知至に會ひ、鎌倉の大佛を見、鶴が岡の八幡宮に詣り、それから東京に行つて歌舞伎座に菊・吉・羽の合同劇を見、四日の朝船室で希夫と二人涙ながらの祈りをして別れた。それから十一日の午後八時にホノルル港に着くまで幾冊の書物を読んだが、その中で高田竹山の漢字の起原と支那の古代文化は非常に彼を益し、乗客淺岡信夫の映畫人の話は彼を最も喜ばせたい。十二日の正午前に龍田丸へ歸り桑港に着いたのは十七日の朝であつた。けれども上陸せず直ぐ同じ船でロスアンゼルスに向ひ二十日の朝そこへ上陸した。そして知人を訪問したりサナトリアムの施設を見學したりして、二十四日にはオクラホマ行の汽車に乗つて、二十五日の四時半に着いたが、車中で右から左から支那問題を持ちかけられて應接に暇がなかつた。二十六日にはウイチタの商業會議所で日支問題の説明をした。新聞といふ新聞には支那問題について日本の悪口を書き立ててゐる。それを見るたびにその反駁文を投ずると翌日の新聞にそれが載つてゐる。

三月一日の新聞にはリンドバークの愛兒がギャングにさらはれたといふ記事がのり、十五日を経て手掛りがなかつた。續いて寫眞機王といはれたイーストマンが七千五百萬弗の私財を公共事業に投げ出して置いてピストル自殺をしたと言ふ記事が新聞を賑はした。

十五日にはニュウヨウクに入りエンバイヤステエトビルの八十五階で晝食をしたため、それから日支問題の會合へ引つばられ辯護と主張に日も足りなかつた。それからボストンを経てカナダに出、二十日には大西洋上に浮んだが、そこでも日支問題が追つかけて來る。二十九日の朝船は八日目にリバプウルに着いた。ト陸するとすぐ汽車に乗つてグラスゴウに行き、大學や博物館を見て夕方汽車でエチンバラに着いた。翌日はエチンバラ城・ジョン・ノックスの家、大學などを見て夕方リバプウルに歸り、それからロンドンを経て四月六日の午後六時十分にパリに入つた。三日の後同行のメルルがマデリン(Madeline)教會へ行くと言ひ出した。何の爲に行くのかと問ふと、そこには西暦千八百四十五年に製造した世界一のバイボオルガンがあるから、それを見せてもらつた上出來ることならちよつと弾かしてもらひたいと言ふ。けれども午後二時半には出發してスイスへ行く豫定になつてゐるので、用事が幾つも残つてゐる。で、メルル一人で出かけ、用事は悦藏が引受けたのである。

悦藏は二時半にホテルへ歸つて三時二十分發ロウザン行の汽車へ乗る支度をしてゐるとメルルが喜色満面で歸つて來た。



マデリン教會はバリの大寺院で、千七百六十四年から千八百四十二年まで七十八年かかつて建てたといふ素晴らしい建物である。そこには今から八十五年前に出来た實に立派なパイプオルガンがある。そのパイプオルガンを十九年間弾いたのが有名な音楽家サン・サアン (Saint Saens) であつた。今は其の一の弟子であるアンリ・ダリエ (Henri Dutilleul) が弾いてゐると聞いたメレルは、行きなりマデリン教會に押しかけて行つて、アンリ・ダリエに會ひたいと言つて受附に談判すると、あの人は八十歳の老人だから午前中は誰にも會はないだらうとのこと。それでも町名番地をきいて尋ねて行つてみると、果してまだ寝てゐた。名刺を通じて來意を告げると、午前十一時頃來いと、いふ。でメレルは書店へ行つてダリエの著した作曲集を探したが、どこへ行つても、あの人の著書は出版と同時に賣り切れだといふ。それでも根氣よく探したが見付らなかつた。失望して十一時に尋ねて行くと、ダリエは彼を待つてゐた。會つてみると神神しいそしてやさしい老人であつた。メレルがその由を告げると、私のを差上げませうと一冊の樂譜を自ら署名して彼に渡した。それからパイプオルガンを弾かしてほしいといふと、早速承知してくれたので、すぐ自動車で教會堂へ行つてみると、會堂一杯の人である。みんな喪服を着てゐる。何でも貴族か大富豪の葬式らしい。その中を二人は平氣で音楽室の方へ行つた。會葬者は有名なダリエがパイプオルガンで葬送曲でも弾くのだと思つて目禮した。それから音楽室へ行つてオルガンを見せてもらつた。メレルが、先生、一寸あなたが弾いて音を聞かせて

下さいませんか、いふと、ダリエは自分の好きなものを弾けと、言つてくれたか、下では葬式である。めつたな曲は弾けない。で、しみりしたものを一曲弾くと、ダリエはうなづいて、すばらしい (Recherché) と言つてくれた。メレルが遠慮してオルガンから指を離すと、よいからもう一曲弾けと言つてくれたので、遠慮しながら靜かに弾いてゐると、ダリエは自分の足で最大音を踏んで思ひきり音を出させた。それから會堂に降りて行くと、會衆は酔つたやうな顔附で神妙に坐つてゐた。えらい事をしたものだと思ひながら世界で有名なパイプオルガンと大音楽家とに別れてホテルへ飛んで歸ると、悦藏は荷物を前に時計と腕めつくらをしながらはらはらしてゐた。そして其の夜の十一時半に湖畔のヴィクトリアホテルに入つたが、メレルはまだパイプオルガンにしがみついてゐる氣分であつた。九日にはゼネバに行つて杉村陽太郎・原田健に會つた。杉村陽太郎と並んで寫眞をとつたが、五尺七寸の悦藏よりも彼の方がずつと高く且つ肥えてゐた。翌十日にはミラノへ行つて黒シャツ青年團の活潑な練成を見、十一日にはヴェニスに行つて二日間水郷を残りなく見、ゴンドラの中からヴェニスの建築を完全に視察した。

四月十三日から三日間、ロマの町で見るべき所は一箇所も残さず見た。出發前に沖野岩三郎から見落すなと注意された所は丹念に見た。何といつてもコロシウムが一番印象深かつた。それからエルサレムの階段といふスカラサンタを見た時はなる程と思つた。キリストがポンテオ・ピラトの審問を受



けるために昇つた階段だといふのを、ここに移したのである。多くの人が一段一段祈つては昇り祈つては昇る。しかも膝で昇るのである。その真剣さには驚かされた。ヴァチカン宮殿の美しさは金貨で張りつめたやうだと思つた。ミケランゼロの天井畫・壁畫は人間わざでないといふと只管に驚嘆した。十五日にはナポリに着いて十六日にはボンベイを見て来た。レストランで食事をしてゐると盲目の音楽家がゐて、誰に聞いたものか日本人がゐるといふので、ヴァイオリンで六段を弾いた。又ナポリ滞在中メレルと二人でハイフェツのリサイタルに出たりなどした。十八日にナポリを出て船でイタリアの東海岸を廻つてエルサレムに向ひ二十六日の夕方七時にハイファに着き直ぐナザレに行つた。船を出る時一人の旅行者が、パレスティンに行つたならトルコ帽を被つたアラビヤ人がゐて物をねだるから注意せよと注意してくれた。カサノヴァに着いてホテルに入つて夕食後山に登つて海を見ようとして表に出ると、そこにトルコ帽のアラビヤ人が二三人ゐる。これはいけないと言つてメレルと二人で裏門から出ると、そこにもトルコ帽がゐて案内してやらうといふ。案内はいらぬといふと、では無料でついて行つてあげると言つて、一人の大男が後へ跟いて来る。追つばらふわけにも行かず黙つてすんずん登るとトルコ帽もすんずんついて来る。誰も人のゐない所へ来ると何となく氣味がわるい。ところが案内にもトルコ帽から、あなた方はどこから来たのかと問はれた。日本から来たのだといふと、クリスチャンかと訊いた。さうだと答へると、トルコ帽もうれしさうに、自分も主キリストの信者で

ある。と、言つたので、悦藏もメレルも初めて安心した。それから氣をゆるして其の男に案内されて山の上から海上を見、山を降りてマリヤの井戸を見、マリヤの住んでゐた家だといふ岩窟を見てホテルに歸つたが、案内料を渡しても取らなかつた。

四月二十七日の朝八時前に昨晚のトルコ帽が来て案内してやらうといふ。で、自動車を備はせてイエスが最初の奇蹟をしたカナに行つて、そこからガリラヤ湖に行つた。其處で悦藏は記念のためといつて泳いだ。山の上から見ると箱根の湖水のやうに見えた。タイベリアス・ベテサイダ・カベナウムなどを巡視したが、ベテサイダの海岸に温泉があつたので記念の爲に沐浴した。夕方ナザレに歸つて今一度山に登つた。

四月二十八日には一路エルサレムに向つたが、タボル山を遙左に見ながら山を降つてシケム・ドタンの野を通つて舊約の昔をなつかしんだ。エバル山麓のヤコブの井の水を一杯飲んでみたが、とても冷たかつた。女が長い紐で井戸の中に蠟燭を吊りおろして水を見せてくれた。

四月二十九日には死海に行つて泳いだり、エリシヤの泉やヨルダン川を見、午後はサマリヤ人の宿、ゲツセマネの園、マムレの榎林などを見た。翌日はエルサレムの町を隈なく見て五月二日にはエジプトのカイロに着き、三日には博物館に驚異の眼を輝かし、それからスヒンクス・ピラミッドなどを見るため象や駱駝や驢馬に乗つて駈け廻つたが到る所バクシイシに腹を立てた。バクシイシは金



を呉れよといふ乞食言葉で日本語のお恵み下さい（賜物）の意である。支那の乞食の言ふ進上進上と同じ意味である。

ポウトセイドからやつと日本船の白山丸に乗り込み日本茶を飲み柏餅を頬張つたのは五月五日端午の節句であつた。六日にはもう紅海から遙にシナイ山を眺めてゐた。

五月十六日にはコロンボに上陸して市内見物をすませ、十九日には船内からスマトラ島を眺め、二十一日にはシンガポールに上陸してジョホウルの水源地や護謨林植物園を見、五月二十六日には香港島を一周し、二十九日朝上海着、上海事變後の最初の入港船として上海に着くと、立派な海軍士官が二人を迎へて来てくれてゐた。それは大東亞戦で名譽の戦死を遂げられた水野恭介海軍少將（當時中佐）であつた。水野少將は二人を案内して事變後の上海を見せてくれ、數人の日本人と共にある支那料理店で二人のために歓迎の宴を開いてくれた。その夕、二人は初めて水野少將の案内で艦上に行はれた軍艦旗降下式に列席、君が代が吹奏された時にはやがて歸り着かうとする祖國を想ひ深き祈念を捧げたのであつた。六月一日に白山丸を神戸埠頭に乗りつけたのは午後三時であつた。船上から見ると岸壁に希天の姿を第一に見つけた。大村甚三郎・岡部五峯・吉田金之介・吉田茂治・竹中勝男らの顔がだんだん見えて來た。すぐ汽車に乗つて京都まで來ると、そこに、のぶ・たかの二人が待つてゐた。

六月十一日には同志社大學の學生俱樂部で講演し、翌十二日にはのぶ・たか、兩人をつれて同志社教會に行つて講演した。

六月十八日には智恩院派所屬の佛教日曜學校教師十二名が近江基督教傳道團を訪問の知らせがあつたので、メレルに萬事を託して置いて同志社大學に行つた。午後一時半から語學大會があつて、その審判員の一人に選ばれたからである。二十四日には新築の教育會館で旅行中の印象を語つた。聴衆六百人といふ盛會であつた。二十八日には同志社大學講堂で精神講話をした。

此の頃 きよのは不快なので三十日に大阪醫大で診察してもらふと乳癌の疑があると言はれて入院した。そして七月一日に手術を受けたが、五日更に小澤外科で大手術を受けた。

きよのが大手術を受けた七月五日に初めて八幡町のメンソレータム工場で米國製に劣らない立派なメンソレータムを作つた。對米爲替相場が下落して輸入ではどうしても引合はぬ難局を切り抜ける見込がついたのである。

七月十八日に きよのは大阪醫大病院を退院することになつた。此の十八日間悅藏はおほかた大阪の大黒屋に泊つて、きよのの介抱に努めてゐた。

八月十六日には淡路の岩屋の田代溫泉大龜旅館で日本組合基督教會社會部主催の修養會があつて、悅藏はそこで現代の經濟的危機と基督教と題して講演をしたが、彼は牧師達の反應に乏しいのを慨く



やうに其の日の日記に、元氣なし。と、書きつけた。翌日の修養會にも出たが其の日の日記帳にも、何の變哲もなし、宗教の無力を思ふ。と、書きつけた。それからぬか二十三日と二十四日の兩日坂本の芙蓉園で縣内基督教役者を招待して社會民衆黨の片山哲の日本の政治運動についての講演を聞かじめ、彼も歐米經濟界の現状を語つた。

九月は彼にとつて非常に多忙な時であつた。六日に上京して七日の夜は各新聞社の廣告主任二十餘名を星方岡茶寮に招待した正路喜社の依頼で歐米漫遊談を試み、十日には群馬縣澁川に行き中の條教會で、十一日には東京松澤教會で、十八日には兵庫教會で朝夕二回、二十日には八日市中學體操場で、二十一日には能登川工業試験所と兵主村野田とで、二十二日には仁保の北里小學校で、二十四日には大阪浪花教會で、二十五日は京都平安教會で、いづれも講演の依頼に應じたのであつた。

十月十八日に、きよの同行ですみれ丸に乗つて別府に向ひ、十九日に別府の觀海莊に入つて二十日六日まで滞在中、別府文化協會・高等女學校・別府メソヂスト教會・日本基督教會・大分高等商業學校などで講演を依頼せられたのであつた。二十七日に八幡町へ歸ると二十九日には第五回通信傳道會議の爲に村尾昇一・長尾半平等を迎へて二十九日には教育會館で世界を廻る。と、題して講演會をした。

彼がきよのを伴れてすみれ丸に乗つた日の十月十八日から東京時事新報に、琵琶湖畔に實在する

美しき理想郷と題する記事が連載せられ初めた。そして其の結論は、其所に生活し活動し傳道し經營する人人に接しては如何にも信仰の力の強いものであることを感じずにはゐられないと言ふのであつた。

此の月彼は日本組合基督教會理事に選出されたのである。

十一月九日、上京して全國基督教協議會に出席し、翌十日夜基督教聯盟總會に出席した。翌十一日には基督教聯盟財務委員長を承諾した。

十一月十三日に教育會館で開いた滋賀縣基督教信徒大會には三百四十名の多數が出席した。早川喜四郎の奨勵と悅藏の初期傳道物語とがあつた。

湖畔の聲十二月號に、きよのは、再生への感謝―神様皆様有りがたう―といふ長文を掲げて、自分の生を此の世に享けた七月四日に大手術を受ける爲に阪大病院に入院した感想を述べて、四十三年間此の日には必ず兩親が心盡しの赤飯を炊いて祝つてくれた日に、病院の一室で同信の人たちから涙の祈をしてもらつた時の心情を吐露したのである。一夜祈り通して大きな者の懐にいだかれた氣持で手術臺に横たはつた時、兩親と夫と親しい人達が室外の廊下で祈つてゐてくれた時の氣持を書き盡して餘りがなかつた。

十一月十六日には名古屋組合教會で、十七日は名古屋中學で十九日には神戸日本基督教會で、二十



四日には木ノ本農學校で、二十七日には堅田會館で講演をした。木ノ本で講演をした日に米原で千兩箱を見つけた彼は、早速それを買つて歸つた。東京から兒童教育の研究者高崎能樹を招いて滋賀縣下の保育大會を開いたのは十一月二十三日であつた。高崎能樹は三日間滞在して清友園で指導講演をしたり彼の主張する父の會を開いたりした。

十二月になつてメンソレータム工場は非常に多忙を極めた。月末には工場の女子従業員四十六人を備つて包装をしてゐた。三十日の朝から佐藤安太郎同道で神戸に行き吉田金之介・大村甚三郎・岡部五峯等を招待して、メンソレータム製薬材料の買入方を相談した。いよいよメンソレータムは日本から外國への初歩を踏み出したのである。

彼は此頃から日本の基督教に就いての改良意見を十分に腹藏してゐた。それは教會禮拜を今少しく美化し音樂化し禮拜化する事であり、日曜學校を單級化する事であり夜の集會は教育化を主張した。宗教家が宗教を知らぬ缺點を嘆き、牧師は天理教・大本教・佛教・神道の如何なるものであるかを知つて後基督教を説くべきで、マルキシズムが如何なるものであるかを知らないで聖書ばかりを説いてゐては此の社會を導いて行けない。今の基督信者や傳道者は基督教自身の自己反省をしない。本當の基督教を傳へようとするならば先づ其の罪惡史を知らなければならぬ。嘗ては組織されたるギャングであつた基督教を知らなければならぬ。傳道者の生活問題を解決して貧しき牧師、病める牧師の

救濟法を講じる必要がある。憐れむべき牧師の末路を見殺しにして道を説いても駄目である。牧師だけに傳道を一任して信者が其の傳道に協力しなかつたならば佛教と同じ運命に陥るなどといふ意見を手記し、且時々友人たちに語つた。しかし、それは教役者間にあまり好感を以つて受入れられなかつたらしい。

## 二十八、勤勞女學校と向上學園

|| 昭和八年 ||

昭和八年一月一日は日曜であつた。悦藏は四十四歳の春を迎へて朝の禮拜に教會に行き午後一時から近江療養院で新年會を開いて感話をした。三日の日記に、四十四だ。そろそろ今年あたりから若返らんとする。音樂と勉學だ。世界を研究しよう。と、書いた。

翌四日は教育會館で學生基督教青年會冬期學校を開會した。久しく沈滞勝であつた青年會の甦生會である。講師は理學博士山本一清・フェルプス・悦藏・日野眞澄・ランバス女學院長田中貞・メル・齋藤惣一・高橋卯三郎で、七日まで四日間の會期に五十人の學生達が有益でしかも愉快な日を送つた。

悦藏は此の冬期學校で三回の講演をしながら、安土まで講演に出かけたりした。二月には長濱・信樂・米原・水口に傳道旅行をして、三月三日から十二日まで近江農村青年學校を



開いて其の校長となり十日の鐘詰生活をした。講師は賀川豊彦・湯淺八郎・山本一清・岡本利吉・栗原陽太郎・野洲九郎・清水安三・見波定治博士・關根良平・平林廣人・竹中勝男・山邊久吉・矢部喜好・メレル・満喜子・佐伯理一郎・高橋卯三郎・内炭政三・高橋虔・鎌田漢三・西村關一・松平正次の二十二人であつた。

三月末の調査で近江基督教傳道團員の家庭に、學齡以下の幼兒五十五名を計算するに至つた。

四月四日午前九時近江勤勞女學校の開校式があつた。此の學校の創設起原には隠れたる秘話がある。前年悦藏は愛子のぶ・たかの二人を伴れてメンソレータム工場を視に行つた。その時工場で働いてゐる小娘の中に、のぶ・たか、兩人が小學校で同級であつた少女の數人がゐた。のぶ・たかの二人は家に歸つて父悦藏に對つて言つた。私たちはこんな幸福な女學校生活をしてゐるのに、あの人たちは小學校だけで勞働してゐるのを見ると氣の毒でたまらない。何とかしてあの人たちも女學校程度の勉強の出来るやうに考へてほしい。

悦藏はその話に胸を打たれ、近江勤勞女學校の設立を計畫して一月六日の傳道團例會に其の計畫を發表して以來、數回の討議があつて遂に開校の運びに至つたのである。

第一回募集生徒十六名で、校長は悦藏、主事は檜山嘉藏、牧師として八幡町と最も古い關係があり近江基督教傳道團の組織以前から、謂ふ所の魚屋町組と離すべからざる關係を有する大橋五男を招待

した事は、近江基督教傳道團員の心事を語るものである。

開校式には山本一清・日野眞澄・八幡商業學校長北川勝次郎・清水安三らが來賓として臨席、百二十名の關係者が集つて盛大な開校式を行ひ、悦藏の開校主意の披瀝があつて自らこれを開口式だと言つた。

翌五日午前八時から授業が始まり、大橋牧師の獎勵後檜山嘉藏は悦藏著す所のナザレのイエスを教科書として國語教授を始めた。十日から晝食は學校から與へることにした。毎日訪問者の有益な講話があり、吉川靴店の店主を招いて靴の手入法を講習したり、工場で働いたりしながら國語・歴史・地理・英語・裁縫を學ぶのであつた。

近江勤勞女學校開校式のあつた日、昔の魚屋町組の山本治三郎が入團した。彼は舞鶴市の酒屋の子で滋賀縣立商業學校に入學してゐる頃、始めてメレルの聖書講義を聽いて感激し、魚屋町組の中に入つて共同生活を始めたのは明治三十八年十月十八日であつたが、十一月十九日に決心して蘆田隆三・藤谷光之助らと共に八幡教會で洗禮を受けたのであるが、夏期休業に家に歸ると基督信者になつた事を知つた兩親は非常に反對して聖書を読むことも祈ることも禁じられたので、酒桶の中に隠れて聖書を読んだ程であつたから、卒業後郷里へ歸つて自己の信仰を表現することも出來ず兩親の意志を尊重して其のまま酒造業を續けてゐたが、心の中では何とかして信仰生活に入りたいと思つてゐた。その



うちに酒造業が全国的に衰頽して來たので、他から取次販賣をするやうになつたので幾分か氣が樂になつてゐるうちに、大正七年シベリヤ出兵の際召されて下の關まで行つた時神戸市に米騒動の起つた話を聞いた。そして翌年三月に歸還を許されたので、バルチザンの厄にも遭はず無事であつた事を感じ謝するにつけ酒類販賣業を続ける事を心中では悪いと思つてゐたので、醬油・炭などを賣る事に力を注がうと考へてゐる矢先、大正八年六月の或日堺市の東洋一といふ銘酒の製造元が舞鶴地方の得意先四十名ほどを招待して天の橋立で園遊會を催すことになつた。彼の家はその東洋一の三大販賣店の一つであつたから彼は招待主として活動しなければならなかつた。で、舞鶴の藝妓を總揚して一行百餘人が東洋一と染めぬいた手拭を首に巻きつけ天の橋立に來て飲めよ歌へよの大騒ぎをなすべく、宮津まで來てその波止場に立つてゐると山本さんと、人込みの中から聲をかけた者があつた。振返つてみると何と其の聲の主は十四年前に別れたメレルではないか。山本さん今何をしてゐますか。と、メレルは訊いた。別れて以來十四年間、度も會はなかつたメレルである。もう顔を見忘れてゐる頃なのに、ちゃんと覚えてゐたのは、自分がメレルの祈りの對象として記憶せられてゐたのであらうと思へば何とも言はれない氣持がした。何と返事のしやうもないので正直に、酒を賣つてゐます。と、言ひながら首の東洋一の手拭をとつた。いけません。あなたが酒をやめると私に約束したのは十五年前ではなかつたですか。と、人込みの中で嚴しい詰問である。彼は頭を垂れたまま何とも言へないで黙つ

てゐると、メレルはこれから舞鶴へ行くから一緒に行かうと言つた。けれども彼は園遊會に來た連中の後始末があるから行けない。と、言つたが、メレルは、いや、人殺しの世話をしないでよい。さあ一緒に行きませう。と、言つて無理に停車場へ引つぱつて行き、すぐに二等切符を買つてくれて遮二無二汽船の中へ彼をつれ込んだ。そして舞鶴の常盤樓旅館に行つて始めて満喜子夫人に面會した上、三人は夜の更けるまで話して家に歸つたが、どうしても眼が合はない。十五年前の事がいろいろ想ひ出されるのである。翌朝早くメレルが訪ねて來て、これから一緒に八幡へ行かうと言つた。新婚旅行の土産に彼を八幡へ引つぱつて行かうといふのである。家事の都合があるから、さうはいかない。と、言ふと、やらうと思へばどんな事でもやれる。と押し返して來る。けれども實際問題として今日から八幡へ引越するわけには行かない。

彼はメレルを見送つたあとで、先づ轉業を決心したが、これといふよい職業が見つからない。煩悶が襲つて來る。九月に大阪へ出て豊中で米國野球團の野球を見てゐるうちに、運動器具を賣らうと考へつて、間もなく一大決心をして酒類の販賣を斷然やめ、運動具類の店を出してみると、案外にもそれが成效であつた。人生は時として背水の陣を張るべきものだと思つたので、其の年の十二月二十五日にクリスマスプレゼントの代りに二間程の長い手紙を書いてメレルに送つて轉業の始末を報告した。そして翌年の春八幡町へ來て事務所を訪問すると村田幸一郎と悦藏とがゐて十五年ぶりの面會を



非常に喜んでくれた。武田猪平牧師が時々訪ねてくれた。それからそれが縁になつて佐藤安太郎が舞鶴に来てメンソレータムを賣れといふので店先へ並べて置くと、だんだん使用者が出て来て、一年に三百圓ぐらゐ賣れるやうになり、町の人達はメンソレータムといつても、いろいろあるから、山本のメンソレータムでなければきかないと言つて買ひに来たのである。

運動具を賣つてゐる關係から、ミイズナアピヤノの取次などして、だんだん關係が深くなつて来た時、近江基督教傳道團の一行が天の橋立を見に来て舞鶴へ立寄つたので、由良まで見送つたのであつたが、昭和八年になつて、住み馴れた舞鶴の地を去つて、三十年目になつかしい魚屋町へ歸つて来たのである。

清水安三は言つた。今や山本治三郎も歸つた。大橋牧師も歸つた。山本大橋兩氏は近江基督教傳道團にとりて創世記時代の人人である。と、今まで傳道團にゐた創世記時代の人たちはメレル・村田幸一郎・悦藏・古長清丸らであつたが、偶然にも同月同日に更に二人の創世記時代の人人を加へたのである。魚屋町時代から三十年間、メレルを初め古い同窓たちの熱い祈りは此の日まで續いてゐたのである。

五月五日には午後七時から近江勤勞女學校勞作室で向上學園の開園式を舉行した。園長は佐藤安太郎で其の趣旨はメンソレータム包裝部に働いてゐる五十餘名の婦人たちを四組に分けて毎日午後一時

から三時まで各一時間づつ勉學させようといふのである。つまり勤勞女學校の姉さん學校で、働きなから教育を積んで行かせようとするのである。悦藏・清水安三・堀貞一の講話があり有意義な開園式であつた。

五月九日には大阪大丸百貨店落成祝賀會があつた。この設計は近江基督教傳道團建築部が引受けたもので、デザインは佐藤久勝の作であるが、佐藤久勝は此の落成式を知らずして亡くなつた事を團員一同は悲しんだのであつた。

五月十一日十二日の二日間、團員八十名は紀伊白濱に行つた。普通の旅行會ではなく修學旅行と稱した。社長・重役・社員・小使、そんな區別を取除いた兄弟で、酒を飲まず煙草を吸はず、みんな女中を手傳つて膳を運ぶ寢床を敷く座敷を掃くといふ行動は、旅館の人たちを驚かしめたのであつた。

此の楽しい旅行から歸つた後同月二十日の午前九時から北ノ庄恒春園で天上の友を偲びながら第四回記念祭を執行した。

湖畔の聲七月號で彼は集會主義の清算といふ一文を發表した。大量生産といふ言葉に釣り込まれた宗教家が、大勢を一堂に集めて説教したがる誤謬を罵つたのである。今の教會はあまりに集會が多すぎる。説教が多すぎる。集會は會式流に年に一回か二回でよい。それよりも、もつと個人個人に宗教を浸み渡らせなければならぬといふのである。



七月二十三・二十四兩日は御殿場の東山荘で講演をした。

八月六日正午大阪發ウスリイ丸に乗つて大連・奉天・長春・新京・ハルビン・京城巡視の旅に上り、二十日の午後二時に無事使命を果して歸宅した。

九月十八日にメレルは急用があつて米國へ行くことになり、國際汽船霧島丸に乗つた。龍田丸の一等船賃は千二百圓であるが、霧島丸は二百六十圓だといふので、メレルは霧島丸に乗つて其の差額千圓近い金を傳道用に使つたと言つた言葉に悦藏は感激したのであつた。

翌十九日に悦藏は八幡町を出發して仙臺・小樽・札幌・稚内・大泊まで行つた。同行は佐藤久治であつた。

十月五日に樺太の旅から歸つた彼は、十月十五日からマルコの傳へたイエスと題する聖書講解を書きはじめた。その緒論を發表したのは昭和四年の春であつたが、その後財界の大恐慌で二たび歐米に出かけて行つて、近江基督教傳道團がメンソレータムを獨立製藥する運びに漕ぎつける爲の東奔西走で一時中止となつてゐたのを新に復活執筆したのである。

湖畔の聲十月號以後は東京牛込の日清印刷株式會社で印刷することになり、記者宮家啓夫は編輯人として毎月東京へ出張することになつた。つまり湖畔の聲の東京進出である。

十二月八日にメレルは故郷から歸つて來た。その日からクリスマス祝會を開始して二十八日までに

三十五箇所で祝會を開いた。

悦藏著近江の兄弟等、は此の年三十四版を重ねるといふ賣行であつた。

## 二十九、近江兄弟社 〓昭和九年〓

昭和九年を迎へた。悦藏は四十五歳になつた。魚屋町組が始まつてからもう滿二十九年を經過して、今年で三十年目に入るのである。

これまで此の團體を近江ミツションと言つてゐた。前年十二月十三日まで發行してゐた事業報告書を近江ミツション週報と題してゐたが、十二月二十日發行の分は近江兄弟社週報となつてゐる。今までは、普通に近江ミツション、稍四角張つて近江基督教傳道團とも言つたが、病院も經營すれば建築もする。薬も賣れば樂器やストウブや臺所道具も賣る。その利益で傳道するのだと言へば傳道團の名もふさはしいが、それだけでは言ひ盡せないものがある。そこで近江基督教慈善教化財團とも言つたがあまりに長くて呼びにくい。近江セールズ株式會社・ヴォーリス建築事務所・近江ミツション本部・近江療養院の四つの名がいつも並べられてゐるので、外部からは其の中心がどこにあるのかわからなかつた。これを統一して近江兄弟社とする案は前年末に成立してゐたらしいが、此の年の二月



二日から近江兄弟社と一定したのである。

湖畔の聲は今まで八幡町中心であつたが、此の一月號から第二十二卷第一號、東京進出第四號として東京中心の出發をしたのである。比屋根安定・畔上賢造・田川大吉郎・中山昌樹等が新に執筆し、小川未明が童話を書き、沖野岩三郎が長篇小説日の輝くところを掲載しはじめた。たしかに内容一新である。當時婦人雜誌では主婦の友、大衆雜誌ではキングが各百萬部を印刷して東洋一と號してゐた。然るに基督教の雜誌は新人滅び開拓者衰へ、基督教世界も福音新報も一般社會とは没交渉な状態にゐる。内村鑑三の聖書の研究のやうな有力雜誌でもやはり一宗一派の讀者を繋ぐだけである。誰が讀んでも有益でそして傳道的な雜誌を悦藏は渴望してゐた。その渴望を自ら歸すべく湖畔の聲を東京に進出させ内容を一新したのである。題號も湖畔の聲・湖はんのこゑ・湖畔の聲・湖畔之聲・湖畔ノ聲・湖畔之聲などと一定してゐなかつたのを、本號から湖畔の聲と確定したのである。昭和二年三月に發行した第六十九號を湖畔の聲と題して、此の雜誌も發行以來十六歳を経過したから、もう肩あげの取れる時だと言つたが、其の後の八年間にまだ名前の書き方だけは六通りあつて、時に従つて氣に向いた文字を遣つてゐたのを、いよいよ本號から、湖畔の聲として社會に打つて出たのである。窃に言へば彼の心中湖畔の聲を基督教會のキング・主婦の友たらしめようと欲したのである。それにしても新年號の卷末に團員全家族四百十五人がずらりと名を列ねた謹賀新年の廣告は決して鬼面人を嚇

すものではなく、三十年前の歴史を知つてゐる者には無量の感慨を催さしむるに足るものであつた。メンソレータム製薬工場では女子従業員だけで八十五名を備ふやうになつたので、一月三十一日に吉田金之介を其の工場長にした。

悦藏は此の月朝鮮人街道の歌を作つて米山輝男が作曲した。その歌は、

思へばむかし天正九年

安土の城へところざし

いそいそ通る宣教師

オルガンチノはジャイアント

京街道を東へと

其の行列をながむれば

みやげ珍らしオルゴウル

テレスコープに虎の皮

しゆちん びろうど 黒坊主

光陰早く時たちて

明治の御代となりぬれば



旅順は陥る大勝利

三十八年きさらぎの

寒空さむしひとりぼち

八幡町に來りしは

ヴォーリスセンセイ山高帽

黒の外套にぼろカメラ

アイアム ロンリイ 今日

ささやかなりし一粒の

からし種にも生命あり

めぐみあふるる日月を

はや三十年と重ねれば

理想に燃ゆる幾百人

林の如く生えいでて

結ぶちぎりは兄弟社

望む行く手は神の國

進む行く手は神の國

と、いふのである。此頃から今までの數種の呼稱は解消されて、近江兄弟社建築部・近江兄弟社薬品部・近江兄弟社教務部・近江兄弟社雜貨部・近江兄弟社圖書部・近江兄弟社工場部といふやうに呼ばれたのである。彼は湖畔の聲二十二卷二號に近江ミツシヨンの最後と題する一文を掲げて此の経緯を明にした。

二月十九日から二十八日までの十日間教育會館で第二回近江農村青年學校が開校された。

悦藏の作つた校歌は、

しつかりやらうぜ兄弟よ

われらの聞きしみ言葉は

生命をかけし一大事

理想の郷土立てんため

近江の山に野に畑に

湖畔の田圃にいざ行かん

と、いふのであつた。二十四名の生徒は聲高らかに毎日これを歌つて活氣づいた。



湖畔の声三月號から二回に亙つて矢内原忠雄の論文日本的基督教が掲載された。三年以前から東洋的基督教の提唱をしてゐた清水安三も將來の日本の基督教と題して教會の日曜集會を聖書研究會として春秋二季に大祭を行ひ、もつと卒業信者を親切に扱へと叫んだ。その湖畔の声は三月號五千部を刷り一部十錢の誌代で二百數十圓の入金があつた。三月九日の兄弟社週報で彼は此の雜誌を將來キング的存在たらしめん希望だと告白してゐる。

吉田きよのが創めた料理講習會は、此頃大いに發達して近江家政塾と名のり、習字・手藝・刺繡・編物・造花・人形の造り方などを講習するやうになり、平均出席者十五人になつた。一種の花嫁學校である。

四月四日に近江勤勞女學校の新學期始業式があつて入學申込者七十四名のうち十六人を採用した。四月二十四日、大阪朝日會館で結核豫防週間十周年記念講演會があり、悅藏はそこで近江療養院についての講話をした上、自分もまだ二三十年生きてゐて死にたいと語つた。七十四五歳までは死ななうと思つてゐたらしい。

五月二十七日午前十時十分に渡邊光太が六十九歳で永眠した。彼は羽前上の山松平藩主の家臣として慶應二年一月八日に生れ、明治十二年に十四歳で山形縣の官吏となり明治十五年には十七歳で山形縣巡查となつてコレラ豫防に盡力した廉で金二圓七十錢の賞與を得てゐる。二十二歳で三浦清子と結

婚して宮城縣廳の土木課に務めてゐるうち、明治三十年四月六日、三十二歳で仙臺日本基督教會で洗禮を受け一女きよのを東京聖坂なる普蓮土女學校に送つたのであつた。その後岩手縣の土木課に轉任して、更に再び山形縣に歸り大正七年まで勤務してゐたが、同年五月に辭職して娘のゐる近江八幡に來て近江療養院の事務長として十七年間精勤したのであつた。二十七日の朝早く起きて向ひの八百屋の細君と挨拶を交し、庭の水撒をすませ、朝風呂に入り、髯を剃り、それから四十九年連れ添うた妻清子とさしむかひに朝食をしたため、ゆつくりと食後の茶を飲んで、これから教會の禮拜に出席しようと言つてゐるうちに急に病氣になり、發病後僅か四十分でこたされたのである。其の日愛嬌悅藏は秋田市へ旅行してゐたので最後の面會が出来なかつたのは、双方とも残念であつたらう。

渡邊光太は永眠した。しかし、彼の功績は近江療養院のあらん限り永久に残る一つの事件がある。近江療養院には井戸がなかつた。近い所から水を引く便もなかつた。入院患者従業員百人近い者の飲料水は最初の頃近村から一荷何錢といふ運賃で擔いで來たので、一箇月の水代百八十圓づつを毎月支拂つてゐた。これではたまらぬといふので湖水から水を引いて淨化して飲んでゐたが其の設備に數千圓を要した。ところが昭和六年の四月に渡邊光太の發議で附近の天狗岩鼻の小さい竹籤を買ひ取つて岩を破碎すると其所から湖東第一の水と言はれる清水が出たので、それを渡邊の井戸と名づけた。そこから流れ出る清水は近江療養院の患者にも従業員にも春夏秋冬の別なく十分に供給せられつつある。



この渡邊の井戸が発見されたのは彼が三十一年間土木課に勤務してゐた職業意識の土木的第六感が働いたのだと高橋卯三郎は言つてゐる。

去年九月に着工した今津基督教會館の竣工献堂式は五月十日に舉行した。町長・中學校長・縣會議員らの祝辭があつた。米原紫苑會館・野田基督教會館・水口基督教會館・堅田基督教會館・八幡近江兄弟社教育會館、そして此の會館が新に出來たのである。湖畔傳道の陣容は着着整備されて來る。

六月に八幡町は町の東端に七千坪の土地を買つて來年度から高等女學校を新築する事になつたので現在の學校敷地とその舊校舍を近江兄弟社で三萬圓に買ふ約束をした。ところが佛敎聯合會が反對運動を起し、その敷地は國學者伴高溪の出生した土地であるから、そんな由緒深き土地を基督教徒の手に渡してはならないといふのであつた。けれども勤皇家西川吉輔の屋敷跡が現に近江兄弟社の事務所であり、朽木侯の陣屋跡が近江兄弟社の納骨堂になつてゐるではないかと言ふ理窟で、それを壓へることは出來なかつた。反對者はこれを手渡せば勤勞女學校と向上學園とが發達して基督教教育が盛り上るのが恐ろしいと思つたのであらう。或意味に於いて宗教家ほど嫉妬深いものはない。

七月末に兄弟社の内部を庶務部・教務部・建築部・藥品部・雜貨部・療養院部の六部に區別し、社員は正社員・準社員・補員・見習員・雇・臨時雇の六通りに内規した。その總員は二百九十八人で、その内容は庶務部十八人、教務部五十人、建築部二十七人、藥品部百四十八人、雜貨部二十一人、療

養院部三十四人であつた、近江兄弟社の傾向が大體この人數で察せられる。

八月三日に悦藏は近江兄弟社週報第三十六號で來るべき十年に於ける實現したい施設の私見を發表した。それは八幡町女學校舊校舍を買収してこれに大修繕を加ふること、近江兄弟社小學校を建てること、三百五十人の兄弟社食堂、一日四百人入浴の浴場を設けること、兄弟社消費組合を作り、共同炊事米飯配給所、洗濯所、農村青年學校とその農場を所有すること、兄弟社經營の旅館を建てること、公園と圖書館を設けること、そして五拾萬圓を投じて八幡基督教會堂を建設することなどであつた。中に就いて農場候補地は島村大字奥島の海拔百五十メートル乃至二百五十メートルの高さに在つて三方山に圍まれ東南方の展開せる土地三町六段歩を第一に選定した。此所は八幡町より一里ばかり離れた場所です菜・果樹を栽培し養鶏・山羊飼育・養蜂に適すると鑑定したのである。地價は一町歩二千五百圓から二千八百圓で買へる見込であつた。

第二の候補地は油日村大字余野で、海拔二百四十メートル面積六十町歩で、八幡町から十里半ほど離れてゐる。作物は果樹蔬菜陸稻で、陸稻は一段歩四俵か五俵の收穫があつて、地價は最高一町歩一千圓最低六百圓で買ひ得る見込であつた。此の二箇所とも、位置・面積・氣候・地勢・交通・土地の分布・土壤の性質・土地の利用・水利・適作物・家畜・價格・農業に關する地方的施設・人情風紀など可なり精細に調査を進めてあつた。



黒雲志賀の國覆ひ

鳩の海邊はさわぐとも

生命をかけて信じたる

理想の郷土建つるなり

Though dark storm clouds shroud the lake,

Threatening Shiga's peaceful plain,

Neighbors all our aims mistake,

And our labors seem in vain;

Still we trust Truth must prevail

Over error, hate, or fear;

Still our struggle shall not fail,

Till God's Kingdom rises here!

これは悦藏の作詞でメレルのその英譯であるが、彼は常にこれを讚美歌百九十三番の譜で歌つてゐたのである。彼は以上の計畫を既に一部分實行してゐたが、近江兄弟社は全然資本主義の系體から離れて本當の兄弟社としての生活を營みたいといふ念願が如何に切であつたかといふことは此の夢想的

計畫を見ても察することが出来る。

八月二十日から二十二日まで例年の如く坂本芙蓉園で滋賀縣下教役者修養會を開いて東京神學社教授熊野義孝の講演を聞き、二十二日の朝は日吉神社の境内で早天祈禱會を開いて、一同靈感に充たされたのであつた。喜んで來り集つた者二十八名。

此の頃吉田政治郎は水口教會に在つて甲賀の魂を神に捧ぐるといふ標語の下に甲賀郡二十六町村を巡回傳道してゐたが、八月二十六日に教會員谷口源藏・寺村徳道・山崎由造・網木仁三郎・中西賢治・山下清之助の六人を伴れて信者訪問傳道に行つて來て、水口の多志樓旅館で祈つてゐるうちに七人は悉く聖靈に充たされた。聖書に書かれてある聖靈降臨の經驗を得たのである。七人は教會に歸つて兄弟生活をなす約束をした。爾來教會員は各自にスリツパを持つて禮拜に出、各自に提灯をもつて路傍傳道に参加し、正月餅搗は共同にし、各家庭で集會をして信仰を勵まし合ひ、毎日正午のサインを期して七人は七箇所にあつて黙禱をすることを實行した。この運動が起つた爲に水口教會では短期聖書學校を開いて信者の教養に努めるやうになつたのであつた。この七人組の結束はその後二年三箇月間早天祈禱會がつづけられいよいよ固く結ばれてゐたのである。

十一月十一日の八幡基督教會禮拜は、爲心町に建てられた教會堂最後の集會であつた。明治四十年九月十七日に獻堂式を擧げて以來二十九年間、大橋五男・宮森武次郎・田中金造・藤原鐵長・武田猪



平・高橋卯三郎等が教増を受持つて來たのである。

明治十三年に野間憲吉の自宅で八日市教會牧師須田明忠の聖書講義を始めたのが八幡教會の起原で、明治二十一年八月一日に第一代の傳道者宮川友之助が定住傳道者として來任し、小幡町中筋に一戸を借りて講義所を設けた時の會員は七名であつたが、明治二十六年五月十四日に三代目の傳道者村田平三郎が、講義所を池田町に移した時の家賃は月額一圓であつた。明治二十八年九月七日に四代目の傳道者岩村加次郎が講義所を仲屋町に移して家賃月額一圓二十錢を支拂つたのであつた。五代目の傳道者濱田乙磨が、明治三十四年六月二十八日に講義所を昇格せしめ八幡教會として、小幡町上筋二十二番地に移轉した時の家賃は二圓二十錢であつた。此の小幡町の教會にメレルが出席し悦藏が行き魚屋町組が出席し始めてから教勢は漸く盛になり、大橋五男が傳道してゐる頃、西幸次郎・千貫久次郎・藤居俊三・山本小太郎・野間りゆう・メレル等の協力で新築されたのが此の爲心町の教會堂だつたのである。明治四十年九月十七日に献堂式を舉げた此の會堂は百五十人を容るる廣さであつたが、教會の發展と共に狹隘を感じるに至つたので、大正十二年に増築して今日に至つたのである。けれども其の増築した教會も會員全體を容るることが出来ないもので、此の日の集會を最後に、近江兄弟社教育會館で禮拜と集會とをすることになつたのである。そして十一月十八日に始めて教育會館で朝の禮拜を行ひ、悦藏作詞米山輝男作曲の神にかへれを四部合唱したのであつた。明治四十年に悦藏の寄附

した説教臺は舊教會から此の教育會館に運ばれて昔のままに用ひられる事になつたのである。

翌十九日彼はきよのをつれて九州福岡に出立し二十一・二十二の兩日九州學院・九州女學院で講演の依頼に應じ大小十四回の集會をしてへとへとになつて歸つたのは二十七日の午後であつた。

本年のクリスマス祝會は三十九箇所で行はれた。

十月二十二日から二十四日まで日本基督教通信傳道協會總會を教育會館で開會したが、その席上で湖畔の聲を以つて基督教界の代表雜誌とすべしといふ議題が討論せられた。本年度の新しい執筆者は比屋根安定・畔上賢造・田川大吉郎・中山昌樹・小川未明・沖野岩三郎・村尾昇一・矢内原忠雄・浦口文治・小辻節三・佐藤瑞彦・鷺山第三郎・市川房枝・田中龍夫・荒木貞夫・山田わか・村岡花子・等であつた。

### 三十、死線を越ゆ

||昭和十年||

昭和十年を迎へた彼は數へ年の四十六歳になつたのである。一月號の湖畔の聲には賀川豊彦の國民道徳の危機とキリスト教・海老名彈正の國際精神の隆替・加藤一夫の日本人のキリスト・横山美智子の小説蒼穹の眸・沖野岩三郎の爐邊物語が掲載せられた。横山美智子の小説は本年一杯十二回で、沖野岩三郎の爐邊物語は日本の宗教史を物語風に書いたもので二箇年二十四回で完結の豫定である。



前年末九州へ講演旅行をした悦藏は、今年の一月一日にはもう東京赤坂の山王ホテルで愛児希夫・のぶ・たか、と共に雑煮の箸を取つてゐ、十六日に勤勞女學校で生徒に講話をなし、職員會議をしてゐたかと思ふと十六日の午後はまた東京にゐて主婦の友の石川武美を訪問してゐた。翌十八日には東京の建築事務所で感話をする、とすぐ小崎弘道・海老名彈正と共に再び石川武美を訪ね、翌朝は小林富次郎・森永太郎を訪問してゐる。これは小崎弘道・海老名彈正を周旋役として、ライオン齒磨の小林富次郎、主婦の友社の石川武美、キャラメルの森永太郎、花王石鹼の長瀬富郎、近江兄弟社の五つが基督教者の事業家として共同戦線を張らうといふ彼の計畫の相談だつたのである。當時の近江兄弟社の生命線は藥品部の事業であつて、メンソレータムの取次店は藥店三萬餘、化粧品雜貨店六萬餘で、十萬の取次店があり、昭和九年末まで、近江兄弟社が其の基督教慈善教化財團に寄附して來た金額は七十一萬圓を超過したのである。最初は一箇月二三十圓も賣れなかつたメンソレータムがこんなによく賣れるやうになつた原因は、基督教徒が熱心に宣傳してくれたからであるといふ事を彼は膽に銘じて忘れないのである。だから同じく事業をするのであるならば、主婦の友・ライオン齒磨・キャラメル・花王石鹼・メンソレータムの五社が合同して目覺しい大事業をやりたいと彼は考へてゐたのである。

彼の家は代代魚油商であつて薄荷・樟腦などの成分の含まれた家傳の藥を作つてゐた。彼が此のメ

ンソレータムをハイドから土産として貰つて來た時、油店の藥劑師はそれを見て、ぼんぼんこれは珍しい藥ぢやありませんよ、こんなものは賣れません。と、彼に言つたのである、當時まだ彼は兵庫でぼんぼんと呼ばれてゐたらしい。賣り出すと滋賀縣廳から用法の要領を届け出て賣藥の許可を得よと言はれ、その届出をした彼は小さい賣藥業者の一人となつてこれを賣つたのである。大正九年の世界日曜學校大會が取持つ縁で東京から佐藤安太郎が來て孫平治町で家賃二圓五十錢の茅屋に住むこととなり、お雛さまが物置小屋に入つたやうだと悦藏にからかはれながら、メンソレータム販賣に没頭し、メンソレータム・サトウなどと呼ばれる程熱心に働き、樺太から九州臺灣滿鮮まで旅行して販路を擴張した。彼は賣藥業者から顧みられなかつたメンソレータムを基督教會に應援を求めて全國的に其名を知らしめたのである。それに悦藏の商畧と諸川稔の熱心な運動、渡邊清春の滿洲進出、竹内録之助の朝鮮擴張などがあつて今日の盛大を致したのではあるが、基督教信者の活動に負ふ所が實に大であつた。蘆田準一・金田公享・長野源吉・竹内録之助といふやうな信者の活動は忘るべからざる功勞を残してゐる。利益の爲でなく近江基督教傳道團に同情して、メンソレータムを賣つてくれる人たちがあつたが爲に、此の盛大を來したのであるといふ事を忘れてはならない。誰彼一個人の力で此の盛大は得られない。神の恵みと多くの人の協力が今日あらしめたのだと悦藏は常に言つてゐたのである。



メンソレータムが何故かくも多く賣れるやうになつたかといふ原因の一は、當時の近江基督教傳道團に資本金がなかつたからだと或人は言つた。資本金がなかつたので熱心な愛用者の口から其の效能が説かれた。一人の老婆は臍くり金壹百圓を投げ出してメンソレータムを買つて訪問先で精しく效能を説明してこれを賣つたといふ話である。それが日本全國にメンソレータムの名を知らないものがないやうになり遂に五大事業家の一として活躍しようとする勢力になつたのである。

悦藏はそれが爲に臺灣まで、釜山からハルビンまで、はては遠くアメリカまで眞の東奔西走を續けた。彼は到る所の取引先から愛せられ親しまれた。彼は部下に對して殆ど小言を言はず細部は全部任せきりで、賣上高も利益いくらで締め切つてゐた。と言つて非常に細心な注意を拂つて、在庫品の分散をやかましく言つた。一箇所に置いて失火でもあつては全滅になるから品物は分散して置けとやかましく言つた。保険金で償へない帳簿の管理を嚴重にした。

彼の商畧には大膽極る所があつた。前の年大阪毎日新聞にメンソレータムの廣告を出さうといつて、廣告部長の清澤巖・廣告部次長大畑楯彦に面會した。當時の大阪毎日新聞一ペエジは三千十五行の廣告面であつた。悦藏はその十ペエジを買ひたいと申し出た。そして會談僅か十分間でそれを三萬圓で約束してしまつた。大阪毎日新聞の廣告部始まつて以來、十分間で三萬圓の廣告料を決定したのは吉田悦藏が最初だと言つて清澤巖は感嘆したものである。團扇何十萬、手拭何十萬、鉛筆何萬ダ

アスをメンソレータムの廣告用にした時、手拭や鉛筆とメンソレータムと何の關係あらんやといふ非難が内部にもあつたが彼はこれ押し切つたのである。

此のメンソレータムは日本産の薄荷と樟腦とを主成分としてアメリカのハイドが苦心の末精製したのを更に悦藏とメルルに呉れたのであるが、其のハイドは一月十日に八十七歳で永眠したといふ知らせがあつた。

この報告を東京で聞いた悦藏は、其の記念會をするため一月二十日朝東京大森教會での禮拜説教をすまして後直ちに八幡に歸り、二十六日には近江勤勞女學校で講話をした。近江勤勞女學校の名は此の日から消えて近江兄弟社女學校と改稱され、楡山嘉藏はその主事を辭して高橋虔が其の後任となつたのである。

一月二十九日から二月一日まで釘宮辰生を聘して四日間に十四回の講演をして社内修養會を行つた。

二月二日は近江兄弟社創立三十周年記念會を行ひ朝は社員と其の關係者三百二十四名、午後是一般公衆四百十六名、夜は二百七十九名が集つた。次いで二月四日から十日まで米原・木ノ本・今津・安土・愛知川・野田・仁保・八幡・水口・八日市・堅田の十一箇所で二十一回の記念傳道會を開いた。講師は蘆屋教會牧師長谷川敞であつた。



二月十一日の朝八幡驛員の爲に精神作興週間の講話をなし午後二時から第三回近江農村青年學校の開校式をあげた。生徒五十名教師六名で、本年から女子部を設け満喜子がその指導者となつた。講師は岡本利吉・濱田光雄・杉山元治郎等であつた。校長は悦藏、主事は西村關一である。

二月十三日の朝八時の列車で、きよの、諸川稔を伴れて臺灣行の旅に立つた。農村青年の事は西村關一・鎌田漢三・大原義雄に一任して置いた。十四日門司出帆十六日午後一時基隆上陸まで船中で大谷光瑞と宗教上の意見を交換した。十七日の朝夕二回臺北組合教會で説教をなし二十日の夜は臺中長老教會で、二十一日は日月潭の林間學校で、二十八日は臺北教會でそれぞれ講話をして諸所を見物し、三月五日に歸宅して直ぐ愛兒希夫の卒業式に臨席した。昨日生れたやうに思ふ希夫がもう中等學校を卒業したのである。

翌日きよの・希夫を伴れて京都に行き日野眞澄を訪問した歸途河原町三條の杉田大學堂書店に立寄つてシュウベルト傳を買つた。彼は此の書店の主人杉田長太郎とは十年以前からの知己で、京都へ來れば必ず此所を訪ね二人で田毎・晦庵のそば屋、暇の富久・四條のすし政に出かけて其の健啖を競つたものである。彼の書齋にある書物の大半は此の大學堂の手を経たもので、來るたびに一二冊づつ買つて行つた。多い時は一度に六百圓以上も買つたことがある。主人杉田長太郎は言ふ。吉田さんの書物を買ふ態度に三つありました。第一は今まで讀みたいと思つて買へなかつた書物、第二には今は必

要もないが將來讀みたくなるだらうと思ふ書物、第三は自分は讀みたくないが誰誰に上げたなら喜ぶだらうと思ふ書物。此の三種の買ひ方でした。大抵のお客さんは一度に何百圓といふ書物を買ひますと威張ります。知らず知らず買つてやるといふ態度になります。吉田さんにはそんな所がちつともありませんでした。買つて歸つて、その書物が自宅にあつたとか氣に入らなかつたとか言つて返しに來る人もあるが、吉田さんは決してそんな事をしませんでした。書物の裝釘といふことは出版者が一方ならぬ苦勞の結果出來るものですが案外世間の人はその苦勞に對して無感覺です。書物の函は裝釘保護のためで、古本でもあの函があるのとないのとで賣價が二割方がひます。その函も出版屋と畫家とが苦心を拂つたものです。けれどもお客さんの中には書物を買ふと其の場で中身だけ抜いて函を投げすてて行く人があります。そんなのを見ると腹が立ちます。ところが吉田さんは裝釘の美しい書物を見ますと、これは好い、これを買はう、これは客室の裝飾になるとおつしやつた。晩年には歴史物をお買ひになつて徳富蘇峰さんの國民史をみな集めて差上げました。吉田さんは書物を選択なさるに獨自の見解をもつておました。人がつまらんとお言ふものでも自分がよいと思ふものはさつさと買はれました。友人の秋田握月といふ俳人が畫帖をもつてゐて私に買へと言つたので安く買つて置いたのを吉田さんが賣つてくれと言つて持つて行きました。それは富田溪仙の描いたもので、その頃溪仙の名がまだあまり知られてゐなかつた頃でしたが、今は大したものです。



彼は音楽が好きであると共に繪も好きで、スケッチなど上手であつた。

彼の書齋に掛つてゐる油繪雪の小路は大正九年第二回文部省美術展覽會に出品せられた川合修二の作である。彼は展覽會でこれを見ると直ぐ百五拾圓で買つたのである。當時川合修二の名はあまり知られてゐなかつたが、彼は名を買はず繪を買つたのであつた。野口謙藏が帝展で特選となつた閑庭も、東光會に出品して絶讃を博した五月の風景も、みな彼の手で買はれた。ことに野口謙藏の描いた赤松と、雪・竹・ひよどりの小品を喜んでゐた。閑庭は近江療養院に五月の風景は自分の書齋に飾つてゐる。夢畑の遙か向ふにある百姓屋の庭に五月幟の立つてゐる遠景は眞に五月の風景を表現してゐる。野口謙藏は言つた。彼は繪の鑑賞に自信があつた。わしが善いと思つたら必ずよい繪ぢやと言つた、一種の美術觀をもつてゐた。つまり一家觀があつたのだ。尾澤眞二の水彩畫を買つた時どこがよいのかと訊くと、安いから買つたのだと言つたが、安いから買つたといふのは善惡を簡單に決定したといふ巧妙な言葉である。五百枚のスケッチを描けと勧めたがそれは出来なかつたらしい。

三月九日に近江兄弟社女學校で講話をなし十日の夜八幡教會で話して翌朝東京へ出發した。メレルを感化したモット博士に會ひに行つたのである。十一日のモット博士招待の午餐會で徳川家達公のどつしりした名哲な英語演説をきいて、將軍様の英語演説には全く恐れ入つた。と、彼は言つた。それ

につけても今の學生達の外國語研究は上迂りで昔の新渡戸稻造や内村鑑三等のやうな熱心さがない。と、彼は嘆いてゐる。

十七日には八幡教會の禮拜説教をなし、二十四日には東京兩國教會で講演をなし三十一日には八幡教會で世界の惱みを負ふものと題して朝の禮拜説教をした。

三月廿七日近江八幡の地にジョン・アール・モット博士を迎へ、さらに四月一日にはモット夫人が兄弟社見學に見へた。

四月五日に希夫の同志社入學が確定して一同安心した。此のまま大學卒業まで一本路を歩めばよいのである。その前日近江兄弟社女學校の入學式を行つた。本年の入學者は十五名であつた。

四月十三日は絶好の快晴であつた。午前十時から浪川岩次郎の司會で近江兄弟社關係者故人五十人の記念會を北の庄なる恒春園で執行した。そして午後は八幡商業學校で講演をなし、十四日の夜は大阪天満教會で天に寶を積む者と題して説教した。二十四日には長濱教會開設五十年の祝會があるの、彼は八幡教會を代表して祝辭を述べた。長濱教會と八幡教會とは種種の連鎖があつて兄弟教會なのである。

四月の末に夏向のメンソレータム團扇の註文は既に六十萬に達してゐた。

五月十三日の午後森永太郎の訪問を受け近江兄弟社の施設を精しく視せ其の夜講演會を開いて森



永太一郎の話聞いた。十五日の朝近江兄弟社女學校で講話をした後、悦藏はきよの同伴大阪に行き夜きよのと別れ十一時半の特急で下の關に行き十六日の朝梅光女學校で一場の講話をなし十八日の夕徳壽丸に乗り十九日の朝は京城組合教會の禮拜に列つてゐた。

二十二日の朝は奉天の坤光女學校で、二十三日の夜は新京青年會で、二十六日は大連組合教會で、二十九日には北平燕京大學で、三十日には公理會大會で、六月三日には再び燕京大學で、六月六日には再び大連組合教會で、そして六月九日の朝は門司合同教會で講演して十日の朝早く大村甚三郎・吉田金之介らに迎へられ京都に行けば、そこにはきよのと、のぶ・たかの三人が待つてゐた。

此度の彼の旅行は商川を兼ねた傳道旅行で合計十四回の講演をしたが、その中でも燕京大學の講演では英米人の教授達や中國人の教授達、男女學生に圍まれて滿洲問題の質問を雨の如くに浴せられ論破これ勗めた結果咽喉を痛めて聲が出なくなつた程であつた。

六月十五日の午後二時から最初メレルの建てた八幡基督教青年會館の再献堂式があつた。最初の献堂式は明治四十年二月十一日で、もうそれから滿二十七年四箇月を経過してゐる。新しく隣地を買ひ入れて解體改築したもので、悦藏とメレルが米と鹽だけを祈り求めた一室は舊形のまま残すことにしてある。献堂式は明治四十年に行つた通りの順序で執行して村田幸一郎の事業報告があり日野眞澄の講話があつた。そして其の司會は最初の献堂式に司會者であつた悦藏の一粒種ともいふべき長男希夫

が其の責に當つたのである。悦藏もきよのも眼に涙なくして祈る事は出来なかつたであらう。

六月十六日に八幡教會の禮拜説教をした後十八日の朝八時に八幡を出發して四國に渡り、坂出商業學校・丸龜教會・今治教會・松山教會・高知教會で六回の講演を終つたのは二十四日の午前であつた。歸るとすぐ近江兄弟社女學校で講話の上職員會議を開いたのであつた。

七月一日近江兄弟社から彼が湖畔の聲誌上に掲げた卷頭言を宛めて湖畔日月と題して出版した。

七月一杯は東京・京都・大阪・神戸の間を往復して多忙の中にも八幡教會で三回の説教を受持ち八月六日横濱發の清澄丸で渡米の途に上つた。同行者はメレルと佐藤安太郎とであつた。旅行豫定は四箇月で十一月三十日に龍田丸で神戸港に歸着するといふ段取りであつた。旅行の目的は三人三様であつた。メレルは商用と同時に米國各地の文化團體に日本の美點を説明する爲で、悪い點は世界共通だが日本の美徳は米國人にはつきり知らせる必要があるといふのである。佐藤安太郎は米國の實業界視察と生前會ひたいと言つてゐたが一年前この世を去つたメンソレータム創製者ハイドの墳土未だ乾かざる墓參の爲であり、悦藏はノースフィールドで開かれる世界基督教宣敎大會出席の日本代表として日本の現状と日支問題を世界各國の出席者に説明する爲であつた。

八月二日午後八時四分發の列車で一行は八幡驛を出發した。メレル・悦藏・佐藤安太郎の三人が遠き海外に行くのである。社員百九十餘名がブラットホームに整列して送別の讚美歌を歌つた時三人は



眼に涙を浮べてうなだれてゐたが、汽車の動き出した時佐藤安太郎ははらはらと涙をこぼしながら合掌してゐた。一行は一旦輕井澤に行つて五日まで滞在して六日の午後横濱から乗船するので、悦藏は希夫ときよのとを伴れて行つた。

八月六日三人はパナマ經由の國際汽船清澄丸に乗り込んだ。船中では湖畔の聲に掲載中のマルコ傳講解の原稿を書き續けたが十一日の夕の日曜禮拜を頼まれ法華經とバイブルの話をした。十七日に彼はきよの宛に手紙を書いた。

日本沿岸は荒く三四日間佐藤氏は苦行しましたが、あとは天氣もよくなり今では普通です。一週間近く濃霧の中ばかりで夜はサイレンを鳴らしつつ進みましたが、幸に浪も静かで明後日はサンビドロにつきます。

あとの南太平洋パナマ行は静かださうです。パナマ運河は初めてで興味深く通るでせう。バルボア(西側)クリストバル(東側)に一寸止つてすぐ紐育直行です。九月二日に着くのです。

世界大會は大責任ですが今準備勉強中です。八月廿六七日頃まで無線がききます。家では皆丈夫だし賑かだし心配して居りません。十一月末必ず丈夫でかへりますから一月にはどこかへ出かける事にしませう。

今度の旅行の大切な用事は皆私の肩にかかつたやうな氣がします。祈りつつ助けて下さい。途中

暑いだらうと思ひましたが今までは涼しくて結構でした。パナマは赤道に近く相當汗でせう。静かな航海です。此の間の日曜は夕方私の説教で大勢来てくれました。

われわれの人生はこれからです。あと三四年しつかり生きて湖國の爲に働くんです。身體だけは大事にしませう。そちらも無病息災の身體となつてゐるので私は大安心してます。

今度の旅行は靜に書物を読むだけです。此の手紙がつけばあとは七十五日ぐらゐで私は歸るので。次の手紙は多分紐育からですから、九月末につくでせう。何しろ無線がまだ十二三日ききますから時時いろいろ電報を打ちます。

十一月の十二日にはサンフランシスコから龍田丸に乗り込みます。旅行中大した不自由はないが一人者になつたやうで變です。今度はサナトリウムの研究、博物館の見物をしつかりやります。十分氣をつけて丈夫で暮して下さい。

八月十九日の午後三時サンビドロ港に入り上陸して市内見物後夜半船に歸つたが、二十六日の午後船が南太平洋ニカラガ國の沖合を通つてゐる時日本から無線電信を受けて驚いた。それは滋賀縣で農村傳道に盡力してゐた牧師矢部喜好の永眠の知らせだつたからであつた。矢部喜好は福島縣出身で中學生時代に熱狂的な信仰をもつて個人傳道を試み、後に渡米して二つの大學を卒業後大津の膳所で傳



道してゐたのであつた。

八月二十八日にパナマ運河を通過する時、その東岸のクリストバルに上陸して青年會館に立寄り二時間の後そこを出帆し九月二日にきよの宛の手紙を書いた。

いよいよ明朝九時頃紐育上陸です。今日は船中で散髪です。洗濯物や書物を荷物に詰めて返します。佐藤氏のカバンの中にも本など詰めて返します。清澄丸は多分十一月二十六日頃神戸に歸ります。あと八十七日で横濱につきます。三人共身體は丈夫なものです。

船中の讀書は愉快でした。私も毎年一月ぐらゐは讀書生活をしたいものです。

聖書の譯もすみまして萬歳です。あと三箇月みな健在でゐてほしいです。希夫によく讀書の習慣をつけるやうにして下さい。

船が着くなり第一に手紙を出します。

船は九月三日朝四時に紐育に着きプリンス・ジョウジホテルに入つた。紐育の町には東京亭といふ料亭があつて、すし・うどんを作つて此の健啖家を待つてゐる。

九月十五日まで紐育にゐて、十六日の朝ワシントンに向ひ、十八日に紐育に歸つた彼は二十二日の夜日本人教會で説教をなし二十七日の夕方六時にノウスフィールドに着いて世界基督教宣道大會から割りあてられたホテルに行くと日本代表者の海老澤亮が二階で待つてゐた。

翌日悦藏は大會の財務委員・決議委員を頼まれて早速會議に忙殺された。翌二十九日に彼は日本を代表して所信を述べ、ほつと一安心、早速郷里の愛女のぶに宛て今朝日本代表の演説をしたことを知らせた。その夜はドイツ人のユダヤ人に對する態度について各國人の議論百出した。

九月三十日に彼は日本に於ける神の國運動の現況を報告した上、昭和十四年の大會を日本で開く事を提唱した。それは世界各國の宗教家に日本の現状を知らせたいからであつた。

翌日は十月一日である。相變らず朝も晩も議論づくめでパリ會議に出席した西園寺公望の心情に同情を表した。

十月二日には東洋會議があつた。十月四日の朝床を離れた時、今日は希夫が満十八歳になつた日だと思ふと急に故郷にゐる妻子が戀しくなつて、ひとり東方にむかつて祈つた。

此の日の夜の會議で次の大會の場所に關する議題について討論があつた。英國のリットン卿が滿洲調査に行つたやうに、見ない前から結論をもつてゐるやうな見かたでなく、みんな虚心坦懐で日本を見日本人に直接聞くがよいと思つた悦藏は忠告的に熱心に日本説を唱へたが、ちやうどイタリイとエチオピアが戰爭を始めてゐるので、昭和十四年頃は東洋に變動があると考へなければならぬといふので日本説は否定され英領九龍と決定されたのであつた。

此の會議に列して十日間、彼は教授・牧師・實業家たちと東洋について随分議論もし意見の交換も



して、来てよかつたと思ひながら十月五日午前九時の汽車で紐育へ歸り、六日の日曜には日本人教會で朝夕二回の講話をした。

十月八日の夜はニュウジヤアシイのヌワアクで最後の基督教大會があるのでそこへ行つて、理想的社會と題して大演説を試みた。恐らくこれが自分の一世一代の檜舞臺だと思ひながら滿身の力を此の演説に注いだ。そして、その夜汽車に乗つてバツファロウ市に行きメンソレータム會社の重役會議に臨み三日間の會議を終るとメレルと佐藤安太郎は十一日の朝二人づれでシカゴの方へ出發した。彼は翌日ただ一人でサラナク湖畔の結核療養所の設備見學のためバツファロウを出發して正午すぎシラキユウス市に着いて近くの建築を見學したり買物をしたりしてホテルに入り、十三日には町の教會で禮拜を守り支那料理屋を見つけてそこで食事をしてアメリカの一友人の家庭に迎へられたが夕方から腹痛を感じ初め翌朝は悪寒でがたがた震ひが出た。けれども何かの食あたりだらうぐらゐに思つて氣にも留めなかつたが、どうしても腹の痛みがとまらないので、十五日の午後病院へ電話をかけることや二人の醫者が來診してくれ、盲腸炎だと診斷されすぐ入院せよと申し渡されたので病院自動車を呼んでもらつて病院に行き、地下室から二〇九號室に通され手術の準備に腹部の毛を剃られて暗然とした。それから手術室につれて行かれたが、またもやがたがた震ひが起つて齒の根が合はないので醫者も手のつけやうがなく手術を中止して病室につれ歸り兩脚に慘酷なほど食鹽水の注射をせられたので

足がむくむく腫れ上つた。それでも其の夜はうつらうつらと眠られた。

十月十六日の朝になると熱も下つてゐた。看護婦の持つて來てくれた蜜柑水を腹一杯飲んで午後二時いよいよ手術臺に上つて麻酔薬を嗅がされる事になつた。その時彼の眼の前に顎髯の黒く生えた老紳士の幻が見えた。それはエチンバラア大學の外科部長シンブソン博士の幻であつた。シンブソン博士とは明治四十年の萬國基督教青年大會が神田美土代町の青年會館で開かれた時親しく會つて話した事があつたのである。博士の叔父シンブソンが此のコロホルムを發明したのだと思つてゐるうちに醫者が彼にコロホルムを嗅がせた。三つか四つ呼吸をしたと思ふと、もう意識が朦朧となつた。

五時半に氣づいてみると横つ腹に大きな穴をあけられたまま生きてゐた。看護婦に訊くと普通の盲腸炎手術のやうに縫ひ合せてなく、三寸ばかり口を開けたままであるといふ。

十月十七日の朝は體溫が高いらしかつたが、それよりも開けつ放しのきず口から藥液を入れられるのが苦しかつた。三日目の十八日には流動物をくれ、十九日にはいろいろの食物をくれたが、二十日の夜から靜脈注射を始められた時は、どうなるのかと思つた。それも其の筈、彼はこの時世にも恐ろしいガスイソの症狀にあつて、右足切斷か、死か、發狂かといふ危険状態にあつたのである。主治醫サットン博士も非常に心配して、當時米國と獨逸國とが協力研究中であつたヅルフオン・アミドの注射をしようと思つたが生憎その注射液が大學病院に無い。そこで紐育へ電話をかけて飛行機で持つて



來てもらひ、夜の二時に到着すると直ぐそれを朝まで二回注射して、それから毎日數回づつ續けて注射したので、やつと生命を取りとめたのであつた。

その注射が二日續いて三日目の二十二日から熱も下り不思議な幻を見なくなつたので、壁に家内中揃つて撮つた寫眞を貼つてもらひ、それを見ながら、日記帳に旅に病むは悲し。と、書きつけた。

入院した時すぐに近江八幡へ電報を打ちたかつたが、そんな餘裕がなかつたので、二十五日になつて始めて、きよの宛に手紙を書いた。

手術後十一日目で今日は朝からゴムチュウブが抜いてあるのが氣持よろし。もうそろそろ本格的によくなつてもよい時分である。明日はフェルプスさんが見舞ひに来てくれると電報があつたので楽しんで待つてゐる。あと十日ぐらゐで退院が出来ればよいがね。食事はうまくない。こんな時は日本食を欲しいと思ふ。

十月も末で樹樹は皆裸になつた。晴れた天氣は少い。今朝四時に聖書を味讀してうれしかつた。こんな手紙でも時々出すと様子がわかつてよいだらう。退院したら買物だ。

京都の二人は元氣だらうな。希夫の通學も少可愛さうだがよい修業には違ひない。本人大いに發奮すべしだ。

大會で知り合つた友達が訪ねてくれるので氣が紛れるが入院十七日目から湖畔の聲の原稿を書き始めて何となく氣樂に感じた。

十一月二日にモット博士から菊の花を贈つてくれた。海を越えた外國で菊の花をもらつた事は實にうれしかつた。彼はその菊花を前にして希夫宛の手紙の表書を書いた。二十八日に書いて其のままにしてあつたのである。

入院十五日目である。ベッドの上にテーブルを置き字が書けるやうになつた。まだ傷口は一寸五分ほど開いてゐるが、そろそろ蓋が出来るらしい。あとで聞けば丁度高木五郎君みたいに急に死ぬやうな重病であつたさうな。えらい事だつたが九死に一生を得た。醫者は上手だし、先づ心配はない。多分淺間丸横濱十二月十三日着でかへります。佐藤さんは一足先だが仕方ありません。迎へに来て下さい。入院料や何か眼玉の飛び出すほどだがまあ何とかなるでせう。手足に水ぶくれが出来て痒くて仕方がない。二三日苦しんだがそろそろ片づいて來た。傷口のゴムチュウブも昨日來取れたが又新しく入れるかも知れない。氣味のわるいチュウブで閉口、あと十日位で何とか退院させて貰ひたいと祈つて居る。

内炭君にアメリカ旅行記は忙しかつたり入院したりして筆をとれなかつたが、二三日の内にぼつぼつ書くと傳へて下さい。



湖畔の声十月號いろいろの雑誌十月號が丁度着いたところで喜んでゐる。

八幡でこれと同じ病氣をやつて大阪醫大に行く途中手おくれになるよりは仕合せだつたと思ふ。物は考へやうだ感謝してゐる。看護婦は一日六弗で二人が晝夜交替だから十二弗、食料三弗、入院料が十二弗、一日二十七弗、ちよつと日本金百圓のわりだ。徹底的に親切だし知人が見舞に来てくれるので淋しくはない。ただ毎日英語ばかりでいやになつてしまふ。

お晝はピフテキを頼んだ。やはり八幡の肉がうまい。二三貫やせたと思ふ。丁度よろしい。メレルさんと佐藤さんは私のトランクをカリフォルニアに持つて行つてしまつたと思ふ。着のみ着のままで閉口。

大病のあと三四箇月静養せよとのこと。荷物は一切持たぬしまあ大名旅行のつもりで赤帽をふんだんに頼む。

子供らはみな丈夫だらうね。こちらは一生一度の大厄を逃れたやうで萬歳である。前の手紙が遺言にならずよかつたね。

柿の時分だね、湖畔の秋を逃がして残念残念。

食堂の壁は塗りなほすか一工風してもつと朗かにしたいね。隈元、前田と相談されるとよくしてくれるがね。原仙君に頼んでもよろしい。

達者で暮して下さい。

此の手紙を希夫に送つた日、湖畔の声にも原稿を送つて其の末尾に、心は七千哩太平洋の西琵琶湖畔に走つてゐる。毎日ピフテキ・チキン・トマト・ソース・オレンジ・林檎で弱つてゐる。浅草のり・鯛の茶漬・玉露・蛤汁・わさび・鮭のさしみ・茄子の朝漬・べつたら・大根・そんなものが食ひたくて仕様がなない。旅はやはりつらいものだ、よくよく悟つてゐる次第である。と、書き添へたのでつた。

手術後二十二日目の十一月六日に始めて椅子にかけることを許されたが、朝早く傳ひ歩きをして醫師に、まだまだ。と注意された。主治醫サットン (Sutton) は六年間支那の四川省にゐたことがあるので、東洋についての理解があつて話が面白かつた。

十一月九日に始めて車に載せられて病院三階の廊下を散歩して窓外の景色を眺めた。毎日見舞客があり花の贈りものはあるが、早く自由に歩きたいと思ふ。

十一月十一日はロスアンゼルスから龍田丸の出る日である。その船には佐藤安太郎が乗つた筈であると思ふと、急に日本が戀しくなる。

十一月十二日は入院二十九日目である。その日サットン博士から傷口をふさいでもらひ退院近しと



宣告せられ、ほつと安心はしたものの、まだ四日や五日で退院出来さうには思はれなかつた。

希夫君、バサデナ宛の手紙を病院で受取つた。丁度希夫があの手紙を書いてゐる時分に父は死生の境にあつた。夢でも見たかね。今サットン博士が来て横腹のきず大丈夫なほつたと見たか、はじめてきず口をひつつけてしまつた。あと二日で大體ひつつく。それからいよいよ退院である。それから静養して歸る。とうとう一箇月おくれるが仕方ない。

十二月三十日だ、横濱に来てはどうか。それからスキイに行くかね。今年は暫く一切手荷物は持てぬさうだ。腹の臓物が重い荷物でうんと力を入れると飛び出すかも知れんといふわけだ。

諸川君に来てもらひたいと言うて下さい。希夫の字が面白く固まつて来たね。希夫式特長があるよ。

一學期の成績が見たいね。

希夫、休暇中に徳富蘇峰の日本國民史織豊時代卷の一から読んで見んかね。こいつは直木より面白いよ。三階の本棚にある。それから日本外史を讀んだね。トルストイも一應英語で讀んだね。アンナ・カレンナなんか今でもハイカラな讀物だよ。先づトルストイの *Sebastopol* から讀んで御らん。肉弾より面白いよ。

暇つぶしにアメリカの探偵小説をよんでる。一箇月の入院は全く入牢生活だつた。しかし生命はた

しかだ。身體は大丈夫だ。あと十日で靴をはいてアメリカの街の灯でも見に行くさ。  
晝めしでやめる。

頭の毛の長くなつた瘡せた二十貫のババ

十一月十五日の朝看護婦がポストスタンダード紙を持つて来た。見ると椅子にもたれた彼の寫眞が大きく出てゐて、その上に大字で、

Japanese Christian Industrialist

Is Patient in Syracuse Hospital

と云ふ標題が出てゐる。寫眞の下には、

Etsuzo Yoshida, eminent Japanese Christian leader and industrialist, pictured in his room at University hospital where he is recuperating from a major operation. Mr. Yoshida is a co-founder of the famous social experiment, "The Omi Brotherhood" in Japan.

と書き、更に Omi Brotherhood Founder Tells of His Plan. と云ふ見出しで百八十行の彼の談話を掲載してあつた。二十八日間病床にある彼は微笑をもつて記者を迎へて愉快に語つたと書いてある。彼は此の新聞記事を繰返して讀んでゐる所へ近江兄弟社から、其の後經過如何一同案じ居る。と、電



報が入つた。で、すぐ來週退院大丈夫。と、返電した。

十一月十七日にサットン主治醫からあと一週間でいよいよ退院と言はれて安心しながら其の一日を靜に送つた。此の日は日曜であつたから、訪問してくれたバアナド夫人と共に祈つた。

十一月二十三日、手術後三十九日目の朝十時にメレルが入つて來た。メレルは悦藏の手術の経過を心配して、病院に留まらうと言つたが、悦藏は初めて渡米された佐藤安太郎のために是非一緒に同行して案内してあげて欲しいと強く言ひ張つたので、メレルはそのため今日まで旅行してゐたのであつた。何から話してよいやら、めちやめちやに話すこと十二時間、夜十時すぎにメレルはホテルに歸つたが翌朝早くもう病室の戸を敲いた。そして午後二時二人は病院を出てオランダカホテルに入つた。手術後四十日間、異郷の空でたつたひとりの病院生活は随分退痛でもあり寂しくもあつたが、もうそれらの一切を忘れてメレルと二人面白く話してゐる。彼は十一月二十四日の日記に、午後二時退院—とだけ書きつけたのであつた。

十二月三日までシラキユウスで静養して、四日の午後四時バツファロウに行き、七日に出發してシカゴ・オグデンから塩湖を経て加州のオークランドに出て新しく架つた鐵線橋を見、桑港に碇泊してゐる大洋丸に直行した。

十二月十三日正午大洋丸は碇を上げた。見送りに來てくれたメレルとそこで訣れた時、胸一杯であ

つた。

十二月十九日の朝大洋丸はホノルルに着いた。日布時事の相賀安太郎夫妻、田村牧師らが出迎へてくれ午後五時まで終日大學や教會を見物し到る所でアイスクリームを食べた。日本では外套に首巻に手袋といふ時に。

十二月二十五日には食堂でクリスマス話をした。日本には彼の出した數通の手紙が着いてゐる頃である。

希夫君、アメリカのラジオは凄いいよ。今日もブルガリアのチェンバア・オーケストラがあつた。シンフォニーだつて三つもある。歐米の連絡もよくて伊太利のマルコニの聲なんかよく聞けた。勿論エチオピアの王様の聲もはつきり聞える。

希夫のバリトンはどんなものかね。また試験で閉口してる時分だね。朝の暗い中から學校行はえらからう。まあ豆腐屋や新聞配達をしてゐると思ふんだね。メレル君が自動車屋の小僧や新聞配達をしたのを思ふんだね。でも夜は早く寝て病氣しないやうに頼む。

パパは病院で九時に寝て六時に起きる。今日で三十五日、まだ入院だ。あと五六日、もう手紙が來ないと思ふと淋しい。



外国旅行では全く病氣なんかするのは氣のきかぬこと馬鹿らしいこと夥しい次第だ。  
おかあちゃんに十二月は特に用心してあまり働きすぎぬやう風邪をひかぬやう。横濱に来る時は元氣で来るやうくれぐれも希夫から注意頼む。

パパは十九貫臺になつた。身が軽くて氣持がよい。けれども暫く自轉車に乗れんと思ふ。考へてみるとよくも退屈な三十五日をベッドの上に暮したものだと思ふ。もう少し心配はない。十二月三十日待つばかりだ。

十一月十八日

十一月廿一日

まだ病院に居て今一人で夕食をすました所です。今日漸くうみが出なくなつたらしい。傷口を万そう膏でくつつけてある。明日またはがすかも知れんけれど、まづ一段落です。今日から看護婦をお晝だけ八時間來てもらふことにしました。そろそろ自分で自分のことをするのです。高い寢臺から起き出ること廊下を散歩することも大丈夫になりました。一日一日と力がつく様子でうれしい。何しろ三十七日異國で病院入りはたしかにこたへました。

あと二日でメレルがやつて来る。二十五六日頃には二人でホテルに三四日引越し十二月一日にはバ

ツフアロウへ行きたいと思つてゐます。昨夜いろいろと自分の身體をインチ尺で計つて見ました。やせたものです。

首 十五吋 $\frac{1}{4}$

上太股 十八吋

足たぶら 十四吋

目 方 百六十五ポンド

但し非常に若返つて三十八九歳にしか見えないと皆が言ひます。いろいろの人が見舞に來てくれる。土産は皆ここで買ひます。今晚はこれでやめます。大急ぎで投函させます。

きよのどの

とうとう十二月十日ロス發の大洋丸にきめる。少少遅れるが船に乗つて保養しながらゆるゆるとかへる。そしてハワイで一日横濱には十二月三十日につく。これだけの大病が一月おくれで歸れたら有りがたいものです。もう一べんバツファロウに行つていろいろ相談したり念を押して來る。二三日ここで休養して足を馴らしてから街へ買物に出るつもり。

これからお晝でまたピフステエキにあきる。お茶がまづい。早く番茶が飲みたいなあ。



十二月十四日 きよのどの

三〇八

近江八幡の家ではこんな手紙を読みながら家内中が十二月三十日を一日千秋の思ひで待つてゐた。そして留守中の一家を擧げて横濱の岸壁に彼を迎へに行つたのであつた。

此の年五月十五日に彼の作詞米山輝男の作曲になる歌集、湖畔に歌へる。限定版二百部を印刷出版した。菊倍版七十ペエジで、内容は、近江兄弟社の歌・近江八幡の四季・近江八幡YMCAの歌・キヤンプの蚤・朝鮮人街道の歌・八幡小唄・朝の歌・雛祭り・斷髪の歌・山また山・大根漬の歌・近江家政塾の歌・近江勤勞女學校校歌・修學旅行の前夜・近江療養院の歌・神にかへれの十六篇である。

## III、創 の 家 Ⅱ昭和十一年Ⅱ

昭和十一年、悦藏は、きよの・希夫・のぶ・たか、の四人と共に東京赤坂の山王ホテルで楽しい四十七歳の新年を迎へ、四日の午後五箇月目で近江八幡の土を踏んだのである。

昨年十月十五日の午後シラキユウス市のホテルで二人の醫者から、君は大變な盲腸炎をやつてゐる。今すぐ手術しないと手おくれになる。生きたいならすぐ入院の決心をしなさい。と、言はれ、シラキユウス大學病院の二百九號室に運ばれ早速手術室へつれて行かれた時、湖畔の声主筆吉田悦藏氏

十月紐育州シラキユウス市大學病院にて客死せらる。哀悼に堪へず。と、いふ新聞記事と自分の黒框の寫眞とが眼に見えて來、どこかで、とうとう四十六歳で吉田も死んだか。と、いふ聲が聞え、妻や子供が泣いてゐる聲が聞えて來たといふ彼も今は元氣さうに見える。しかし、彼の病氣はまだ靜養必要期にある。だから歸宅後靜に來客に接してゐたが、八日に大阪醫科大學に行つて診察してもらふとまだ九センチの細い穴があるから、もつと養生しなければならぬと申し渡されたので、二十四日の午後三時にメルルが横濱に着くのだときいても出迎へに行くことも出來なかつた。そして此の日家にとちこもつて、矢部先生との交り。と、題する一文を書いた。十四年前の大正二年の夏キャンザス市の大會で無慮四千人の各國人の中に起つて、私を日本に歸らしめ生命を投げ捨てて働くことの出来るやうに天佑を與へ給はんことを伏して願ひ奉る。と、東北辯を英語發音法で矯正した特徴のある日本語で聲高らかに祈つた矢部喜好の聲を直接聞いた彼には、哀悼の念が一入深かつたのである。

一月二十七日にメルルは八幡町に歸つて來た。同じ日の同じ時に八幡驛を離れた三人は十一月廿八日に佐藤安太郎、十二月三十日に悦藏、一月二十四日にメルルと、三人三様に横濱へ着いたのである。生れし日を異にするも死する日を同じうせんと堅く約束した玄徳・關羽・張飛の三人が其の終の日を同じくしなかつたやうに、三人は別別に歸つて來たのである。

一月二十八日に手術した傷口の下にヘルニアの疑を自ら發見して少しく心配したが、翌二十九日傷



口が全く塞がったので安心した。此の日教育會館に据ゑつけるためメレルの持つて來たハモンドオルガンをメレルの宅で試聴した。くはしく言へばハモンド・エレクトリック・パイプオルガンといふのである。昔のバイプオルガンは大きな金屬や木製の煙筒のやうなものが何十本も何百本もあつて、オルガンの裏側で寺男即セツキストンが汗みどろになつて鞆たばこで風を送つたものであるが、後には電氣力で風を起す仕掛にした、とても高價なものであつた。御三家の一である紀伊五十五萬五千石の城主徳川頼宣の遠孫侯爵徳川頼貞が外國から買つて來た日本一のバイプオルガンの音樂堂はヴォーリズ建築事務所が設計して建てたものである。だから徳川頼貞は何度も近江兄弟社へ來たことがある。近江療養院が新築せられた後ゲストブックへ第一に墨黒黒と署名したのは此の紀伊の殿様だつたのである。ところが今日試聴會をしたハモンドオルガンはメレルが荷造もせず其のまま龍田丸に積み込んで、太平洋の西の岸から東の岸まで毎日浪間に其の美しい音を響かせながら持つて來たもので、裏側で鞆たばこを踏ませられる心配もなく大きな室の設備もいらず、最も輕便でしかも素敵な妙音が出る。これからメレルがサン・サアン、アンリ・ダリエになつて二階の片隅でこれを弾くのである。近江八幡でもバイプオルガンが聞かれるやうになつたとの噂が廣まるであらうと、彼は微笑した。果して數日の後京都から此のバイプオルガンを見に來た博士夫妻があつた。

二月一日の朝九時から近江兄弟社創立滿三十一年の例會を開いて、メレルと悅藏の米國旅行の報告があつた。

二月二日の日曜禮拜後の總會で、教會堂建築案の提議があり、高橋卯三郎引退の申出があつた。此の日教會堂建築費募集の報告をした結果、七日の金曜日には早くも二萬二千圓に達した。翌八日に近江療養院に來られた博士清野博に診てもらふと、盲腸炎手術のあとは全快してゐると言はれた。それでも九日の晩に教會で話し、十日の月曜會でアメリカの話をしたり、十一日の午後農村青年學會で農村と理想社會について語ると、三日續けての講演に疲勞を覺えた。傷口は癒えても全體が精神的に肉體的に疲れてゐるのだと思つた。

二月十六日に教會へ行くと禮拜後の報告によると教會堂建築寄附金は二萬七千六百四十二圓に達してゐた。十九日には近江兄弟社女學校と農村青年學校で講演したが左程疲勞も感ぜず翌日の閉校式にも出席した。

二月二十六日の日記に、帝都騒ぐ・流言甚し。と、書きつけた。二・二六事件の真相はまだ八幡町へは傳はらないのである。

三月になつて一つの面白からざる事件が彼の心を痛ましめた。それは三年前の昭和九年に町の中央部にある縣立高等女學校敷地一千四百坪と其の校舍七百坪を近江兄弟社に賣り渡すとの契約が町長との間に成立し、そこに近江兄弟社本部と近江兄弟社女學校とを建てる計畫で、もう手附金まで出して



あつたのが、町内の中心で基督風を吹かせるなといふ反抗運動が起つて、遂に賣買契約は解消せざるを得なくなつた事であつた。これが爲に彼は随分鬱心したのであつた。けれども一方に於いて教會堂新築献金がどしどし集り、三月八日の禮拜後の報告によると、その献金額三萬一千六百圓に達してゐるといふ形勢に幾分愁眉を開くことが出来た。

三月二十二日に、彼が招聘の勞をとつた高橋卯三郎牧師の古稀感謝會を開いて堀貞一の講話があり高橋卯三郎の七十年を回顧してといふ感話があつた。此の頃悦藏と一燈園の西田天香とは稍深き交際が續けられはじめた。

四月になると彼の精神も肉體も元氣を恢復し、五日には教會で朝夕二回の説教をなし六月には近江兄弟社女學校の始業式で講演をしたが平氣であつた。近江兄弟社女學校の生徒は新入生と共に四十五人となり、満喜子の直接指導をしてゐる清友園幼稚園には新入園児三十五名、米原幼稚園には十三名堅田幼稚園には三十名、今津幼稚園には十九名、八日市託児所には十三名の新入園児があつた。その他八幡英語學校には在籍生五十名、堅田の江西義塾には廿名の在籍生があり、八幡町には新に近江家政塾を建築する事になつた。

四月八日の夜希夫と共に上京したが、十一日に歸宅した。其の翌日は終日寢臺に入つて寝る程疲れた。まだ以前のやうに本當の健康は取戻してゐないのであつた。

四月十六日に播州大市中村西脇に行つて、彼の宗家浦部左仲の子孫高田閑進事は川五兵衛の再建した専光寺を見た。そこで彼は始めて其の祖先浦部左仲が武士であると共に大工であつた事を知り、其の本堂が皇紀千八百八十六年の嘉祿二年に建立せられたのだといふ事を知つた。それから過去帳を見ると、安政六年に吉田屋金助といふ一族があり、油屋吉兵衛といふ名もあつて何となくなつてしまつた。自分の祖父は吉田金介であり叔父は吉田金之介である。しかも代代の油屋で今自分は油に幾分か縁のあるメンソレータムに大きな關係を有してゐるのである。祖先は浄土真宗の一箇寺を建立したが今の自分は近江八幡に日本一の基督教會堂を建てようとしてゐるのであるなどと考へた。

それから二十一日に、きよのと大阪で落合ひ錦丸で別府に向ひ翌二十一日小雨の降る中を別府龜の井ホテルに入り、翌二十二日は山下彬麿の案内で宇佐八幡宮に参拜した。

四月二十四日、二十五日の兩日、別府醫師會と文化協會で講演をして、二十六日朝八時出發、熊本・三角・天草・島原・雲仙・長崎・浦上を見て五月三日に八幡教會創立三十五年の記念禮拜に出席するまで二週間の旅行を試みたが體力は十分その行程に堪へ得て餘りのあるを知つて感謝した。

五月四日に八幡町の中央本町四丁目の京街道筋に一軒の家を借り湖畔堂と名けた。これは彼が豫てから近江兄弟社は外國貿易や建築設計などをしてゐるので八幡町に本社を有ちながら八幡町民と殆ど何の關係もなき生活をしてゐるので、新に小賣部を設け八幡町民に入り交つて産業生活をする爲、近



江兄弟社雜貨小賣部を設けて寫真器・書籍・輸入雜貨の小賣をしようといふ彼の提案が容れられたからである。彼は此の家を六千二百圓で買ひ入れる計畫を立ててゐたらしいが、それは實行出来なかつた。

五月十一日、邸内に新築中の近江家政塾の棟上げをした。十三日に上京して家庭學校に牧野虎次を訪ねた。三十二年前の九月二十六日に八幡教會で洗禮を授けてもらつた靈性の恩師である。

五月十四日の夕方陸軍中將中島今朝吾の招待によつて借行社に行つた。中島今朝吾は山下彬麿と同郷人である關係から山下彬麿が彼を紹介したのである。山下彬麿と彼とは一燈園の關係等で知つたのであるが、此の日の會合が後に中島・吉田・山下・牧野の深い關係を生ずる起原となつたのである。

五月二十日の朝山下彬麿が来て京阪メンタムに就いて訴訟を起すべき話をした。メンソレータムが非常な勢で賣れるに従ひ、諸所に類似品が賣り出された。その類似の名は、メンタムといふのが多くアルボースメンタム・備中メンタム・ピフメンタム・美化メンタム・大學堂メンタム・延壽堂メンタム・福井メンタム・五分間メンタム・阪急共榮メンタム・日の丸メンタム・日の本メンタム・長谷川メンタム・ハルミメンタム・醫博メンタム・貫誠堂メンタム・ケンイチメンタム・觀音メンタム・ケイハンシンメンタム・スキンメンタム・カルメンタム・家庭メンタム・キクメンタム・きぬやメンタム・キングスメンタム・キングテングメンタム・國勢メンタム・カチタニメンタム・キクアカダマメ

ンタム・共調メンタム・クマノモトメンタム・(近)メンタム・マルイチメンタム・マルナカメンタム・マツマルメンタム・ミルワメンタム・モトネメンタム・ミクニメンタム・マルハチメンタム・奈良櫻メンタム・オーザメンタム・リニメンタム・昭和メンタム・セイフメンタム・西海メンタム・サイゴウメンタム・三光メンタム・シマヤメンタム・シガメンタム・至誠堂メンタム・司止メンタム・スキンメンタム・スターメンタム・ステキメンタム・スツヤメンタム・清光メンタム・ツボイメンタム・ダイシメンタム・月メンタム・テールメンタム・東洋メンタム・ワキメンタム・藥局メンタム・ヨカメンタム・雪の元メンタム・全國メンタム等六十五種が數へられた。

メンタム以外の類似名は、アメリカタム・メンソレー・メンソリー・メンソリ・メンタール・メンサリ・メンサル・メンター・メンターム・メンソリー・メンソリム・メンスリン・メンスタム・メントレータム・メソータム・オミソレータムの十五種が數へられ、此の外外包・罐・外函など殆どメンソレータムと見分けのつかない類似品全體百二十八種を山下彬麿は調べ上げたのである。その製造地は三府十七縣にわたり、最も多く製造所を有するのは奈良縣の四十四箇所で、大阪の二十一箇所、東京二十箇所、滋賀縣の十七箇所がこれに次いでゐる。殊に奈良縣の賣藥業者中何何メンタムと稱するものを製造してゐる藥店十一戸は其の資本金十萬圓以上壹百萬圓を有して、一箇年のメンタム賣上金は約六百萬圓と辯護士は算定した。



メンソレータムの類似品がこれだけ多く出来たといふ事は、とりもなほさずメンソレータムの效能を裏書するもので、美化メンタムとか五分間メンタムとかいふのは、これを用ふれば顔が美しくなり五分間で效能が現れるといふのであり、日の丸メンタム・日の本メンタル・國産メンソール・國産メンソルといふのは、メンソレータムは舶來品であるが、これは國産であるといふ意味を表現したもので、國産メンソールが奈良縣に出来れば、すぐ愛知縣で國産メンソールが出来、滋賀縣にコクサンタムが出来るといふ同志討である。

此の頃紀州有田の除虫菊・蚤取粉の本家本元であつて、ユーゴスラビヤの名譽領事である上山勘太郎がベルメルを製造販賣した。ところが賣藥店へ持つて行くと、メンソレータムに似たものですなあ。と、言ふ。そこでメンソレータムは舶來品だがベルメルは國産品であるといふ事を主張しても、いや近頃のメンソレータムは近江八幡で作つてゐます。といふ。

上山勘太郎は一日沖野岩三郎を訪ねて、ベルメルの廣告文案を示し、國産のベルメル舶來のメンソレータム。といふ廣告をするから、悅藏に諒解を得てほしいと言つた。で、沖野岩三郎が其の事を悅藏に語ると、彼は満面に笑を湛へて、何萬圓も出してメンソレータムの廣告をしてくれるとは、そんな有りがたい事はない。と、言つた。上山勘太郎も考へる所があつてか其の廣告は斷念して文藝雜誌の記事中に割込廣告をするやうになつた。さすがに上山勘太郎は紳士だけあつてメンソレータムに紛

はしい名をつけず實質で競争しようとしてたのであつたが遂に及ばなかつた。

それほどベルメルはメンソレータムの壘を摩することに腐心したものである。此の間の消息を知つた一藥店はメンベル商會と名のつて、メンベルを賣り出した。つまりメンソレータムとベルメルと二つを合せたのである。

オミソレータムといふのがある。近江のメンソレータムだと思はせるのである。すると (近)メンタム (現)メンタールが出る。

メンソレー、メンソリー、メンソリ、メンソリム、メンサリ、メンサル、メンター、メンターム、ほとんど何れが何れやらわからぬ類似品の混戦状態である。日の本メンタムといふ名を考へつけると、同じ日の本メンタムが早くも他で出てゐる。そこで店名を近江屋とする。同じ日の本メンタムでも、こちらは近江八幡の日の本メンタムだといふのであるが、その製造所は近江から數百里西にある。これだけ類似品の輩出したことはメンソレータムの名譽であり、近江兄弟社の名譽の高まつた證據ではあるが、營業上捨て置くわけにも行かないので、辯護士山下彬麿・堀江專一郎の兩人に依頼して、法律的にこれが解決をすることにした。そして或物は買収し或物は新聞紙上に謝罪廣告を掲載させたりした。

月末に彼は大津・米原・今津・武佐・關西學院高商部などで宗教談を試みた。だんだんと元氣が恢



復したのである。彼は此の月の湖畔の聲にこの頃の思ひと題して自己の餘命を論じた。それは第一生命保險會社の餘命表から割り出して自分は今後二十一年三箇月だけ生きてゐると豫言した。つまり六十八歳が彼の定命だといふのである。靜思すればそれはあまりに残り少い歲月である。その歲月を何を以つて君國に奉仕せんかと感慨無量の言を吐いてゐる。天地の悠久に比して人間生活はあまりに短い。その短い生活を最も有意義に過すは信仰生活以外にないといふのである。

六月一日長濱の高等女學校で世界の女性と題する講演をしたあとで翌日は八日市の信者を訪問し、五日は堅田、七日には草津、十日には京都の救世軍、十三日には東京實業家生活會、十四日には小石川福音教會及び下妻教會、二十八日には法性寺村で講演をした。いづれも近江兄弟社の事業に携はりながらの活動である。

七月十一日午後二時から庭内に建築中であつた近江家政塾の落成式を舉行した。

七月二十七日の朝驚くべき報知が彼の耳に齎せられた。それは社員増井庄藏（四十九歳）の家に同居してゐた都司たみといふ七十二歳の遠縁に當る老婆が變死したといふ事件であつた。

都司たみは六年前の昭和六年から増井庄藏の家に同居してそこで世話になつてゐるうち、同年九月に増井庄藏の妻が死亡したので、都司たみは其の遺兒二人の養育をしてゐたが、昭和九年に眼を病んで失明した。けれども増井庄藏は此の老婆を自分で建てた離れ座敷に住はせて其の面倒を見てゐた

が、何としても不自由なので、植木わか（三十二歳）と結婚する事になつたのである。ところが、植木わかがあれば自分は此の家を出なければならぬと言つて非常に反對するので、増井庄藏も其の結婚を躊躇して足かけ三年あまり其のままになつてゐたのである。そのうちに都司たみも増井庄藏に對して氣の毒になつたものと見え、郷里へ歸る仕度をはじめ、大切にしておいた先祖代代の位牌を郷里へ小包郵便で送り返したり自分の着物を知人に分け與へたりしてゐたが、いよいよ増井庄藏は七月二十九日に植木わかと結婚する事になつたので、その前日二十六日に實弟増井重吉を大原市場から呼び寄せて都司たみを其の郷里へつれて行かす事に決定し、これを都司たみに話す際増井重吉は小遣錢として金一圓を與へたか、それを受取らないで増井重吉に返した。そして翌朝六時頃増井庄藏は大阪朝日新聞を讀んだ後子供たちと共に朝食を喫してゐたが、都司たみの來やうが遅いので女中に呼びにやらせると、女中はおばあさんが死んでゐる。と、色を變じて報告し來た。彼は驚いて早速醫師天川政隆を招いて始めて死體を見ると、都司たみは兩足を手拭でしばり少しも取り亂した態度もなく細紐で首をぐるぐる巻に締めて死んでゐた。それから彼は警察署へ届け出たが、警察署では其の死因に疑を懷き京都帝國大學教授小南又一郎に死體解剖を依頼した結果、死後三日の後二十九日に解剖検査したが、夏の事として死體は腐爛に近く首の繩も最初の検案者によつて解かれてあつた。小南又一郎はこれを他殺の嫌疑濃厚なりと斷定した。しかし、死體の腐爛と首の繩が解かれてゐたので問題が残された



のである。

盲目の老婆を數年間自宅に置いて世話をした程の増井庄藏が、たとへ結婚することになつたからとて俄に都司たみを絞殺するなどとは考へられない。首に紐を幾巻もまきつけるといふ事は絞殺の際容易に出来るものでない。ましてや手拭で兩足をしばつて少しも取り亂した様子がなかつたといふのは自殺に相違ない。その前に郷里へ祖先の位牌を送つたといふのも自殺を覺悟したからである。醫師の鑑定ではその日の午前五時頃に絶命したといふのであるが、その頃はもう女中が起きてゐた。女中の起きて働いてゐる時に、絞殺など出来るものでない。七十すぎた盲目の都司たみが、今日は故郷へつれて行かれる。その故郷では果してこんな不自由な老婆を氣持よく引取つてくれるだらうか若しも虐待されるやうな事があつたなら。と、思ふと、どうしても故郷へ歸る氣になれない。そこで思ひ切つて自殺したのだといふのは、素人の悦藏がなした常識鑑定であつた。

絞殺であるならば紐の結び目は大部分後頭部の所にあり稀に右か左にあるものだが、都司たみの場合は前方にあつた。また幾回も巻きつけたことは自殺に相違ないといふのが専門家の説である。小南又一郎は都司たみの顔が鬱血してゐたと言ふが、紐を首に巻きつけると物理的に死の直前顔面の鬱血を來すものとも言ふ。都司たみは手拭で兩足を縛つてあつた。他殺ならばこれは殺した後には足を縛るのが當然である。然るに女中の證言によると其の手拭は枕のカバアに用ひてゐたものである。然る

に都司たみの鼻血が枕に着いてゐて手拭についてゐないのを見ると自ら手拭で足を縛つた後自ら首を絞めたものに相違ないと、有名な鑑識家は認定したのである。

近江兄弟社では早速主腦部が會合して善後策を講じたが、二十九日に増井庄藏が警察署で自白したといふ報を得て驚いた。間もなく増井庄藏は起訴されて一件書類と共に身柄は天津地方裁判所へ引渡された。けれども裁判所へ行つて公判の際増井庄藏の申立は絞殺を全然否定してゐた。

此の事件を一番初めに知つたのは浪川岩次郎であつた。彼は事件發生前後の事情を考察して、これは自殺であると確信したので、小南又一郎の検案書及び一件書類を携へて上京し、東京女子醫學専門學校教授淺田一博士を訪ねて其の鑑定を請うた。浪川岩次郎は嘗て淺田一の法醫學に關する著書を読んで其の造詣の深きに感心してゐたのである。

浪川岩次郎は小南又一郎の検案書を見て首肯しかねる點が多くあり、且つ以前京都にあつた有名な小笛事件に小南又一郎が他殺と鑑定したのを他の法醫學者が鑑定の結果自殺と認定され被告が無罪となつた事實もあるので、淺田一を訪問してその鑑定を乞うたのであつた。

淺田一はその検案書類を精査した結果、これは自殺に相違ないと判定した。そこで此の事を悦藏に告げると、悦藏は其の後更に名古屋醫科大學教授の小宮喬介の鑑定を受けると、彼も他殺とは思はれないと判定した。淺田一も小宮喬介も當時の日本に於ける法醫學の權威者である。



悦藏も増井庄藏を信じてゐた。そこへ此の二人の權威者が自殺説を唱へてくれるので、これはどうしても善き解決を見なければならぬといふので、辯護士山下彬麿と共に心を砕いて其の處置を講じはじめ、元京都帝國大學教授瀧川幸辰、東京の辯護士界で有名な堀江專一郎の兩人を増井庄藏の辯護人として依頼したのであつた。しかし事件は公判の度毎に迷宮に入つて行く。

悦藏は此の一事件から近江兄弟社の名を傷けないやう、延いては湖畔の基督教傳道を妨げないやう、また基督信者全體に迷惑をかけないやうにしなければならぬといふので、一方ならぬ苦心をしたのであつた。

近江兄弟社は過去三十年間黙黙として基督教の教化事業を湖畔の天地に植ゑつつ目に見えぬ國家への奉仕をして來た。けれども一部の宗教家から常に反對せられた。近江兄弟社本部と近江兄弟社女學校の爲に、八幡町長の切なる懇談によつて八幡高等女學校の敷地と校舎を買ひ入れ、手付金まで打つてあつたのを強ひて破約せしめたなど、其の局に當つた悦藏の心中には言ふに言へない苦痛があつたに相違ない。彼はその時言つた。兄弟社の一人一人が有能になり、信仰の勇者智者となり、一世を指導しなければならぬ。(湖畔の声廿四卷四號)

だから彼は熱心に傳道した。教會の事に全力をそそいだ。世間が何と言はうが、來りて見よ。と、叫ぶつもりでゐた。ところへ此の増井庄藏問題が起つたのである。病後の彼は此の事件に言ひ知れざ

る強い打撃を受けた。

八月十八日午前十一時に希夫が神戸へ上陸するので迎へに行つた。希夫は七月十七日に大阪毎日新聞社主催のフィリッピン見學團に入つて、加茂丸で出發したのであつた。その船が下の關沖で衝突したと聞いて驚いたが、幸に沈没を免れ門司に上陸して上海丸に乗り替へて長崎に行き、長崎から上海まで行つてそこから又秩父丸に乗りかへて香港に着き、そこで一週間ゐて今度はプレジデントマツキンレエに乗つてマニラに着いたのであつた。つまり神戸からマニラまで行くのに四つの船に乗りかへたのである。それからマニラに二週間ゐたが、希夫は父悦藏から大學總長オシアス宛の紹介状をもつてゐたのである。極東オリンピック大會の時、悦藏は伊藤忠兵衛と共に歓迎委員になつてゐたので、フィリッピン選手の監督として來た大學總長オシアスが、總裁であらせられた秩父宮殿下に拜謁仰せつけられた際、悦藏は其の通譯を申し上げたのであつた。だからオシアス總長は、此の光榮に感激すると共に悦藏を徳としてゐたのである。その悦藏の長男だときいたオシアス總長は非常に喜んで、早速二人並んで寫眞を撮り、それからケンソン大統領に面會させようと言つて其の官邸につれて行つて會はせてくれたのであつた。

希夫は其の時少しも言葉の不自由を感じなかつた。彼は商業學校在學時代から英語が得意であつた。昭和十年一月三十日の夜近江兄弟社の青年たち二十人を料亭大宗に招いて、父悦藏から鋤燒の馳



走をしたことがある。それは彼が八幡商業學校内の英語誦讀大會で英語の誦讀演説をして一等賞を得たのを祝賀する會合であつた。今度の旅行には關西各種の學校から申込があつて、みな英語に得意であつたが希夫の如くに何の不自由なくあらゆる人人に話しかけたばかりか、大學總長や大統領に直接話しの出來た者は他になかつたことを知つた悦藏は非常に喜んだのであつた。

子煩悩の彼は希夫・のぶ・たか、渡邊稔の四人をつれて八月二十一日に飛彈の高山へ行つて昔ながらの大家族制度の奇現象を見せ、二十二日には黒部溪谷から北陸を経て輕井澤へ出、二十三日には輕井澤町内千ヶ瀧に沖野岩三郎を訪ひ増井莊藏事件について相談し共に祈つた。此の事件は彼を痛切なる祈りの中に追ひ込んだのである。夜も晝もどうぞこれが爲に近江傳道の妨げられないやうにと祈りに祈つたものである。その時沖野岩三郎は慰めて言つた。近江兄弟社は神に護られ人に愛せられる。清友園幼稚園を視察し、育兒問題について數回の講演をしたことのある阿佐谷幼稚園長の高崎能樹は旅行中八幡驛を過ぐるたび、車中で必ず兄弟社のために祈る。そして八幡町の方に向つて、近江兄弟社よどうぞ神様の御保護のもとに發達して下さい。左様なら近江兄弟社の皆様。と、挨拶するのが常である。そんなに蔭になり日向になつて近江兄弟社は助けられてゐるのだ。

その話をきいた悦藏は涙ぐんで感謝した。輕井澤から歸るとすぐ山下彬麿と増井事件について法律的相談をした。

九月十二日の夜西の宮教會で説教をなし、翌十三日の日曜禮拜にも同教會で説教した。そして十六日から氣分を晴らす爲に商用かたがたボロ自動車旅行を企て佐藤安太郎・諸川稔と共に藥店訪問に出かけ、その日は伊勢の桑名で中食をしたため夕方方三河の蒲郡に着いた。十七日には蒲郡から伊豆の三島に行き松清館に泊り、十四日には富士五湖を巡つて八王寺に出で大東園に一泊、十九日雨の中を東京に入り、翌二十日の日曜禮拜は赤坂の靈南坂教會で守つた。そして午後は山下彬麿と共に中島今朝吾中將を訪問し、その後の二日間は山下彬麿と共に丸の内堀江法律事務所を訪ねて事件の打合せをした。ボロ自動車は八幡町へ無事歸着したのは二十四日の午後四時すぎであつた。

十月七日は悦藏にとつて忘るべからざるうれしい日であつた。それは今から三十二年前の明治三十八年二月二日にメレルが金三圓の屋賃で借り受け、後にバイブルクラスを開いて滋賀縣立商業學校の生徒たちを集めた家、殊に悦藏は同年四月八日からメレルと同居生活をする事になつてそこへ移轉した家が、近江兄弟社のものとなつたことである。明治三十八年四月八日の夜からこの家で家庭禮拜が始まつたのであるから、換言すれば後の近江兄弟社は此の夜から始まつたのであると言つてもよい、その記念すべき魚屋町の家、謂ふ所の魚屋町組發祥の家が、町長梅村甚兵衛の仲介で持主西川甚五郎から七千二百圓で近江兄弟社へ買ひ取つたのである。悦藏は村田幸一郎・古長清丸・宮本文次郎らと相談して其の家を、創の家と號した。悦藏はあまりのうれしさに旅先にゐるメレルに其の賣買契約の



すんだことを電報で知らせると、メレルの返電に曰く、パンザイナコツチャ。

創の家を買ひ取つた翌日、彼は大和の空置で開かれた組合教會信徒協議會で一場の講話をした。その大要は、

歐米中心の世界が崩壊せんとしてゐる時、日本人は其の不合理な白人我儘の状態を修正する爲にどんな態度をとつてゐるか。殊に基督教徒は如何なる考慮を拂つてゐるか。吾等は日本帝國に先づ絶對的の忠誠を盡して後世界の問題に就いて考ふべきである。國體の明徴と國策の徹底的關心を基督教會に求め、その翻譯臭ある歐米中心的の宗教行事に根本的革正を促したい。その具體案は、先づ日曜禮拜を早朝禮拜として、禮拜後は一日の自由を得るやうにすべきである。日曜禮拜を十時から十二時までにするのは歐米式の朝寢坊尊重である。日本人は昔から早朝に宮詣でをした。基督教會も其の早朝禮拜にしなければ日本人の氣分にびつたりしない。出来るならば朝食は會集全體で愛餐會にしたい。

次には現在の讚美歌を二十篇程度にして會員はその全部を誦誦してゐたい。一一さんびか集を見なければわからぬやうなさんび歌は有志や合唱隊に任せるがよい。

第三は結婚式である。今の基督教會の結婚式は外國の殖民地で行つた結婚式の様式をそのままに用ひて、不吉な別れ話や、もし此の結婚に文句のある人がここにゐるならば今言へ、さうでなければ

永久に黙れ。と、いふやうな喧嘩腰の言葉を平氣で言ふ不吉な結婚式は止してほしい。

要は今までの基督教行事は徹底的再検討をして、西洋人の仲介なしで、日本人の心をもつて直接神を拜したい。

と、いふのであつた。

十月十一日は日曜であつた。此の日は八幡町が開かれてから三百五十年に當る記念日である。その祝會が町全體に行はれいろいろの催物があつたので、近江兄弟社は積極的にその祝會に参加して喜びを共にしたいといふので事務所の屋上に日章旗を掲げ東館西館の間に大緑門を造り、夜は一同教育會館に集つて大橋寛政が指揮をとり、檜山嘉藏の祈禱があつて、悦藏の挨拶の後、高張提灯を先頭に、樂隊・近江兄弟社女學校生徒・女子従業員・近江兄弟社員といふ順序で、五つの萬燈を押し立て、歌と共に行進して二時間で町内の各町を一周した末、八幡神社境内で萬燈を三唱して解散したのであつた。

十月十二日には堅田の教會で十四年間傳道してゐた西村關一が、近江農民道場設立準備のために堅田町を去つて八幡へ轉任して來た。堅田教會の後任は同志社出身の川上東一であつた。

十月十九日に商用で上京するに際し名古屋で途中下車して名古屋醫科大學に小宮喬介を訪問した。増井事件についての相談をする爲であつた。



十一月十九日に希夫發熱して寢込み、翌二十日には四十度近くなつたが、多分大丈夫だらうと思つたので、二十一日の午後大阪實業家青年聯盟に講演に行き其の夜は堺の大濱に泊り、翌二十二日は堺教會で日曜朝拜の説教をした後、仁徳天皇の御陵に参拜して夜汽車で歸つてみると、希夫の發熱はまだ下つてゐないので、計畫中の滿洲旅行を中止して希夫の介抱をしたが、大阪醫科大學の今村博士に來診してもらふと暫く絶對安靜にさせよと注意せられたが、十二月一日にやつと平熱になつたので胸をなでおろした。急性肺炎の疑が十分であつたらしい。

米國行の船の中で書き終つた馬可傳の試譯は湖畔の聲九月號で完結を告げた。

### 三十二、祝詞奉 上 　　|| 昭和十二年 ||

昭和十二年、悅藏四十八歳で前年からの苦痛を數數持ち越した年である。増井事件は迷宮に入つたまま未だ解決の曙光すら認められない。メンソレータムの類似商標に對する法律上の解決は殆ど片付かないままである。希夫の病氣もまだ全快せず一月一日に始めて庭内へ出てみた程度である。けれども一日の朝は九時から教會に出、十時半から女學校で新年拜賀式、十一時十分から近江療養院の拜賀式に、晩は教會の祈禱會に出て、一日を全く神に捧げたのである。九月には兵主村野田青年會館十周

年記念會に出席して西村關一と共に講演した後一月十一日の夜汽車で東上した。そして、十三日に山下彬麿・西田天香・堀江專一郎・湯淺八郎・中島今朝吾等六人で軍人會館に會食して同志社問題について相談した。

同志社問題は昭和十年六月一日の神棚事件が最初の表面に現はれた事實であつた。神棚事件とは同日同志社高等商業學校武道道場が竣工したので翌二日劍道大會を催すことになつたが同夜高商部劍道部員の或者が學校當事者に何の相談もなく窃に神棚を買入れてこれを道場に安置したといふ事件である。六月二日にいよいよ劍道大會を催すことになつた時、喜多劍道部長から神棚の事を鷺尾校長に報告したので、翌三日鷺尾校長は劍道部理事を招致して事情を聴取した。そして、神棚は指物屋で賣つてゐる。しかし、それを買つて來て取りつけただけでは神棚の安置にはならない。神棚の安置には森嚴なる儀式を経なければならぬ。劍道部が道場に神棚を安置するならば、先づ總長の許可を得、その上教職員の相談を経て慎重にしなければならぬ。漫りに輕輕しくすべき問題でないことを説論して一旦これを自發的に取り下げさせることにして、これを實行したのであるが、同月四日五日の兩日配屬將校三浦國雄中佐から鷺尾校長に質問する所ありしたため事件は再燃して、臨時教育部會を同志社本部に開いて協議したり、湯淺總長鷺尾校長等の第十六師團司令部に河村少將・中蘭參謀訪問となり、常務理事會を二回まで開いて遂に六月二十六日に武道道場に神棚安置の事を議決し、同夜鷺尾校



長は上京して翌二十四日文部省に出頭菊地實業學務局長、田中商工教育課長に面會して事件の經過を報告説明して諒解を得、同日午後湯淺總長・大澤・上谷兩理事を同道して十六師團司令部に澁谷司令官を訪問會見の結果萬事圓滿に解決したのであつた。

要するに此の事件たるや校内に於ける右傾左傾の懸隔から來たもので、神棚問題は解決しても兩者の内訌はまだ其のままだったのである。

翌十一年三月三十一日に教授古屋美貞助教授野村重臣の二人が依願解職となり、同四月十五日に野村重臣は同志社教育肅正の必要と題する小冊子を發行頒布した。五月八日には教授林要の依願解職があり、同月十四日には帝國議會第二分科會で奈良縣選出代議士陸軍少將江藤源九郎の質問中に同志社大學に言及する所があつた。八月二十六日には皇國農民同盟本部の名義で湯淺八郎宛に同志社大學教授の私行摘發の印刷物を送り、十一月九日には同志社教育刷新校友有志の名義で、同志社校友同窓及學生諸兄弟姉に訴ふ。と、題する印刷物を配付するなど、同志社内部の紛擾は容易ならざる形勢に陥りつつあつた。それは同志社大學が共產主義の温床であるから、これを破碎して右傾的の學校にしようといふ一部の畫策が其の原因となつたのである。けれども、悅藏の考へは他にあつた。彼は此の事件を基督教排斥であるとした。日本に於ける最も強力な基督教主義の大學同志社を潰せば他は自然に潰滅するといふ一部の思考が此の同志社問題となつたのだと信じた。彼は自分の一男二女を託してゐる

學校と言ふ意味ばかりでなく、此の際同志社の潰滅を防ぐことは、やがて日本に於ける基督教教育の破綻を防ぐものであると信じ、其の調停に全身を投じたのである。けれども表面的挺身を避け山下彬麿と共に元第十六師團長であり目下憲兵司令官である中島今朝吾に依頼して其の解決をしようとしたのである。

悅藏は一月十三日に中島今朝吾に面會した後十五日には東京日日新聞社に行つて、一月十六日十七日の兩日の大阪毎日新聞・東京日日新聞にメンソレータムの一ペエジ大の廣告を出した其の掲載料二萬圓を支拂つた。これは悅藏の英斷に基き兎に角一度やれといふのでそれを實行したのである。

諸川稔は此頃悅藏から近江兄弟社の現況を映畫化する依頼を受け、湖畔の人人と題するシナリオの募集に着手して、撮影又撮影でとうとう七千七百圓を撮影費に投じてしまつた。諸川稔は自分ながら其の多額に驚いて豫算が超過したことを悅藏に陳謝すると、近江兄弟社頂上の記録だからええがなあ。の、一語で解決してしまつた。先には十ペエジ三萬圓、後には一ペエジ二萬圓の廣告料を投げ出したほどの悅藏である。長く残るフィルムに七千七百圓は安いものだとも思つたのであらう。此のフィルムは後に文化映畫となつて全國的に映寫されたのであつた。



一月十六日の朝八幡町に歸つた彼は午後近江家収塾の新年會を開き、翌十七日は同志社本部に行つて山下彬麿・湯淺八郎と會見した。

一月二十日の朝は第五回近江農村青年學校の開校式に校長として開校演説をした後、午後京都に行つて同志社で湯淺八郎と會見した。

一月二十三日二十四日兩日近江農村青年學校で講演をしたが、二十五日には又もや京都同志社で湯淺八郎・山下彬麿と會見して同志社問題の解決案を練つた。

一月二十九日には近江農村青年學校の開校式を擧げた。講師は山下信義・賀川豊彦・杉山元治郎・山本一清・湯淺八郎・竹中勝男・栗原陽太郎で、校長は悦藏、主事は西村關一であつた。彼は近江教化のため先づ其の農村青年達に基督教的思想を注入しなければならぬ事を痛感してゐたのである。

二月二日から三月五日まで連日はじめの家で近江兄弟社の創立を想ふ小團研究親睦會を開き毎日七八人から十二三人の集會が、午前九時から正午まで、午後五時から九時までの二回營まれた。

一月三十一日にいよいよ高橋卯三郎牧師は引退することになり教會で退隱の挨拶があり、二月七日の第一日曜日の禮拜は内炭政三が説教した。此の日から高橋卯三郎は名譽牧師となり内炭政三が正牧師となつたのである。

内炭政三は京都市伏見町の莫大小屋内炭三次郎の弟である。内炭三次郎はメリヤスの卸賣商をして

ゐたが其の次弟清次郎は或る動機から基督教信者となり遂に傳道者にならうとしたが、一家親戚の反對で其の志を達し得なかつた。けれども程なく病を得て亡くなつた時、その臨終が實に立派だつたので一家がみな感心して其の葬儀を基督教式にすることになり、清次郎を導いたナザレン教會牧師田中信三郎を熊本から招いて司式してもらつたのであつた。

そんな縁故から内炭政三は熊本に行き、後は決心して自由メソジスト神學校に入り大阪の書肆創元社の辭書編纂の手傳ひなどをして修學してゐる中に西村關一と知己になり、卒業と同時に西村關一の紹介で傳道團に入り水口教會に行つて數箇月間傳道してゐたが八幡町の基督教青年會館に轉じて主事を勤むること四箇年、次いで能登川・安土の農村傳道を三年間續けて、此の二月から八幡教會の教壇を受持つことになつたのである。

二月十日から十五日まで悦藏は大阪朝日新聞社から廣告主として招待され錦丸で別府に行き、宮崎神宮・鶴戸神宮・鹿兒島神宮を參拜して來たのであつた。

三月九日に上京した彼は憲兵司令部に山下彬麿と共に中島中將を訪問し、翌十日・十一日の兩回湯淺八郎を伴うて憲兵司令部に中島今朝吾を訪うて同志社問題の解決策について個人的の依頼をして歸つてみると、三月十六日に同志社教授瀬川次郎・村井藤十郎・助教土井十二・佐藤義雄の五人が連署して、同大學教授宗藤圭三・助教田畑忍・貝島兼三郎・林信雄の四人を罷免するやう大學長湯淺



八郎に上申書を提出するといふ騒動が起つてゐた。報を得て同日朝十時同志社に行つて事情を聴き、其の後七回にわたつて山下彬麿・湯淺八郎らと協議を凝した結果、上申組と被上申組との調停を中島今朝吾中將に一任することになつたので、四月十日に中島今朝吾は京都に來り、小林正直・若松華瑤と共に事件調停の任に當り、京都ホテルで關係者一同と會見した結果、四月十四日上申組から、吾等の主張は國體を明徴にし教育綱領の精神を具現して同志社を明瞭なる學園たらしむる如く守り立つる事が其の主張なり、其の主張に就いて自ら信ずる所を飽まで主張す。然れども主張貫徹の爲今回採れる方法が圖らずも學内外を騒がすの結果と成りしことを遺憾とし依つて茲に陳謝す。と、常務理事會宛に陳謝狀を提出し、被上申組からは、

我等は今次の問題につき今日まで同志社内外に不安動搖を起させし根本原因に就き自ら顧みて其責任を感じざるを得ず。此は我等の研究の不足と徳の足らざる所に原因の存するものと認むる故其點に就ては自責の念に堪へず。此際我等の責任を明かにするを至當と考へ茲に進退を伺ふ次第なり。今後教育綱領の精神に基き國體明徴に努力することは素より我等の念願する所なり。

の、一書を常務理事會宛に提出し、總長湯淺八郎も、

我身の非才薄徳を顧みずこの重任に就きたるも任重くして其の責を果すに十分ならず。これが爲校内の統制を保ち得ず學生生徒に少からず不安を感じしめたることは誠に慚愧に堪へず。幸にして諸

君が極めて朗かなる日本精神と基督の眞精神に基き蟠りを一掃し、和衷協同本職を授けて共に國體明徴及教育綱領の具現に邁進することになれるは學生生徒の爲又同志社先輩に對し本職として誠に幸に思ふ。不徳不敏なるも諸君の協力を得て驚馬に鞭ち、同志社の改善充實に最善の努力を拂ひ、以て教育報國の實を擧げんことを期す。

と、誓言した結果、上申書問題は圓滿に解決を告げたので、悦藏も安心して八幡町に歸り、翌十五日は自宅で湖畔の聲の原稿を書いてゐたが、同日同志社大學豫科入學式場で、配屬將校中佐草川靖は、總長湯淺八郎と教育上の所見を異にする旨を新入生徒及父兄に公言したと聞いて驚いた。で、十七日の朝同志社に行つて湯淺八郎・淺野惠二・山下彬麿等と前後策を講じた。家に歸ると翌十八日の朝から安土に行き小學校で六百人の滋賀縣下基督教徒の聯合禮拜に参加して感話をしたが、その時近江兄弟社女學校教諭の松平正次の獨唱した悦藏作の安土を想ふと題する詩は次の通りであつた。

春のみどりは松の色

さくら花さくのどけさや

安土の山の水かがみ

うつす姿はさざなみの

琵琶の海べに吾れ訪ひぬ



空にそびえし七重の  
 天主のありし城のあと  
 織田信長の築きたる  
 やぐら石垣草むして  
 榮華の昔かたるなり

提字須の神は切支丹  
 とほきロウマの宣教師  
 生命をすててわが國に  
 萬里の波濤ふみやぶり  
 ただ一すちに傳へたり

セミナリオとて建てたるは  
 天地の眞理神の國  
 哲理神學きはめつつ

朝夕祈るパライソの  
 しらべもゆかし鐘の音

安土の堀に舟行きて  
 さんびの歌の聞えしは  
 はや天正の昔なり  
 山に祈りの聲せしは  
 三百餘年の過去なりき

四月二十四日には恒春園で慰靈祭を行つた。此の日まで納骨堂に納つた兄弟社天上の家族は總計四十四人で天上の友は二十八人であつた。

四月二十五日と二十七日は京都に行つて同志社問題に就いて協議したが、翌二十八日は疲労して朝から床を離れ得なかつた。しかし午後三時半から内炭政三牧師の就任式があるので臨席して招聘頭末の報告をした。そして歸ると直ぐ床に入つて寝たのである。

彼は精神過勞の結果餘程健康を害してゐた。けれども苦難の同志社を見殺しにするわけには行かない。平靜には見えても今にも爆發しさうな形勢である。それは學内の右傾分子が湯淺八郎を排撃し一



舉に同志社から基督教を放逐してしまはうといふのである。

五月三日に悦藏は上京して同志社挽回運動に着手した。何故悦藏が同志社問題に力瘤を入れたかといふと、同志社を守ることは即基督教を守ることだつたからである。當時の社會情勢は自由思想清掃の初期であり、國體明徴の熟語が盛んに用ひ初められた頃であつたから、當局者の一部分も同志社を共產主義の温床と認め、諸種の事件が起つても殆ど等閑に付してゐたやうである。だから湯淺八郎は全く孤立無援の窮地に陥つてゐた。右傾分子の行動、左傾分子の舉措について内務省に陳情すべく、悦藏が保安課の富田健次を訪問すれば、劍もほろろに湯淺八郎が辭職すればよい。と、叱るやうに言ふ。悦藏の友人代議士松山常次郎が依頼を受けて警保局長を訪ねても局長は面會を謝絶するといふ有様であつた。それは内務省の保安課も警保局長も同志社問題に對しては基督教信者の總長湯淺八郎が辭職して他の人物を總長にすれば事は簡單に治ると思つてゐたからであらう。そこで悦藏は疲勞を推して五月三日に上京して對策にとりかかつたが、これといふ名案もなくして歸つて來た。中島今朝吾・松山常次郎・前田米藏等を訪問して其の智慧を借りたが、歸つてみると國防研究會といふ學生團から今まで同團の會長として推戴してゐた湯淺八郎を爾今會長と認めざる決議文を提出してゐた。それは五月十日の事であつた。

五月十七日には學友會幹事四名が連署して基督教と日本精神は一致しない。新島襄が同志社を建て

たのは基督教傳道の爲ではなく有用なる人材を作る爲であつた。故に正しい國體觀念に基く大同志社を新に建設すべきだといふ事を湯淺總務長宛に建言し、十九日には一部の學生が校内に宣傳ビラを撒布し、同盟休校を煽動するに至つた。其の時悦藏は保養を兼ねて東京日日新聞社の招待に應じて佐渡北陸の旅行に出かけてゐたが、歸宅すると直ぐ京都にかけつけて、山下彬麿や湯淺八郎らと會合協議した。

五月二十一日に海軍大將阿保清種の養嗣子阿保宗人が近江兄弟社に身を寄せることになつた。阿保宗人は二月十五日に家庭の事情から五人の子供を家に残して行方をくらまし、大阪に來て日給一圓五十錢の勞働をしてゐたのであるが、感ずる所あつて五月七日に浪華教會で洗禮を受け、一路更生の旅路を送るべく悦藏に誓つて兄弟社に來ることを許されたのである。

五月二十三日に同志社へ行き湯淺八郎・山下彬麿と打合せ協議をしたが、翌五月二十四日神戸發長江丸に乗り、きよの同行支那視察の旅に上つた。商用を兼ねての保養旅行である。大村甚三郎・岡部五峯・吉田金之介らに見送られて雨の港を出て二十八日にはもう支那の地を踏み清水安三等と楽しく語つてゐた。三十日の朝は北平日本人教會で禮拜説教をし、六月六日の日曜には大連組合教會で禮拜説教をすませ、奉天・上海を経て歸宅したのは六月十七日であつた。其の間に各地のメンソレータム



藥店を訪問して賣行の模様を視察したのであつた。その時船中から希夫宛に送つた手紙に、北平で手紙一本受取りました。相變らず名文で面白いでした。兄弟社の將來は支那内地にメンソレームを賣ることが最も確實で有効です。或は日本以上になるかも知れませんよ。希夫君も一つ支那を研究しては如何。氣の毒な四億の人間を救ふ必要があります。天津丸は白河の川より海に出ました。ジャンクが行き違ひます。母様はそろそろ寝仕度です。今度の旅行は本當に都合よく善い見學でした。商賣の方も来てよかつたです。來年は希夫君をつれて來ませうか。母様の神経痛も一切解消、一日に船中では十七時間も寝るのですよ。明日は大連、三四日滿州に居てあとは青島上海に立よつて早くかへります。留守中用心用心、こちらは大丈夫。

と、あつた。そして十七日に歸宅すると、翌日は京都に行つて同志社問題の協議をしたが何となく風雲急なるを知つて、二十三日の午後三時京都に行き山下彬麿・湯淺八郎と共に其の夜の汽車で上京し二十四日の朝中島今朝吾を憲兵司令部に訪うた。

六月二十八日・二十九日の兩日同志社に行つて校内改革に就いていろいろ協議したが、二十九日の理事會で悅藏を同志社大學の理事に推薦したのであつた。當時の同志社には社内にも社外にも挺身して此の紛糾を整理しようといふ有志に乏しかつたので、彼は基督敎援護の爲に其の理事たる責任を喜んで引受けたのであつた。その時山下彬麿は言つた。吉田君は感情的に人を好き嫌ひしないで、私情

を超越して他人を愛する。吉田君の同志社理事は實に適所に適材である。あまり同志社問題に没頭しすぎると言つて、近江兄弟社では不平を言ふ人も出るだらうが、これは同志社の爲のみでなく、基督敎全體の爲であるから暫く黙過していただきたい。今に同志社は善くなる。

悅藏の胸中には同志社に對してこんな觀察をしてゐた。それは、

一大學園でありながら校舎の設備に於いて著しく貧弱である。

學園の財政が極めて消極的で借入金がない。

教授中に有力なる人材が不足してゐる。

理事會といふ統治機關と教職員との間の協力が不便に出來てゐる。

校友會・同窓會・社友・評議員の制度があつても學園經營に實力がない。

學園に對して五十萬百萬の金を寄附した大口の支援者がない。

學園内に全日本的の指導者がない。

運動・音樂の方面が貧弱である。

工科・醫科・農科等の自然科学學方面に對する學園の進展方面のないのは淋しい。此の點に於いて綜合大學と稱するに相當の距離がある。圖書館が貧弱である。



教授の待遇がうすい。

學園の經營が教授にも學生にも祕密的に見える。

九個の學部が統一してゐない。學園では各學部の獨立を恐れてゐるやうである。といふのである。ではこれをどうすればよいかといふに、左の立案がある。

學園の統治と經營について公論を起し、財政の公開をなし、常に教授・學生・父兄・校友に學園の實情を知らしめて援助を求むる事。

大同志社を五十年百年見通す計畫を立つる事。

來るべき五十年を一期として計算するに同志社の校門をくぐり三年乃至十年の年月を學園に過す生徒毎年一千人づつ入れ替るものと見れば學生五萬人を數ふべし。教職員は一萬人を數ふ。此の合計六萬人が金二萬圓づつを學校債として引受ければ金一千二百萬圓を得ること。

學校債は愛校精神の現れとして無利息とする事。

生命保險相互會や特別公益財團から金一千萬圓を低利にて借入れること。

大學は天下の公器なれば政府を動かして具體的に多大の援助をなさしむるに何の遠慮なきこと。

これは實に先見の明ある立案で、山岡萬之助が總長たる日本大學では此の頃から悅藏の立案と同じ意見によつて大學を經營し、醫科・工科・農科等を置き、且つ學校債を起して財政の基本を確實にし

たのであつた。

悅藏はこんな立案を提げて理事の一員となつてから一週間の後、十二年七月五日、嘗て總長湯淺八郎と教育上の意見を異にすると言つた大學豫科の配屬將校草川靖中佐が歩兵第三十三聯隊付として轉任すると同時に、豫科生の半數三百人が同盟休校の舉に出たり、教授の解職・辭職・休職等いろいろの事件があつて彼の身邊はますます多忙となつて來た。機も機滋賀縣豊郷村の古川鐵次郎は一人で金五十萬圓をぼんと投げ出して日本一の豊郷小學校を新築した。その設計建築は近江兄弟社の建築部であつた。同志社に五人十人の古川鐵次郎が出さうなものである。

悅藏が同志社大學の騷擾渦中に身を投じた事は、彼をして現日本の思想界を知るに頗る手近い徑路を發見せしめたのであつた。彼は此の渦中にあつて日本の基督教が一般人から爲政者からどんなに見られてゐるかといふ事をはつきり知つた。それと同時に基督教徒自身も今少し自己を省る必要がある事を痛感した彼は湖畔の声誌上で、現今の基督教徒は祖先に對する觀念が薄いこと、日本歴史を知らず日本の教養に缺けてゐること、何でもない事に意地を張つて世人と行動を共にしないこと。などを論じた。彼は近江兄弟社の前途を思ふ時、日本の基督教界の前途を思ふ時、心は千千にくだけると告白してゐる。今や日本に於ける眞の基督教徒の生活は並大抵の人の出來ることではない、酒を飲まず煙草を吸はないばかりが信者の行ひではない。考へれば考へるほど眞の基督教徒の行くべき道は荊の道



であり少数者の道である。と、彼は湖畔の青誌上で叫んでゐる。人間の純潔を主張する基督教徒が、純潔を主張するが故に苦難の途を歩まなければならないのかと思ふ時、人一倍の勇氣も出るが、人生はそれでよいのかといふ疑問も起る。

八月四日、増井事件は、天津地方裁判所の陪審裁判に付せられ八時三十五分から同裁判所で陪審公判が開廷されたが、いりつくやうな炎熱の中で審理は続けられ、堀江専一郎・山下彬麿・山本福丸の辯論があり、徹夜二十時間にわたる審理は翌九日午前四時と終結して有罪の宣告を受けたのである。當時日本の法曹界では外國の陪審制度を取り入れてこれを實施しはじめたが、此の裁判の如きは果して陪審制度が最善の審理法であるか否やを判定すべき試金石だったのである。然るに五日午前一時の深更に當つて裁判長山本武雄は陪審員に對つて、正しい偽のないことは理路整然として何人をもうなづかせる。作爲を弄したものは破綻が来る。本件についてはどの點が正しいか正しくないかは、法律家の意見や理論はぬきにして判断せられたい、證據不十分であつても確然とした犯罪があり、小さな原因だからと言つて大きな結果がもたらされぬわけではない。と、説示したのであつた。これは裁判長としては當然の説示であつたらうが、陪審員たちは増井庄藏を有罪なりと答申したのであつた。そこで辯護士たちは其の説示が一方的であつて、有罪説を暗示したといふので大審院に上告したのである。

早朝から未明まで二十時間ぶつ通しの審理に裁判長は辯護人の辯論を十分に聞く餘裕もなく説示の草案を作成したので、辯護人の主張は顧みられず一方的な説示に終つたのであると、辯護士達は言ふのであつた。

昭和十二年八月十三日午前八時、日本の宗教史上忘るべからざる一事件があつた。それは近江兄弟社の吉田悦藏・吉田きよの・佐藤安太郎・浪川岩次郎・西村關一・同志社大學總長湯淺八郎・辯護士山下彬麿・白峯神社宮司石井鹿之助・愛宕神社の社司瀧本豊之助の九人が伊勢の皇大神宮に参拜し、當局者の諒解を得、基督教徒として、近江兄弟社の代表者として、うやうやしく祝詞を奏上し奉つたことである。

天照坐皇大御神の大御前に近江兄弟社代表吉田悦藏畏み畏みも白さく近つ淡海の琵琶の湖のほとり八幡に神を齋き奉り 天皇陛下を仰ぎ尊み奉り先祖を敬ひ崇び皇國を愛護り世界の平和の達成の爲に心を一つにして固めなせる近江兄弟社の一同は昭和十二年八月十三日を生日の足日と撰び定めて遙遙に大御前に参詣で齋廻り清廻りて恐み恐みて祈願奉らくは明御神と大八洲治めし給ふ 天皇



陛下の大御代を嚴御代の足らし御代と堅磐に常磐に齋ひ奉り祝き奉りて 天皇陛下の大御身彌益に健けく麗しく涉らせ給ふ寶祚の大御隆は天壤の與無窮に彌榮えに榮え給ひ蘆津日高の 皇太子殿下を始め奉り竹の園生は彌清清しく立榮え給ひ 皇民たる者は神代ながらの日本精神を振ひ興し皇國體の精華を發揚し 天皇陛下の大御稜威を彌高に彌廣に彌遠に昭輝かしめ奉り大日本帝國を神國として萬國の模範國たらしめ事別て世界の 平和の逸早き現實と近江國に住める七十餘萬の蒼生をして大日本精神に目覺めて其の精華を開かしめむとする吾等の精神的教育的社會的事業を達成しめ給ひ萬事惟神に成運ばしめ給ひ子孫の八十續に至るまで五十榎八桑枝の如く立榮えしめ給ひ夜の守り日の護りに護り恵み幸へ給へと畏み畏みも白す

悅藏の祝詞奏上があつた後山下彬麿の神樂奉唱があつた。その歌詞は、

伊勢の神垣 彌榮やさか

天つ日嗣の 元つみや

五十鈴大宮 幾千代八千代

いつきまつらん みそぎして

と、いふのであつた。皇大神宮は眞に天津日嗣の元つ宮である。社格を超越した大神宮である。佛教

徒といはず基督教徒と言はず、全日本國民の崇敬する大神宮である。未だ佛教僧侶が法服を着して、神前に祝詞を奏上した例の無い時、悅藏が基督教者として此の祝詞を奏上したことは日本の宗教史特に基督教史上忘るべからざる一事であつたのである。

十月一日、宮本文次郎が永眠した。彼は和歌山縣人で滋賀縣立商業學校に學んだが、英語に勝れてゐた爲、卒業後そのまま母校の教師となつてゐたのであつた。メレルが八幡町へ來た時八幡教會でその通譯をして以來、魚屋町の家にもメレルと同居してゐたのであつた。商業學校の英語教師であつたルウツは彼の學才を愛して東京に出で高等商業學校に進むならば其の學資を引受けようとまで言つたが、それを辭して母校に踏止つてゐたのである。明治三十九年に米國に留學したが歸國後は彼が商業學校在職當時の校長安場禎次郎に招かれて大阪大倉商業學校に教鞭を執り後に教職を退いて實業界に入り横濱生糸株式會社に入社して印度の孟買に行つて二箇年、歸國後六箇年間同會社大阪支店の會計課長として厚き信用を受けてゐたが、大正十二年の關東大震災で横濱生糸株式會社は一朝にして没落し、翌十三年五月二十四日全員解備といふ悲境に陥つたので、其の顛末をメレル・村田幸一郎・悅藏の三人に通知すると、久しく待ち望んでゐたと言つて直ちに近江兄弟社へ迎へ入れられ、同年九月に歸郷の辭を發表して入社したのであつた。爾來十四年間財務部長として社内に重く用ひられてゐたのであるが、まだ五十七歳で永久に近江兄弟社の重役を辭してしまつたのである。



悦藏は十一月の初からだんだんと体重が減つて来て十九貫に瘠せた。醫者に見てもらふと糖尿病だと宣言された。原因は精神過勞の結果である。それに十二月の下旬阪大病院南館に入院して、きよのと二人床を並べて外科手術後の静養を餘儀なくされたのである。

増井事件は迷宮に入つたままである。四月五日に悦藏が膳所の刑務所を訪問した時の増井は元氣であつた。全く冤罪であらうといふ信念は其の面會の利那からますます強くなつて来たが、まだ解決はつかない。同志社問題もまだまだ完全に片付いてはゐない。そこへ不治の病といはれる糖尿病が現れて来た。不安な昭和十二年を送つた彼ではあるが、それでも彼の熱心に主張して設立した近江兄弟社女學校が五年目に入り、生徒も一年生から五年生まで揃つて通學するやうになつたことは、彼を喜ばせたであらう。

四月二日に近江療養院禮拜堂献堂式が西川與三郎司會のもとに舉行された。學式關與者はメレル・浪川岩次郎・内炭政三・村田幸一郎・原田信夫・西村關一・高橋卯三郎及び悦藏であつた。久しい間の希望が成就したのである。

四月三日に教育會館で近江短歌祭の催があり、前田夕暮の講演川田順の論文代讀、矢代東村・米田雄郎らの講演があり、悦藏も一場の歌話を試みたことなども彼の心を和かにしたのであらう。

四月十二日に大久保利武侯の來訪を受けた。大久保利武は彼が同志社問題について如何に苦心して

ゐるかを能く知つてゐた一人であつたから、此の來訪は彼の心に多大の慰めを與へられたに相違ない。しかし、彼に取つて臥薪嘗膽の年であり、精神的に肉體的に大きな艱みを受けた年であつた。

### 三十三、多事多忙

|| 昭和十三年 ||

腹部の外科手術を受けて来た悦藏は稍元氣で昭和十三年の春を迎へ、一月一日には近江兄弟社女學校と近江療養院とで二回の講話をした上長命寺まで湖水を見に行つて来た。そして筆硯を清めて新年試筆洗門來福の四字を大書した。四十九歳の生活を顧ると萬事が神の御保護であつた。殊に時は日支事變中である。日本は東洋の平和を作り更に世界平和の大道を亞細亞十數億の民に敷かなければならぬ大責任が國民全體の双肩に繋つてゐる。洗門來福は吉田家一家でなく東亞全體を意味するのである。

一月四日に京都へ行つた。同志社關係の人たち十七名が集つて相談會を開いたのである。まだ内紛外擾は容易に納まりさうにない。

一月九日の夜八幡教會で信仰の三階段と題して説教したが翌日一月十日には京都に行つて同志社總長詮衡會に出た。大勢は西尾幸太郎説であつたが、彼はそれを危ぶんだ。



一月十八日に上京して翌十九日は京橋の延壽の春で催した沖野岩三郎著す所の神社考の出版祝に臨んだ。神社考は湖畔の声に二年間連載した日本宗教史を訂正補削したものである。集りし者は松山常次郎・比屋根安定・加藤一夫・渡邊善太・千家尊宣・石川武美・大下宇陀兒・大西雅雄・大崎治部などであつた。

この頃彼はまた一つの事件に關して盡力しなければならぬ事が起つた。それは彼の親友京都帝國大學教授理學博士山本一清の辭意強制表明事件であつた。

山本一清は膳所中學在校時代の明治三十八年三月十九日に始めて八幡町の魚屋町にメレルを訪問して以來すつとメレルを始め謂はゆる魚屋町組と親しくして來たのである。中ん就く悦藏と懇意だつたので、事情を打明けて相談に來たのである。辭意強制表明事件とは何であつたか。

山本一清は當時日本の天文學界で少壯學者として有名であつた。彼の著書に、標準天文學・登山者の天文學・天文學辭典・日食の話・初等天文學講話・星座の親しみ・天文年鑑（昭和八年—十一年各一冊）・圖説天文講座全八巻などがあつて、從來少數の研究家のみに親まれてゐた天文學を一般に普及せしめた功勞は見逃しがたきものがあつた。殊に昭和十一年六月の北海道とロシアに於ける日食觀測に成效して以來山本一清の名は洽く知られたのである。此の時彼は各國の天文學者と共に昭和十二年に南米ベルウに現はれる日食コロナ觀測の協議をしたのである。若し此のベルウ觀測を逸するなら

ば昭和十五年十月まで日食觀測は出來ないのである。日食觀測の主要問題はコロナの研究である。コロナと太陽黒點との相關關係は理論上にも觀測技術上にも應用太陽學にも最も重要視せられてゐるのであるから、皆既日食が世界の何所で起る場合でも、苟も天文學者たる者は萬里を遠しとせずして觀測に赴くべきであるとして、彼はベルウ行を思ひ立つたのである。殊に當時非常なる緊迫を見つゝある國際情勢より察して歐米の天文學者がベルウまで遠征するか否やは一つの疑問であつた。然るに日本とベルウには汽船の定期航路があり且同地には日本人數萬が居住し居れば、日秘文化交驛の一助にもなるべしと思惟した彼は此の觀測を斷行せんとしたのである。けれども大學にはそんな豫算がない。そこで彼は大阪朝日新聞社の聲援を得、上山勘太郎から金壹萬圓の寄附を得て勇躍ベルウに赴いたのである。そして、三月から九月まで滞在して首尾よく内部コロナの大型寫眞撮影に成效し、日食閃光スペクトルを活動映寫器によつて撮影し得たのであつた。これは實に各國天文學者中彼唯一人の成效だつたのである。彼は此の成效を得た後ベルウ國の學者達と交驛の結果ベルウ國立天文臺建設の設計をしたり、同國大學生を京都大學で指導することなど依頼されて歸つたのである。

これより先彼は廣島縣瀬戸黃道光觀測所・生駒天文臺開設に關係してゐたのであるが、彼がベルウ遠征中、廣島縣廳から京都帝國大學理學部長宛に怪文書が發送せられた。それは廣島縣廳の名を以つて何者かが彼の名譽を毀損する爲に發送した手紙であつた。次いで一萬圓の寄附者上山勘太郎に宛て



京大理學部一學生と署名する長文の山本一清攻撃の手紙を發送したものがあつた。

そんな事とは夢にも知らぬ彼は觀測大成效に嬉嬉として歸國すると、圖らず同僚の數人から辭職を強制されたのである。要するに天文學者間の彼に對する嫉妬で、彼が天文學普及に活躍しすぎたが爲であるといふべきである。

悅藏は其の間の内情を稍精しく知つてゐたので深く彼に同情して其の應援をしたのである。一月二十八日の如きは西村關一・山本一清・山本英子の三人が悅藏の宅に集つて五時間も相談評議の結果、長文の上申書を京都帝國大學總長濱田青陵宛に提出することにしたのである。

翌一月二十九日には山下彬麿・西村關一と共に桃山御陵に參拜した後同志社理事會に出席し更に山本一清と會合した。大學内の反山本派が如何に強制するとも辭表を提出しないと山本一清は主張する。しかし此のまま京都大學に留任しても面白くあるまいから彼を他に轉任せしめて無事に解決しようといふのが悅藏の意志であつたから、二月十日の近江農村青年學校の講演を終つた後、山本一清・山本英子と共に上京代議士松山常次郎を訪問して山本一清の強制辭表提出事件について相談した。

時に同志社新總長候補者西尾幸太郎の大阪中の島公會堂に於ける明治天皇御製誤讀事件と共に家宅捜査事件が突發したので、悅藏は松山常次郎・小崎弘道・牧野虎次等と會合して其の後始末について相談しなければならず、近江兄弟社の課税問題について大藏省の當局と交渉しなければならず、メン

ソレ一タム類似品についての訴訟事件について堀江專一郎の辯護士事務所に往復しなければならず、法醫學の大家淺田一博士を訪ねて増井庄藏事件の鑑定を請はねばならず、組合教會有志信徒會へも出席しなければならず、その上に商用が輻輳して来る。諸川稔・西村關一の來援で三面六臂の活動であつた。けれども此の多忙中にも彼は常に映畫を見演劇を見名勝舊跡を探り、名ある料理を食べることを怠らなかつたので彼の健康は保たれたのである。彼の手帳には至る所の料理屋の名が記入されており、見た映畫演劇の藝題と俳優の名が記され簡單なる批評が書かれてある。

彼は此の頃から兒童讀物に興味をもち、桃太郎・猿蟹合戦から復習はじめ、沖野岩三郎を訪問して其の著作中の童話讀本九冊を買つて歸りそれに讀み耽つたのであつた。これも一種の養生法だつたのである。

一旦辭表を出してあつた同志社大學の理事に再選されたのは二月二十七日であつた。相變らず紛擾調停に奔走しなければならぬのである。

三月一日にはメレルと山下彬麿と共に自宅に會合して増井庄藏の辯護に關する打合せと、メンソレ一タム類似品の件について相談したが、何れも容易に片附く事件ではなかつた。三月十七日には京都で増井問題について終日相談會を開き歸宅したのは翌日の午前一時前であつた。

そんな多忙な中にも彼を喜ばせたのは三月十九日に彼が全力を盡して創設した近江兄弟社女學校が



始めて第一回卒業生十名を出したことであつた。卒業生の一人奥野きよが發表した感想文の中に、私達は此の學校に入學して何を特別に教へられたか、それは言ふまでもなく天の父なる神についてである。神を知つた喜び、それは神を知つた者のみの知ることの出来る喜びである。云云といふ言葉があつた。愛女のぶ・たかの二人が惻隱の心から父に願つて開いた此の學校から始めて五箇年の課程を終へた卒業生の出たことは、どんなに彼を喜ばせたか知れない。彼は子供のやうになつて頻りに兒童文學を愛讀したのである。

三月二十二日に上京して陸軍少將で熱心な基督信者である日疋信亮を訪ねた。日疋信亮は松山常次郎と同郷の和歌山縣人で好んで他人の世話をする義侠人である。松山常次郎・日疋信亮の兩人は爾後彼の友人となり顧問となつたので、彼も大いに意を強くしたらしい。

四月十九日に京都ホテルで開いた同志社總長後任選定會で彼は安東長義・大澤徳太郎と共に牧野虎次を推薦した。そして大澤徳太郎から大久保利武に、大久保利武から牧野虎次に渡りをつけて就任承諾を得たのである。これで同志社問題も一通り解決がついたので、彼は五月十一日の夜、山下彬麿・山本一清・大村甚三郎・吉田金之介等に見送られて神戸出帆の船で鮮滿支の旅行に上つた。彼は釜山・京城・奉天での商用を果し十五日には北京に入り松山常次郎を迎へた。そして十一日間の滯在中喜多少將・池本中佐・大使館堀内參事官・山下中將らを訪問し燕京大學長を訪ねたりした。燕京大學

の天文學部にはまだ天文學の優良な教授が得られないのである。

二十六日に天津丸に乗り込んだ彼は船中で支那學者長野朗に會ひ支那の過去現在未來の話聞きながら大連に着いたのは二十八日の朝であつた。歸途六月三日に馬關梅光女學校で講演の後山陰線で松江・鳥取を経て六月五日に歸宅すると翌六日に山本一清を自宅に呼んで諸種の事情を話した。

六月十二日同志社大學に行つて後任總長問題を相談してゐる時彼は偶と香川景樹作の古歌を想ひ出した。それは、一方になびきそろひし花すすき風ある時もみだれざりけり。と、いふのであつた。以前にも西行法師の作である、世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴門に浪風もなし。の一首を想ひ出した事があつた。つまり内紛外擾は内部の一致を缺いてゐるからである。内部の一致が完全ならば如何なる強風にも怒濤にも平然としてゐられるのである。近江兄弟社も同志社の前轍を踏んではならない。と、彼は考へたのである。

六月十四日に上京して四日間の滯在中山本一清の件について代議士松山常次郎・文部政務次官内ヶ崎作三郎等と折衝し、淺田一博士と増井事件の相談をした。

八月十七日には信州千ヶ瀧に沖野岩三郎を訪問して半日間神社問題の研究をして歸り、二十五日には坂本芙蓉園に於ける滋賀縣下基督教教役者修養會に日本神學校長村田四郎を招待して講演を聴いた。



九月廿五日にメレルと満喜子が、日本の事情を説明するために米國へ行くので神戸から龍田丸に乗り込み横濱まで見送つてそこで訣れ、歸つて來ると直ぐ傷病兵慰安會の準備を整へて十月一日の午後傷病兵八十人を教育會館に招待して午餐會を催し午後慰安會に移り、彼は總ての司會をしたのであつた。

此頃瀧川幸辰との往復が頻繁であつた。

十月十八日の午後八幡驛發にて村田幸一郎と共にまた鮮滿支への旅に上つた。十九日に小倉の西南女學院で一場の講演をして朝鮮に渡り、廿二日には奉天でメンソレータム販賣店建築の救地を物色し、翌二十三日には奉天教會で説教した後、ハルビン・新京の商況を視察した上二十七日には大連に入り、それより北京に向つた。

十一月五日に彼は北京東堂子胡堂二十二に以前李鴻章の住んでゐた家屋を金一萬七千圓で買ひ受けてメンソレータム北京出張所とした。家は數棟に分れ後庭の廣い一棟は清水安三・伊藤榮一の懇請によつて北京日本人基督教會堂として無償で貸與する事後承諾をした。伊藤榮一は三田尻美以教會牧師を辭して献身的の活動をする爲に渡支した人である。

再び大連を訪うて歸宅したのは十一月十一日であるが、翌朝すぐ山本一清夫妻を呼んで辭表提出問題について會談した。それから年末まで山下彬麿・瀧川幸辰と數回の會合を見たが、これといふ名案

も出なかつた。

十二月中に彼自身に取つて嬉しかつた一事は、今年二十歳になつた。たか子が始めて晝夜帯をお太鼓に結んだ姿を見たことであつた。もうやがて孫の初聲を聞くべき自分であると思つて感慨に耽つたに違ひない。

十一月二日に北京で落合つた西村關一はそれから隴海線を開封に行き普通人の通らぬ津浦線を天津から南京對岸の浦口まで南下して北支より南京に入つた日本人の最初の一人となり、戦時の支那を二箇月間視察し、到る所に皇軍の慰問をして年末に歸つたのであつた。

### 三十四、教會禮拜の全國放送

近江兄弟

いのりはひとつ

滋賀のあれのに

神の國

昭和十四年一月一日の朝、悦藏は五十歳の春を迎へて、此の歌を歌つた。



めぐる地球を  
 さかさにもどし  
 若くなりたい  
 いまいちど

此の二つの歌は山下彬麿の作詞作曲であつて、前年東京神田の丸半旅館で其の歌ひ方を教へられたのであつた。とにかくもう五十歳になつたのだ。近江兄弟社創立當時の若さが戀しくなるのも無理はない。彼はこの二つの歌を唄つたあとで雪を踏んで教會の祈禱會に出たのである。

一月十日に彼が昭和四年以來書いては直し直しては書き直した、マルコの傳へしイエス物語が三千部發行された。四六版百三十四ページで定價八十錢であつた。

去年九月二十七日に横濱で別れたメルルは其の後アメリカの諸所で、アメリカは日本と支那とを平和に導くのが天來の使命である。一方的の援助をして戦争を長引かすことを絶対に中止すべきである。支那の背後には恐るべき共産主義がある。アメリカが防共の第一戦に立つ日本の味方をしないのは國策の誤りであることを強く論じた。ボストンの大學學生連合の東亞問題演説會で支那にゐた宣教師と對抗演説をして日本軍の正義を論じた時は學生大會は全會一致でメルルを支持したので、同地の新聞紙に日本の正義を主張するアメリカ人來る。と、いふ標頭を掲げ寫眞入りで數段の記事を載せた

ので、それを見た駐米大使堀内謙介は感謝の電報をメルルに打つたのであつた。

メルルは斯うした講演をアメリカの各地で五箇月続けたのである。メルルはこれを近江兄弟社の銚後献金だといつた。嘗て内村鑑三は叫んで言つた。僕は世界中でアメリカ人が一番嫌ひだ。アメリカ人を心の底から憎む。けれども残念なことに近江八幡にメルル・ヴォーリスが居、東京には大震災の時眞剣に日本の爲に盡してくれたウッド大使がある。この二人だけはどうしても憎めないで、アメリカ全體を憎む邪魔になつて困る。

其の内村鑑三に邪魔者視されたメルルは二月三日に元氣で歸つて來た。近江兄弟社創立三十四年の祝賀式に一日後れて歸つたので、其の祝會は十八日に延期して四百人の會衆に紅白の饅頭を配布した。

三月十四日には第二回傷病兵慰安會を催して大津陸軍病院の名譽の傷病兵百數十人を招待し、三月二十四日には彼の全力を盡しつある近江兄弟社女學校第二回卒業式を舉行した。これで創立後第七年に入るのである。

此の月、元都新聞主筆上泉秀信著の愛の建設者と題する清水安三の半生記が東京羽田書店から發行され、清水安三自著の朝陽門外が朝日新聞社出版部から發行されたので、俄に清水安三は朝陽門外の聖者と呼ばれるに至つた。これについて清水安三は悦藏に書面を送つて、



私は聖者と呼ばれるのがいやであるばかりでなく、あの聖者といふ言葉に反感を初めから抱いてゐるのです。私の好きな型は聖者型ではなくして植村正久だの本多庸一だの宮川經輝が好きです。強い個性が好きです。教育家としても小原園芳だの柳澤政太郎だの福澤諭吉だのが好きです。私は缺點の多い醜なるものの中にも力ある正義を有するやうなファイターが好きです。だからなよなした聖者型はきらいです。

云云と言つて来た。

四月二十三日に、悦藏は神戸の教會で朝の禮拜説教をすませ、午後京都驛で途中下車鞍馬山の青葉探勝に行き善經の大杉の下に立つた時通り魔のやうに雷鳴電彩の空を美しい自然の變化として眺めた。その歸途鴨川岸の茶屋から川を隔てた比叡山上に怪雲の立昇るのを飽かず眺めたのであつたが、何ぞ知らん其の時長命寺と八幡山間の一本杭で、近江兄弟社の事務員の一人である中華民國の王國鈞は湖水に落ちて死んだのである。半年前に悦藏が北京に行つた時、將來北京に於けるメンソレータム販賣の事務を執らせるつもりで、其の父王文元に談判して、國鈞を宜しく頼みます。よろしい私の子のやうに可愛がります。と、いふ挨拶を取かはして伴れて来た十八歳の王國鈞だつたのである。あと一年もすれば支那へ歸らせて近江兄弟社大陸進出の先陣に立つてもらふ筈の王國鈞はまだ十九歳の若さで、いつもテナアの美しい聲で唄つてゐた愛國の花の歌詞を懐にしたまま天上に移り去つたので

ある。

悦藏は悲しんだ。本當にわが子に亡くなられたやうに悲しんだ。で、近江兄弟社と北京間に幾回の長文電報が飛び違ひ、金に絲目をつけずあらゆる方法をもつて父王文元との聯絡をつけ、遂に吾が子の運命とあきらめます。貴社に厚く感謝す。と、いふ返電を得てほつと胸を撫でおろしたものの、葬儀萬端のすんだ後、彼は王國鈞の遺骨・遺髪・遺品を携へて北京に向つたのは、日本全國滋賀縣唯一と呼ばれる縣下基督信徒大會を長濱公園で催した二日後の五月十二日であつた。

彼は泣くに泣かれぬ思ひで大阪商船長安丸に乗り込んだが、船室の中で唯ひとり呆然としてゐた。船が眞暗な瀬戸内海を西へ西へと進む時眠れぬままにいろんな事を考へた。自分もやるだけの事はやつて来た。いつ神の御召を蒙るも喜んで一切を神に任せよう。メレルと三十四年間大した衝突もせず、よくも親しく過して来たものだ。斯うして守り立てて来た近江兄弟社も最早二世時代になる。第一世時代は過去になつた。二世がどんなに伸びて行くだらうか、どうぞ賣家と唐様で書く三代目でないやうに。いや、そんな事はない。近江兄弟社には二世の人物に相當な者が居る。高い山から谷底見れば瓜や茄子の花さかりである。あと十年もすれば自分は北京に隠居させてもらはう。

彼は五月の末に北京で王國鈞の葬儀をすませ、其の一族七十餘人を安福樓に招待して、國鈞の近江八幡に在りし日の事どもを語つて遺族を慰めたのであつた。歸つて来た彼は湖畔の聲六月號に支那の



旅問答を掲げた。

湖畔の青六月號に吉田希夫の書いた、若き支那の友王國鈞君の死を悼む。といふ一篇の長詩は讀者をして肅然襟を正さしめる佳作であつた。

湖畔の青七月號に掲げた斬られた匪賊と題する一文は、彼が圓熟した人生觀を語るものであつた。其の要點は、彼が滋賀縣立商業學校に在學中滿洲に修學旅行をした際、奉天城外で匪賊が青龍刀で斬られるのを見た追想から、人間の死生を觀じたもので、おとなしく首をさしのべた者は一刀の下にきれいに首が地上に落ちて安心したやうに目を閉ぢてゐるが、殺されまいとして首を縮めて暴れる者は二刀三刀で死にきれず落ちた首の眼は怨を含んで吊り上つてゐる。良寛が、災難にかかる時はかかるがよく、大病に悩む時は悩むがよく、死ぬる時は死ぬるがよく候。と、言つた言葉に成る程と頭を下げる。と、いふのである。

七月十日、増井庄藏は遂に大衆院で有罪の宣告を受けた。事件が起つてから滿三年目である。大津の地方裁判所で陪審裁判に付せられた際、小南又一郎は最初の検案書を見ないで證言した爲に都司たみの舌骨が折れてゐたと言つて、陪審員に有罪認定の一條件を唆示したのであつたが、最初の解剖記録にはそんな記事がなかつたので、被告に有利な辯護が出来、必ず無罪放免になると悦藏は信じ切つてゐたのであるが、法の命するところ遂に如何ともすることが出来なかつたのである。

八月十七日十八日兩日、坂本芙蓉園で基督信徒修養會を開いた時、比叡山の大衆院ではメンソレータム工場員と、近江兄弟社の獨身青年の爲の修養會が開かれた。社内製薬工場員の産業報國會はその三日前の十五日に發會式を擧げた。

九月三日の同志社理事會に出席して中島今朝吾中將と協議する所あり、五日には上京して數回中島今朝吾・松山常次郎・田川大吉郎等と會合した。同志社問題も山本一清問題もまだ片附かないのである。

此の頃彼は京都の齒科醫ドクトル堀内清の所に度々通つて齒科治療を受けた。彼が堀内清に齒槽膿漏の手術を受けたのは昭和五年十二月であつたが、爾來毎年夏期前後に發病するので數回の大手術を行つたのである。そして昭和十二年の十二月十二日に齒槽膿漏が全顎に及んでゐるのを見て、これは糖尿病の結果であるから全身的診斷を受ける必要があると忠告したので大阪醫大へ入院したのであつた。つまり彼の糖尿病を發見したのは醫科醫堀内清だつたので彼はこれを徳とし、自分の齒は總て堀内清に一任したのであつた。彼のアルパチルがまだ日本で一般に用ひられない頃彼は堀内清の勧めによつてそれを能く服用したのである。

九月三十日に體量を計つてみると二十貫五百匁あつた。清野博に相談すると、糖尿病であるから一日二食とし、濃茶・黒パン・牛乳・飯一日一椀半・菓子一個・アイスクリーム少量を用ひよと言



つた。

十月十五日の八幡教會朝の禮拜は、粒粒の苦心三十五年の歴史を有する琵琶湖畔近江八幡の日本組合基督教會今朝の禮拜放送を致します。と、いふアウンサアの挨拶後西村關一の聖書朗讀・祈禱、會員の合唱、内炭政三の説教光を求めて、高橋卯三郎の祝禱で、全國放送をしたのであつた。此の日の會衆二百二人。嘗ては牧師一人信者一人といふやうな日曜禮拜を守つた會員が尙壯健である今日に、全國一百九十四の教會・傳道所を有する組合教會中日曜禮拜會衆の數に於いて第一位を占むるやうに發達成長した八幡基督教會の今日の禮拜が全國に放送されたことは、魚屋町組に取つてどれだけ深い感慨に耽つたことであらう。

十月三十一日にはアメリカ・シヤアトル在住の二世十六人が兄弟社を訪問したので、彼は英語で半時間の講話をして來訪者を満足せしめたのであつた。

十一月二日は東京青山學院で全國信徒大會が催されたので、彼は其の八千人中の一人となつて禮拜に参加した。

十一月二十二日二十四日の兩日沖野岩三郎を招いて近江基督教聯盟總會で日本古代史に就いての講義を聞き、二十六日は和歌山縣有田郡廣村玄後宇一郎方で沖野岩三郎と共に講演をしたが、翌日沖野岩三郎は東京へ、彼は南部町に外崎外彦を訪ひ夕方湯崎温泉に行つて二日間静養の上二十九日の同志

社理事會に出席した。同志社の内部はまだ完全でない。

十二月には二回上京した。九日には山下彬鷹と共に松山常次郎・中島今朝吾・沖野岩三郎・日疋信亮等を訪問し、二十六日は神戸から龍田丸に乗つて翌朝横濱に着き其の足で直に上京して松山常次郎を訪ひ午後三時清水安三が支那の留學少女十一人を支那へ伴れ歸るのを横濱に見送つて、其の夜の汽車で八幡町に歸つた。

悦藏とメレルとがメンソレータム創製者ハイドから土産にもらつて來た傳道船ガリラヤ丸は大正三年から二十七年間琵琶湖畔に基督教傳道の爲に用ひられて來たが、十二月二十二日これを賣却することになり、大津の港で内炭牧師司式の下に過去二十七年間の功勞を謝して祈りのうちに別れを惜んだのであつた。

### 三十五、新

體

制

|| 昭和十五年 ||

昭和十五年は皇國紀元二千六百年に當り、近江兄弟社創立第三十六年に入つたのである。三創立者メレル・村田幸一郎と共に當年五十一歳の悦藏も健在ではあるが嘗て二十三貫を超えた體量が十八貫になつてゐる。おまけに大晦日から風邪で三十八度八分の熱があつたので、身體中がだるくて仕様が



なく終日眼を閉ちて暮したのであつた。今年の一月一日に限つて教會の祈禱會にも出られず終日二階の一室に引きこもつて聖書を読んだのである。

一月三日には牧野虎次が同志社總長として來訪した。長い間の苦心が酬ひられてもう同志社の内部も一應整理がついたのはうれしい。六日の朝は事務所の祈禱會に出て近江兄弟社の前途について切實に祈つたが、八日の朝近江兄弟社女學校の始業式講話の際は咽喉の痛みを感じた。

一月二十一日にはメレル・満喜子・村田幸一郎と四人で熱海ホテルに行き三日間近江兄弟社の前途の爲に祈りつつ協議する所があり、二十四日には上京して海軍政務次官に就任せられた代議士松山常次郎を訪ね祝意を表した。そして二十七日に八幡町へ歸り二十八日の近江農村青年學校閉會式で一場の講演をしたが幸に疲労を感じず、翌二十九日にも近江兄弟社女學校で講話をした。

二月二日は近江兄弟社創立滿三十五年の記念日で、メレルは六十一歳になり悦藏は五十一歳になつたのである。社員一同からメレルに赤シャツ・赤頭巾を贈り村田幸一郎と彼とには花束を贈つたのであつた。時は日支事變の見通しもつかず、實業界には如何なる波瀾が起るかも知れない危機を孕んでゐる。近江兄弟社もどうなるかわからないといふのは決して杞憂ではなかつた。けれども彼は言つた。兄弟社は今年限りで沈没してしまつても三十五年の光榮ある歴史は残る。存続すれば郷土の爲に善きものを残すに相違ない。と、此の日まで近江兄弟社が近江の傳道事業醫療事業教育事業に投じた

金額は一百十八萬八千五百七十一圓三十九錢で、前年度の寄附は十四萬一千七百九十圓六十四錢であつた。

二月二十七日に山本一清は近江兄弟社女學校で講義初めをした。長い間の辭表提出問題も解決したのである。

三月に入つて健康を取戻したので七日から十九日まで鎮西旅行を試み、十九日に歸宅したのであつた。旅行から歸ると希夫・のぶ、の同志社卒業の日が來た。希夫は大學部を、のぶは専門學校英文科を卒業したのであるが、たか、は居残つて大學部に入るのである。昨日生れたやうに思ふ希夫がもう大學を出たのである。自分の年齢が五十を過ぎてゐるのも無理はないと思つた。

三月二十三日には近江兄弟社女學校の第三回卒業式を舉行して九人の卒業生を世に送り出した。それがすむと、のぶ・たか、二人をつれて上京して、靈南坂教會で卅一日の禮拜説教をしたり自由學園の佐藤瑞彦を訪問したりして、六日に歸宅すると今度は大陸行である。四月八日に諸川稔同伴八幡を出發して上海から蘇州に行きそこで金五萬圓を投じて土地家屋を買收し、それから南京大連を経て三十日の同志社大學理事會に間に合ふやう駆けつけたのであつた。それでも疲労を感じず翌五月一日の興亞奉公日の講話をなし、翌日は山下彬麿・メレルと共に東京に居て松山常次郎と旅館丸半の二階で會談してゐた。けれども五月五日に八幡町へ歸着した時はさすがに疲れを覺えたので半日寢床の中



で休んだ。

五月十一日附で全日本私設社會事業聯盟から彼は表彰状を授與された。その文面は、  
費下ハ多年我國社會事業發達ノ爲ニ盡瘁セラレ其ノ功績顯著ナリ茲ニ紀元二千六百年記念全國私設  
社會事業大會ニ於テ記念品ヲ贈呈シ之ヲ表彰ス

と、いふのであつた。五月十三・十四の兩日、外地部準備委員會を天津市琵琶湖ホテルに開會、メレル・悦藏・西村關一・村田幸一郎・佐藤安太郎・諸川稔・筒山米次の七人が會合した。

此の會合に於いて各自の瞑想によつて得られた感想は左の通りであつた。

言ひ過ぎる事も嘘の一種である。言ひすぎないやうにしたい。メレル

自分は樂觀しすぎる傾向がある。人が眞面目に話してゐるのに嘲笑したいやうな氣持の動くことがある。よくないことと思ふ。今朝は再び罪を犯すなといふ主の御聲をきいた。悦藏  
自らを顧るよりも人を責むることが多い。

愛と同情と理會とをもつて凡ての問題の解決に當つて行きたい。村田孝一郎

他人の重荷を負ふといふ精神が各人の間に満ちてくれば兄弟社の將來は祝福される。

問題の批判をする人は多いが問題の解決に當る人は少い。後者のやうな人になりたい。諸川稔  
神の聲を聽いて互に虚心坦懷で話し合へば總ての問題は圓滿に解決出来ると思ふ。筒山米次

自己については何物をも要求せず唯神の賜を感謝して頂戴するといふ心境。佐藤安太郎

彼は此の會合のあとで大陸傳道私見を書いて湖畔の聲五月號に掲げた。それは日本の事情をよく知つた英米の宣教師を支那へ轉任させるがよいといふ意見であつた。

五月十五日の午前、彦根工業學校で朝香宮殿下に賜謁仰附けられ其の光榮に感泣した。

五月十六日、數名の社員と共に厚生旅行に出かけ、名古屋・熱田・知多半島・内海・鳥羽・伊勢を經、皇大神宮に參拜して十七日の午後七時に歸宅したが身體に異常はなかつた。のみならず翌十八日の朝早く希夫・のぶ、の兩人をつれて神戸に行つた。それは社員浦谷道三がシカゴへ勉學の爲留學するのを見送りに行つたのである。浦谷道三は兵主村野田の最初の受洗者浦谷泰次郎の實子である。悦藏が二十一歳の時始めて野田傳道に出かけて彼の父浦谷泰次郎を基督教に導いた當時の血氣盛んなりし、放蕩息子の浦谷貞三の事など三十二年前の追憶が彼の胸裡に繁く往來したことであらう。その頃まだ道三は此の世に生れてゐなかつたのである。

生涯を日本に捧げる決心で來朝したメレルは今までに何度も歸化して日本人にならうと考へた。特に大正十三年、例の移民法案が通過した時にはいよいよ實行に移さうとしたのであつた。その時は然しいろいろな事情の爲出來なかつたのであるが、此度の事變が起つた頃からアメリカの態度に憤激したメレルは、歸化して永久に日本人にならうと決心した。それで、彼は六月十日、社内の幹部會で自



己の決心を披瀝したのであつた。けれども此の場合歸化問題は容易に解決出来さうにないので山下彬麿の研究によつて、滋賀縣八幡町慈恩寺町に一柳満喜子の一戸を構へ、メレルを入家せしむることに計畫を進めたのである。満喜子はメレルと結婚した當時日本の國籍を離れて米國の國籍に入つたつもりでゐたが、米國では彼女が東洋人たるの理由を以つて其の入籍を拒んだため満喜子は大正八年以來二十一年間全世界無籍の人としてメレルの夫人だつたのである。若しも満喜子が米國の國籍に入つてゐたとすればメレルの日本人化は困難なる問題となるべきであつたが、米國の排日によつて満喜子は容易に一柳子爵の分家として八幡町の住民となり得られたので、メレルも入家して日本人たる決意が出来たのである。

六月六日に悦藏は山下彬麿と共に上京して外務省に三谷隆信を訪問し、石井菊次郎を訪ね九日に歸つてメレルに事情を報告した。そこで十三日の午前山下彬麿・メレル・村田幸一郎・悦藏の四人は八幡町役場・八幡町警察署を訪問してメレルを一柳満喜子方へ入家手続を取ることにしたのであつた。けれども政府當局がこれを承認するや否やはまだ疑問であつた。

六月十六日には京都西院にある朝鮮人教會に行つて朝の禮拜説教をした。會衆は百五十人の盛會であつた。其の夜雨を冒して堅田に行き會館で説教して魚清樓に泊つた。それから神戸に行き京都に行き新島會館で同志社大學の理事會に出席して歸宅したのは十八日の午後十時半であつたが別に疲労も

感じないで、十九日は平常の通り事務所に出、近江療養院に行つて事務を視た。

此の日希夫は樞原神宮に参拜した。彼は六月四日に佐藤久治と共に富山に行く時新しい名刺を作つた。其の名刺には法學士吉田希夫と印刷してあつた。確に希夫は押しも押されぬ法學士なのである。彼は吾が子の法學士といふ肩書入りの名刺を作つたのを知つて、その事を日記に書きつけた。歡喜の念が胸に満ちたのであらう。

けれども彼の健康はあまりに快くない。此頃また十八貫以下になつた。十八貫と言へば日本人として普通以上であるが、二十三貫を超えてゐた彼としては正に病氣の爲六貫目を減じたのである。彼は近況録に此頃の容態を書いて、六貫目の脂肪を落したので洋服はだぶつき頬骨は張り出し肋骨が二十五年振りに見え出し前に出てゐた腹が背中に引つつかといふ有様。僅か半年で肥え太つた自分と瘦せ衰へた自分とを見て別別の人間のやうに思ふ。近江兄弟社三十五年の苦闘を思へば最早幽界に移轉してゐてもよい頃である。が、同人兄弟のすすめにより今年には靜養を要すとあつて信濃の淺間山の麓輕井澤の板小屋生活を始める。と、發表して八幡町を出發したのは七月四日の朝九時であつた。附添はのぶであつた。翌日彼は輕井澤近江園の住宅を青林山莊と名づけた。

彼は此所で毎日小學國語讀本を讀んで無邪氣な生活をしてゐたが、それでも東京から度度彼を呼び出しに來た。諸種の統制法・商標法・宗教團體法・商工大藏厚生諸省關係の用事が續續起るのであ



る。今までの彼であるならば少しも屈託を感じないであらうが、斯う禁物の頭腦労働をつづけられてはふらふらになる。本當の静養をして元氣一杯で秋の近江に歸りたいと弱音を吐いてゐる。

七月十六日に昔嘶かちか山を讀んでゐると、内閣總辭職の報を受けたので翌日上京して松山常次郎を訪問して上野の精養軒で午餐を共にした。海軍政務次官としての松山常次郎は此の日から元の代議士松山常次郎に還つたのである。

七月二十二日にはのぶに送られて御殿場の東山莊に行き、メレル・村田幸一郎・佐藤安太郎・山下彬麿等と會合して、相談の上、第五十回夏期學校記念のため東山莊の土地の爲に金五千圓を寄附した。二十三日には熱海の岡本旅館でメンソレータム商標問題を討議して輕井澤に歸つた彼は食慾を失ひ疲労を覺えたので體量を計つてみると、十七貫五百目に減じてゐた。

七月二十五日に希夫が來たので晝は共に散歩し夜は聖書と小學讀本とを讀んで氣を落ちつけた。近江八幡の家を空にした一家族は青林山莊に集つて彼を慰め勵ましたのである。

電撃戦・ABC Dといふ言葉が一般に唱へ初められた。防共同盟國のドイツがロンドンを爆撃する。米國は頻りに英國へ軍器を送り、英米は蔣介石を積極的に應援する。日本軍が猛烈に重慶爆撃を敢行するのは正に英米との間接戦争である。アメリカ・ブリテン・蔣介石・ダッチ・即ちABC D四國はもう此の時から日本の敵國であつた。其の敵國の一である英國の宗教運動オックスフォードグル

ープの運動がまだ日本で盛に行はれてゐる。

悦藏は大正七年の冬から大正八年の春にかけてハアトフォード神學校教授ブックマンと共に全國の主要都市を巡回した。彼は大正七年十一月十八日に上京して本郷追分町なる今岡信一良方に宿泊し東京市青年會同盟で牧師教役者百二十人に對するブックマンの講演を通譯したのを最初に、十二月十三日まで殆ど毎日のやうに開會した諸所のブックマン會に出席して其の通譯をしたが、兩者の意氣がびつたり合つて實に名通譯であるといふ評判を得た。山室軍平はブウス大將の通譯をして初めて彼の英語力を日本に知られた如く、悦藏はブックマンの通譯によつてメレル仕込みの英語力を恰く知られたのであつた。翌大正八年になつてブックマンは更に彼を拉して水戸に大阪に神戸に横濱に仙臺に大分に別府に小倉に轉戦した後、大正八年三月十二日に、ブックマン自身八幡町を訪問し翌十三日は事務員總出にて廣告を配り其夜ブックマンの禁酒獎勵大演說會を開いてそれを最後に二人は訣別したのであつた。當時ブックマンの説く所は精神診斷法・人間設計とも言ふべき主旨で、個人を目標とする傳道をしたのである。要は神に祈るだけでなく神の聲を聴けといふのであつた。正直か不正直か。純潔か不純潔か。利他的か利己的か。愛か憎みか。此の四種の精神診斷によつて善人悪人の設計が成立するといふのがブックマンの主張であつた。此の説は後のオックスフォードグループとして日本に傳つて來た。英米依存思想の強かつた當時の日本の基督教界には忽ちに此の宗教運動が瀾漫した。



悦藏は二十年前の昔を追憶しながら靜にオックスフォードグループ運動について其の傾向を凝視した。ブックマンは個人個人の覺醒を促して基督信者は教會依存より離れて各自神の聲を聴けと叫んだのである。それは適切な傳道であつたが、今のオックスフォードグループ運動にはいろいろな要素がある。悦藏は今のこの運動に一箇の意見を持つてゐて、全面的にはどうしても賛成することが出来なかつた。

一方において日本政府は宗教法案の實行を期してゐる。随つて近江兄弟社は従前の如く實業と傳道とを一にすることが出来なくなるので、佐藤安太郎・西村關一・村田幸一郎と共に其の對策を一決したのは八月五日の夜であつた。是に於いて在來の近江兄弟社は財團法人近江兄弟社となり、社會事業と教育事業のみを經營する事となり、これまで近江兄弟社の支持してゐた近江各地の傳道所は財團法人近江兄弟社から獨立して傳道する事になつたのである。

八月十三日の朝八時から輕井澤町大字千ヶ瀧に沖野岩三郎の經營する千ヶ瀧學園の朝會に渡邊稔・米山輝男。たか、の三人と共に出席した。沖野岩三郎作詞米山輝男作曲の千ヶ瀧學園園歌を聴く爲であつた。

悦藏の留守中近江八幡では近江兄弟社にとつて忘るべからざる出來事があつた。それはメレルが一柳家に入家して日本人となる事について八幡町役場・八幡警察署より滋賀縣廳へ、そして内務省へ慎

重なる進達があつた後遂に内務大臣の内諾を得たので、其の第一歩として八月二十日(火曜)に近江八幡の縣社八幡神社の氏子となる立言式を舉行したことであつた。當日八幡神社社司岳直三は神前に、かけまくもかしこき八幡神社の大前に社司岳道三かしこみかしこみも白さく滋賀縣八幡町大字慈恩寺元に先つ頃より住ひせしウキリヤムメレルヴオーリズはこのたびすめらみことの國民の籍に入るべき大みめぐみを蒙ることとなりぬれば今日事のよし告げ奉り大神の御氏子と更に心を改め和み奉らんとするさまを平けく安けく聞し召せと産土神に告げ奉らくを樂しともなつかしき事とし正しく大御世の榮えと國つ波寄せて碎くる清き水かめに入れて交ればわきて變らぬ人人の心に通ふ大八洲神ながら知る由もなき御神徳に入れさせ給ふ御祭りに今日の御饌物うちとの物捧げ奉り大前に始し仕ふる御祭りにしもあれば神職言分けて白さくウキリヤムメレルヴオーリズは明治十三年十月二十八日アメリカの國カンサス州レブンワース町に生れ其の國の學術を修め明治三十八年二月の頃滋賀縣立八幡商業學校英語科の教師となり其の後基督の教を目的とするくさぐさの事わざを起すうちに別きても世の爲人の爲盡せる事多なるに日本の人人にも深く交る事となりぬるままに此の八幡を嚴の住家とは故郷と定め善き國人と我が大御國の手振忘ることなく此のよき年にまた歳六十一の目出たき年を重ね心も誠の道に通ひて今日を生日の足日と固めて變らぬはらからと近江の兄弟となり其の交り深き人人と共に參り集ひ覺えのままに大和の言葉にて心も同じ宣り誓ひ奉らくを平け



く安らげく開しめして大神の御氏子と恵み幸ひ壽長く護り幸多くあらしめたまへとかしみかしこみも白す

と奏し奉つたのであつた。此の祝詞のあとでメレルの立言文奉讀があつた。その立言文は、

宣 誓 書

私 儀

日本帝國の國籍を與へられたる上は日本帝國臣民として皇室に對し奉り全身全靈を捧げ忠誠を盡し日本の國體の精神を遵奉すべき事を茲に謹んで神明に奉誓候  
右宣誓書依而如件

昭和十五年八月二十日

滋賀縣蒲生郡八幡町大字慈恩寺町元十一番地

戸主 一柳滿喜子内

ウキリアム・メレル・ヴォーリズ

と、いふのであつた。これでメレルは全く日本人となつたのである。

式終つて後に現八幡町長岡田正芳の祝辭があり、それに對してメレルは今後残る生涯を日本のため八幡町のために捧げたいといふ答辭を述べた。

此の宣誓式には八幡町前町長であつた滋賀銀行頭取梅村甚兵衛、元町長元縣會議長橋本二郎の立會があり、メレルより八幡神社に神田三段歩を寄進する儀について梅村甚兵衛は其の仲介保證人となつたのであつた。

悅藏は病氣療養のため輕井澤にゐたので此の宣誓式に列することは出来なかつたが、その報告を得て安心した。

九月九日、彼は千ヶ瀧に沖野岩三郎を訪ねたが土井晩翠の別荘に行つて留守だつたので、星野温泉の土井晩翠別荘を訪うて、そこで一時間あまり碁を戦はして輕井澤に歸り、翌翌十一日希夫、のぶ、を伴れて上越線できよのの故郷上ノ山温泉に行き希夫・のぶ、の祖先の墓參をさせたが、其の日賀川豊彦に及ばんとした或危険が警戒網を脱した事を知つて安心した。

墓參を終つた三人は山形・仙臺・松島を経て九月十五日に東京に歸り大崎治部に會つて別後の賀川豊彦の動靜を聞き深き同情を表した。

九月二十日の新體制會議で、彼は財團法人近江兄弟社の理事長となり、村田幸一郎は近江セールズ株式會社の社長に浪川岩次郎を總幹事に西村關一・檜山嘉藏を幹事に推薦した。この時から近江兄弟社に從前關係を有してゐた一切の基督教宣布とその儀式執行は日本組合基督教會の傘下に收めた。暫く靜養し、來た彼の身上に又もや多忙が襲ひかかり組合教會理事會・近江兄弟社關係の傳道所合



同問題・同志社大學理事會・八幡教會特別傳道會・組合教會實行委員會等で、十月二日にはとうとう疲れて終日起きられなかつた。それでも十月十日には東京日比谷で、高松宮殿下の台臨を仰いで開く社會事業大會があるので、九日に急行櫻で上京したが、旅行馴れた彼にも似合はず岐阜驛で自分のカバンを誰かに持ち去られたのであつた。

十月十二日には新宿御苑拜觀の榮を得、十月十三日には高島屋で催された新島襄展覽會に行き、台臨し給へる東久邇宮殿下に賜謁の榮を得、午後一時からの講演會には同志社理事として徳富蘇峰と共に壇上に登つて列座したのであつた。

十月十七日の紀元二千六百年の奉祝會には朝來雨模様でありながら遂に降雨なく、青山學校校庭に集つた基督信徒の數は三萬と號した。

翌日は川上東一らと輕井澤に行き美しい秋の景色を碓氷峠に見て八幡町に歸つたのは二十日の朝十時半であつた。

十月二十三日に沖野岩三郎を迎へて近江兄弟社女學校・清友園保姆養成所で歴史・日本精神についての講演を聞き二十八日には沖野岩三郎を説明係として伊勢に行き皇大神宮・豐受大神宮に參拜することにした。午前八時八幡驛に集合した者は西村關一・栗本清次・古長清丸・佐藤安太郎・小川祐三・鎌田漢三・瀧川健次・諸川稔・村田幸一郎・吉田悅藏・山田寅之助・檜山嘉藏の十二人で、宇治

山田市に着いた上、先づ豐受大神宮に參拜し、次いで五十鈴川で禊をなし、神部署の神樂殿に行き大神樂を奉納して倭舞を奏したる後、西村關一指揮の下に二列縦隊にて皇大神宮南蕃塀に進み板垣南島居をくぐり外玉垣南御門前に整列し西村關一の號令にて最敬禮をなし、それより荒御魂宮・風日祈宮を隨意參拜して裏參道から再び長さ五十間の宇治橋を渡り其の西の袂で一行十二名は新調の國民服姿凛凛しく記念撮影をなし、二見が浦を見物し、悅藏と西村關一は一行と別れて沖野岩三郎と共に神原温泉に行き、翌日沖野岩三郎は東京へ、悅藏と西村關一とは奈良を経て八幡町に歸つたのであるが、悅藏は頗る元氣で少しも疲勞の色を見せず周囲の者にも安堵の念を懐かしめたのであつた。

當時まだメンソレータム類似品に關する訴訟事件の解決がついてゐなかつた。彼は其の示談交渉のため十一月十七日に富山市に行き縣廳に知事矢野兼三を訪問し二十日には中新川郡の立山麓の雄山神社に參拜した。その時彼の希夫に送つた手紙には、

北陸の秋は美しい小春日和で今日は立山麓の雄山神社の昇格祭に參列矢野知事は勅使で私と牧野總長とは顯官待遇であつた。私はとても力強く元氣になつた。今夕東上正倉院の御物を拜觀する。希夫の生命がけ云云の手紙を持つて來て又ホクホク喜んで讀んだ軍隊入は家の名譽だ大に活潑にヤツテ下サイ。

と、いふのであつた。



十一月三十日の午前十一時に樂隊入りの見送りで悦藏の一人息子希夫は勇ましく八幡驛を八幡驛の方へ歩んだ。翌日入隊したのは伏見中部第四十三部隊であつた。

希夫は大學卒業の法學士である。いつまでも星二つではぬまい。やがて三條の金筋に星を重ねる時が来るであらうといふので日本刀を一口手に入れた。それは正廣の作である。沖野岩三郎の鑑定によると備後三原の住備州正廣で古刀第七期中の第五期貞治年間作であらうといふのを、父悦藏に預けて置いて勇ましく皇軍の一人となつたのである。

十二月十一日には爲心町に近江兄弟社圖書館が建設されて其の開館式が行はれた。館長は悦藏で副館長は大橋五男である。此の圖書館設立は彼の多年計畫してゐたことで、それには二つの希望があつた。一は現今の圖書館は單なる買ひ集めで、言はば整頓した古本屋であり、書物に歴史がない。そこで彼の理想は何某文庫の集合にしたいといふのであつた。たとへば夏目漱石の書物全體、森鷗外の書物全體といふやうに故人の藏書全體を集めるならば、その藏書家の趣味傾向がわかり其の著書の因つて来る所もわかつて、一冊一冊に歴史があつて普通の古本を讀むのとはちがふといふのである。そこで彼は去り行く文士たちの藏書を悉く近江兄弟社圖書館に收め得たならば、と、いつて先づ馬場孤蝶の遺書を買收することを企て、沖野岩三郎・村松梢風・安部彰らの盡力で話は餘程進んでゐたのであ

つたが、遂に慶應義塾の圖書館へ納まることになつて非常に残念がられたのであつた。他の一案は北の庄の岩窟に圖書室を作つて貴重なる書物を保管したいといふのであつた。

開館式當日は二百餘人の來賓と晝食を共にし、悦藏の挨拶後、東京帝國大學圖書館司書中田邦造の講演があつた。翌日悦藏は希夫あてに、

圖書館開館式大成功、朗かに。朝十時から夕九時までかかりました。式・講演會・夕食會・二次會とあり少し疲れたれども久しぶりの大祝賀會で一圓のサンドウィッチ辨當蜜柑菓子紅茶をファンダンに出して二百人の會衆に土産はメンソレータム四十五錢五個で大満悦。館の裝飾は博物館式で希夫に見せたい位であつた。うちの骨董や油繪日本畫書物をキレイに一杯飾りました。三十年の蓄積が美事でした。日曜日まで面會に行きません。土曜は朝から同大理事會行で晩は都ホテルです。

と、書いて送つた。紀元二千六百年の記念としては實に意義ある企であつた。此の日比叡山延曆寺文庫から金壹千疋を、八幡町淨土宗別院西光寺柴田玄鳳から支那拓本八卷を祝儀として贈られた。基督敎信徒の經營する社會事業に佛寺より御寄贈を賜るは如何にもうれしい。と、彼は湖畔の声誌上から厚く禮を言つてゐる。

開館式のあつた三日の後彼は近江療養院に行つたついでに岩窟圖書館の設計をした。そしてその翌十六日の日曜には近江兄弟社内の五百人を招待して善哉餅の接待をした。



十二月十九日に希夫は既に一軍人として某地に出發するのである。で、朝早くから京都に行つて東本願寺の境内で希夫に面會して立話をした。そして午後五時十分の發車を見送つたのである。若い一軍人希夫は大叔父吉田金之介夫妻と若い叔父渡邊稔と、病める父悦藏との祈りの顔を後に残して遠き戦地に向つて出發したのであつた。

愛兒を戦場に送つた彼は其の後京・阪・神の間を頻りに往復して忙しい日を送りながら八幡教會・近江兄弟社女學校・近江療養院・近江兄弟社のクリスマスなどで話した。二十六日は近江兄弟社のクリスマスで會衆六百六十人、メレルは去る九月の大病で死を覺悟した話をなし、彼は使徒行傳三章一から十までを主題として足なへの立ちて歩める話と輸血の話とを比較して話した。かうして忙しかつた昭和十五年は暮れたのである。彼はもう健康を取戻したらしかつた。

### 三十六、皇恩骨身に徹す 昭十六年

昭和十六年、彼は五十二歳となつた。一月一日の朝早く家庭の祈禱會があつたあとで圍んだ食卓には希夫のために蔭膳がしつらへてあつた。八幡の町にすら薄雪が降つたのに、寒い所で一所懸命に活動してゐるであらう希夫は輜重兵である。

一月四日の手帖に彼はこんなことを書きつけた。

#### 新年の計畫

平均男子の餘命表によればあと十六七年あり。六十七歳とすれば先づ七十歳まで生きる。大希望の年として力強く生きん哉。

一月早早からこんな事を考へたのは、自分の健康に自信がなかつたのであらうか。いつ書いたかわからないが、同じ手帖のはじめには、

#### 辭世

なきあとの末の末までわれ言はんイエスの途はすめら大道

と、書きつけてある。基督信者が日本に生き日本の皇道に生き行くべき途を彼は堅く信じてゐたのである。彼は湖畔の声一月號に卷頭言を書いて、

キリスト信徒としてはいよいよ深く神を愛し國を愛し盡忠報國の赤誠を實踐し臣民の模範たらんとを期すべきであります。従つて歐米や外國風の迷信を全部清算し純真なる東洋人キリストの眞精神のみを見分け聞き分けて眞の大日本精神に無限人の寄與を試るべきであります。と、言つてゐる。彼の辭世はこの頃に書いたものであらう。